

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第192集

かけ した じょう あと
欠 下 城 跡

2015

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

欠下城跡の所在する愛知県新城市は平成 17 年 10 月 1 日に愛知県の東部を流れる豊川中流域に位置する新城市に旧南設楽郡鳳来町と旧作手村が合併して現在に至る市であります。古くからの豊川の水運と東西にのびる山並みにそった交通路が形成され、時代や風土に応じた人々の営みが育まれてきた地域であります。

この度報告いたします欠下城跡は、長篠城・設楽ヶ原合戦における織田信長公本陣にほど近く、城跡の史跡指定をされてきた遺跡であり、また古代から続く勅養寺に関連する遺跡でもあります。この発掘調査により、平安時代末から戦国時代にかけての遺構と遺物が確認され、城跡と関連する堀切りや寺院と関連すると思われる中世の建物跡が確認されたことは、当遺跡のおかれた歴史を考える上で貴重な資料になったものと思われます。本書の調査成果が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに思っています。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関の御理解とご協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 伊藤 克博

例 言

1. 本書は愛知県新城市矢部字欠下に所在する欠下城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、範囲確認調査が平成20年4月から5月まで実施した。発掘調査は平成22年度が平成22年10月から平成23年2月までで、発掘調査面積は2,500㎡、平成23年度が平成23年5月から同年8月までで、発掘調査面積は1,560㎡である。整理および報告書作成作業は平成25年4月から平成26年3月にかけて実施した。
4. 調査担当者は、範囲確認調査が愛知県埋蔵文化財センターの宮腰健司・早野浩二、発掘調査は平成22年度が愛知県埋蔵文化財センターの松田 訓・蔭山誠一で、平成23年度が愛知県埋蔵文化財調査センターの成瀬政勝・鈴木恵介（現愛知県埋蔵文化財センター調査研究主事）である。発掘調査では株式会社島田組（平成22年度）と株式会社東海アナース（平成23年度）の支援を受けて実施した。
5. 調査にあたっては、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、新城市教育委員会、新城市矢部自治会、勅養寺をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の執筆は第1章第2節を鬼頭 剛（愛知県埋蔵文化財センター）、第4章を中村賢太郎・小林克也・伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林鉦一（以上株式会社パレオ・ラボ）、その他を蔭山が担当した。編集は蔭山が担当した。
7. 整理作業は、蔭山が担当した。整理作業は阿部裕恵・木下由貴子（整理補助員）の協力を得て実施した。また、写真撮影を写真工房遊（金子知久）に委託して実施した。
8. 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
10. 写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（電話：0567-67-4161）
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（電話：0567-67-4164）
12. 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けている。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）
阿部伊三夫・岩山欣一・岩原剛他・上村健介・上村範子・亀甲真史・山岳寺院研究会・城ヶ谷和広・藤澤良祐・山崎正博

目次

第1章	前 言	
	第1節 調査の経緯と方法	1
	第2節 欠下城跡種周辺の地形・地質	4
	第3節 欠下城跡の歴史的環境	6
第2章	遺 構	
	第1節 10Aa区・10Ac区の概要	9
	第2節 10Ab区の概要	10
	第3節 10B区の概要	11
	第4節 10C区の概要	13
	第5節 11A区の概要	14
	第6節 11B区の概要	14
第3章	出 土 遺 物	
	第1節 遺物整理の方法と分類	33
	第2節 各調査区の出土遺物	35
第4章	自 然 科 学 分 析	
	第1節 欠下城跡10Ab区08SK出土の人骨	57
	第2節 欠下城跡出土木材の樹種同定	57
	第3節 放射性炭素年代測定	60
第5章	総 括	
	第1節 遺構の変遷	64
	第2節 出土遺物の変遷とその特徴	66
	第3節 中世における遺構の変遷と遺物の対応	68
	第4節 勅養寺と遺構・遺物の関係	69
	第5節 欠下城址と遺構・遺物の関係	69
付 編	勅養寺裏山の平場遺構	
	第1節 はじめに	71
	第2節 確認された遺構	71
	第3節 まとめ	73
	基本遺構図	74
	写真図版	
	遺 構：写真図版1～写真図版12	
	出土遺物：写真図版13～写真図版19	
	抄 録	

挿図目次

第 1 図	欠下城跡位置図	1	第 35 図	10B 区・10C 区出土遺物 (1:4)	54
第 2 図	調査区位置図 (1:2,500)	2	第 36 図	10C 区・11A 区・11B 区出土遺物 (1:4)	55
第 3 図	欠下城跡周辺の地質図	5	第 37 図	11B 区・範囲確認調査出土遺物 (1:4)	56
第 4 図	欠下城跡周辺の遺跡 (1:50,000)	7	第 38 図	欠下城跡出土木材の 光学・走査型電子顕微鏡写真	59
第 5 図	10A 区・10B 区・10C 区 1 面遺構図 (1:400)	15	第 39 図	暦年校正結果	63
第 6 図	10Aa 区 023SK (1:100)	16	第 40 図	中世における遺構変遷 (1:500)	64
第 7 図	10Ab 区西側の土坑 (1:100)	16	第 41 図	江戸時代における遺構変遷 (1:500)	65
第 8 図	10Ab 区東側の土坑 (1:100)	17	第 42 図	中世における種類別の出土点数	66
第 9 図	10Aa 区・10B 区西側の土坑と溝 1 (1:100)	18	第 43 図	欠下城跡縄張り図	70
第 10 図	10Aa 区・10B 区西側の土坑と溝 2 (1:100)	19	第 44 図	勅養寺裏山の平場遺構 (1:1,500)	72
第 11 図	10Aa 区・10B 区西側の土坑と溝 3 (1:100)	20	第 45 図	2 面遺構平面図 (1:1,000、2 面遺構平面図 の図割り)	74
第 12 図	10Aa 区・10B 区西側の土坑と溝 4 (1:100)	21	第 46 図	2 面遺構図 1 (1:200)	75
第 13 図	10B 区中央部の土坑 1 (1:100)	22	第 47 図	2 面遺構図 2 (1:200)	76
第 14 図	10B 区中央部の土坑 2 (1:100)	23	第 48 図	2 面遺構図 3 (1:200)	77
第 15 図	10B 区中央部の土坑 3 (1:100)	24	第 49 図	2 面遺構図 4 (1:200)・ 11A 区 001SX 断面図 (1:125)	78
第 16 図	10B 区中央部の土坑 4 (1:100)	25	第 50 図	2 面遺構図 5 (1:200)・11B 区 007SK (1:80)	79
第 17 図	10B 区中央部の土坑 5 (1:100)	26	第 51 図	2 面遺構図 6 (1:200)・ 11B 区 002SD～006SD 断面図 (1:125)	80
第 18 図	10B 区中央部の土坑 6 (1:100)	27	第 52 図	2 面遺構図 7 (1:250)	81
第 19 図	10B 区中央部の土坑 7 (1:100)	28	第 53 図	基本層序 1 (1:200)	82
第 20 図	10B 区東側の土坑と溝 1 (1:100)	29	第 54 図	基本層序 2 (1:200)	83
第 21 図	10B 区東側の土坑と溝 2 (1:100)	30	第 55 図	基本層序 3 (1:200)	84
第 22 図	10B 区東側の土坑と溝 3 (1:100)	31			
第 23 図	10C 区の土坑と溝 (1:100)	32			
第 24 図	南部系陶器 碗・皿類と 中世土師器 皿類の分類 (1:4)	34			
第 25 図	10Aa 区・10Ab 区出土遺物 (1:4)	44			
第 26 図	10Ab 区・10Ac 区・10B 区出土遺物 (1:4)	45			
第 27 図	10B 区出土遺物 1 (1:4)	46			
第 28 図	10B 区出土遺物 2 (1:4)	47			
第 29 図	10B 区出土遺物 3 (1:4)	48			
第 30 図	10B 区出土遺物 4 (1:4)	49			
第 31 図	10B 区出土遺物 5 (1:4)	50			
第 32 図	10B 区出土遺物 6 (1:4)	51			
第 33 図	10B 区出土遺物 7 (1:4)	52			
第 34 図	10B 区出土遺物 8 (1:4)	53			

写真・挿表目次

発掘作業風景写真 1～7	3
写真 1 欠下城跡 10A 区におけるトレンチ断面	5
写真 2 欠下城跡 10C 区におけるトレンチ断面	5
写真 3 08SK 出土人骨	57
写真 4 平場①	71
写真 5 平場⑤	71
写真 6 平場⑥	71
写真 7 石階段	73
第 1 表 欠下城跡出土木材の樹種同定結果	58
第 2 表 測定試料および処理	61
第 3 表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	62
第 4 表 南部系陶器の器種別点数	67
第 5 表 中世土師器皿の器種別点数	67
第 6 表 中世土師器鍋の器種別点数	68
第 7 表 古瀬戸・大窯陶器の器種別点数	68

第1章 前言

第1節 調査の経緯と方法(第1図～第4図)

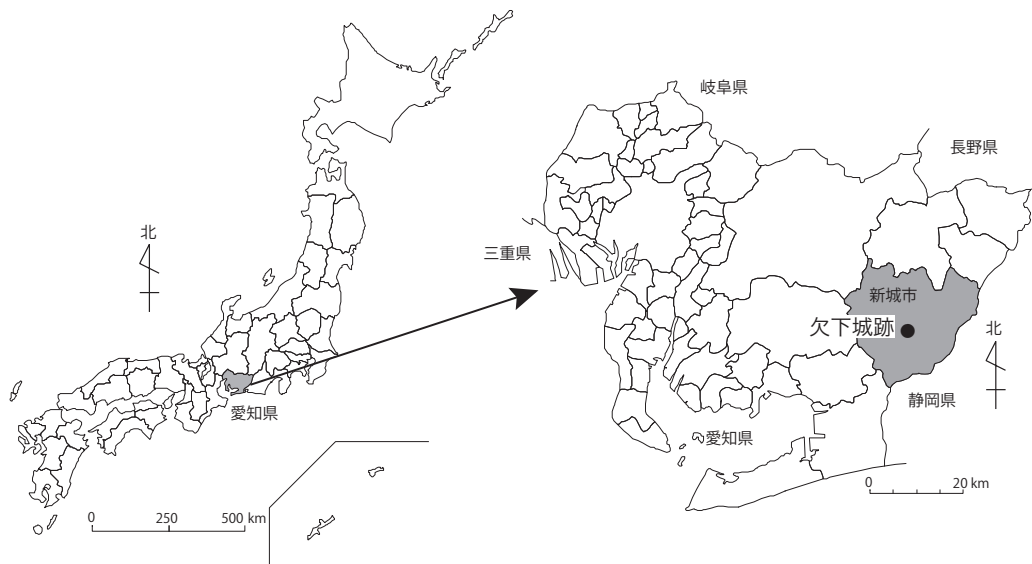
欠下城跡は愛知県新城市矢部に所在する遺跡で(第1図)、JR飯田線東新町駅より北2,400mの地点に位置する。本遺跡は埋蔵文化財包蔵地一覧に欠下城跡(県遺跡番号76175)として周知の遺跡として知られており、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所による第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴い、遺跡の事前調査をする必要性が認められた。そこで愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室から委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査が平成20年4月～同年5月に行なわれた結果、明確な遺構は検出されなかったものの、欠下城跡の立地する尾根上の平坦地には、中世前期を中心とした安定した遺物包含層が確認された。この為、第二東海自動車道横浜名古屋線建設事業に先立って発掘調査が計画され、平成22年度に愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、平成22年10月～平成23年2月の期間で、調査面積2,500㎡を、平成23年度には愛知県埋蔵文化財調査センターが、平成23年5月～同年8月の期間で、調査面積1,560㎡を調査した。整理および報告書作成作業は愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法

人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、平成25年4月～平成26年3月にかけて実施した。

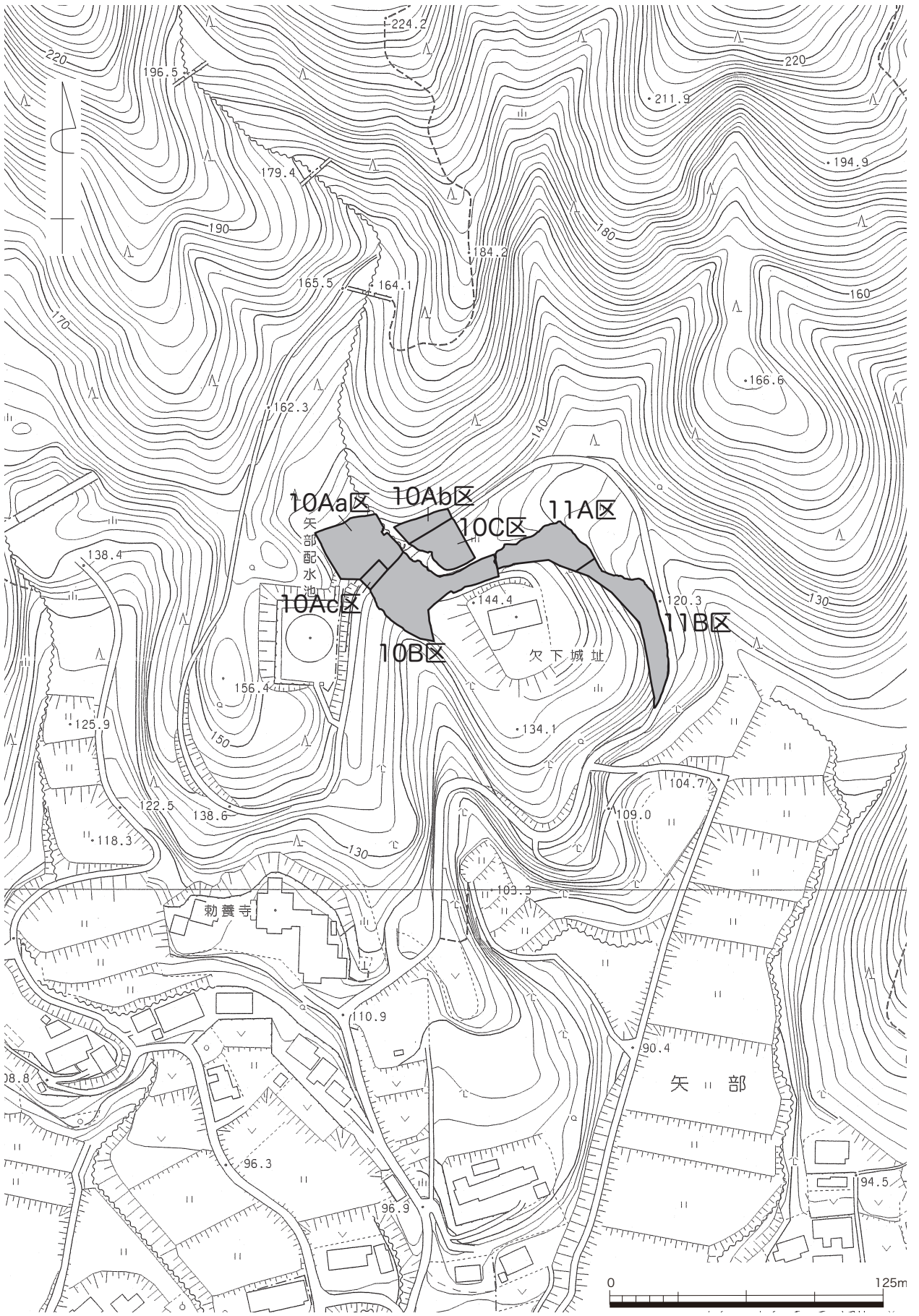
調査面積は4,060㎡で、調査地点は第二東海自動車道横浜名古屋線路線内にかかる地点で、現在の矢部配水池に通じる道路より北西を10A区、道の南東にある欠下城址に続く尾根を10B区、道の南東にある谷部を10C区、欠下城址の東側斜面にかかる地点の北側を11A区、その南側を11B区として調査を実施した(第2図)。また10A区は、10A区にかかる谷川の西を10Aa区、谷川の東を10Ab区に分け、さらに電気の配電を確保する為に、10Aa区の南西隅部を10Ac区に細分して調査を実施した。

発掘調査の工程は、10Aa区を平成22年10月25日～同年12月10日、10Ab区を平成23年10月29日～同年12月6日、10Ac区を平成22年12月17日～同年12月24日、10B区を平成22年11月30日～平成23年2月25日、10C区を平成23年1月19日～同年2月25日、11A区が平成23年5月3日～同年6月20日、11B区が平成23年7月25日～同年8月10日である。発掘調査の終了後、平成25年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法はバックホウにより表土となる腐植土層と近世以後の盛り土・整地層の堆積を除去した後、遺構



第1図 欠下城跡位置図



第2図 調査区位置図 (1 : 2,500)

第1章 前言

検出、遺構検出状況の写真撮影、人力による遺構掘削、遺構の完掘状況の写真撮影、遺構の測量と観察などを行った。

遺跡の地元説明会を平成23年2月19日(土)に実施し、64名の参加者を得た。また山岳寺院研究会の見学(平成23年2月25日)の発掘調査現場の見学があった。



発掘1 表土掘削(10Aa区、南東より)



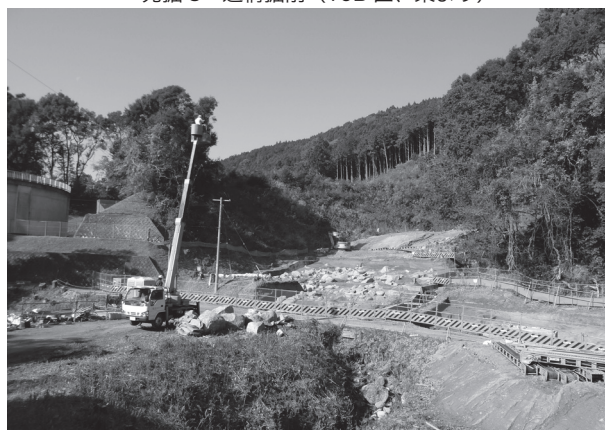
発掘2 斜面の調査・遺構検出(10B区、北西より)



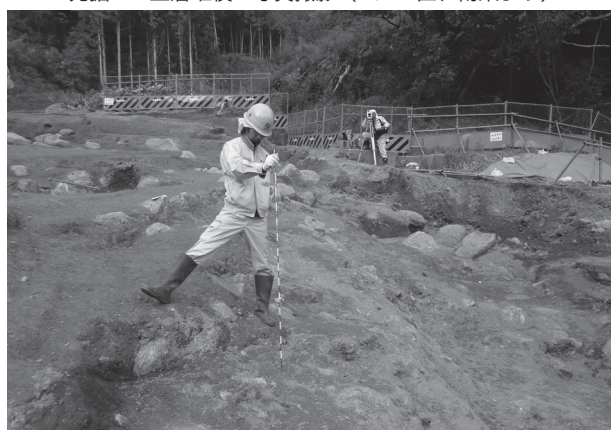
発掘3 遺構掘削(10B区、東より)



発掘4 土層堆積の写真撮影(10Aa区、南東より)



発掘5 調査区全景の写真撮影(10Aa区、南東より)



発掘6 遺構の測量(10B区、南より)



発掘7 地元説明会(平成23年2月19日、西より)

第2節 欠下城跡周辺の地形・地質

欠下城跡は愛知県の南東部に位置する新城市中央部の矢部字欠下にある。調査地点はJR飯田線の新城駅から約2.7km北東の山地縁辺にあたる。本地域の地形は北東から南西方向に流下している豊川を境に大きく2分され、豊川よりも北から北西にかけて山頂高度が約500～600mの三河山地（あるいは三河高原）が、東から南東には赤石山脈（中央アルプス）の南西延長部にあたり山頂高度が約400～600mの弓張山地（あるいは八名山地）がある。調査地は標高600mほどの三河山地の谷地形が丘陵地（段丘）へと谷幅をひろげる場所の山麓斜面にあたり、標高は130～140mである。欠下城跡の調査地付近を南へ流れ下った水はやがて下流で半場川となり、約2.6km南東において豊川と合流する。豊川は愛知県東部の中央構造線に沿って流れ、三河湾に注いでいる。調査地は三河湾の河口から測れば北東へ約21.7km離れている。

欠下城跡周辺の地質は豊川を境にして明瞭に分けられる（第3図）。これは西南日本の地質帯を大きく2分する中央構造線が豊川の流下方向に沿っているためである。豊川の左岸側には主に中生代白亜紀（約9千900万年前～6千500万年前）の三波川変成コンプレックス（あるいは三波川帯）という地質帯が露出する。調査地の周辺にはそのうちの塩基性～超塩基性複合岩体であるカンラン岩や蛇紋岩からなる御荷鉢（みかぶ）ユニット、その上位に黒色や緑色を呈する片岩類からなる舟着ユニットがみられる（Seki, 1961；猪俣, 1978, 1979）。いっぽう、豊川の右岸側は領家深成岩類からなる中生代白亜紀の岩石と、それを覆う新生代の更新統や完新統が分布する（第3図）。特に北東方向からは宇連川が、北からは豊川（寒狭川）が合流する長篠を境にして、そこから南西にひろがる範囲には豊川に沿う河岸段丘が発達することが知られており（例えば、町田・大倉, 1960；木村ほか, 1981, 1982）、欠下城跡から南にひろがる地域にも高位段丘と中位段丘が認められる場所がある（第3図）。調査地の周辺には三河山地を構成する中生代白亜紀の領家深成岩類が広く分布するが、特に調査区の周りには新城トータル岩（杵掛, 2005）が露出しており、調査ではかつての土石流で運ばれた新城トータル岩からなる長径2.5mを超える巨礫がみられた。巨礫は、堆積後

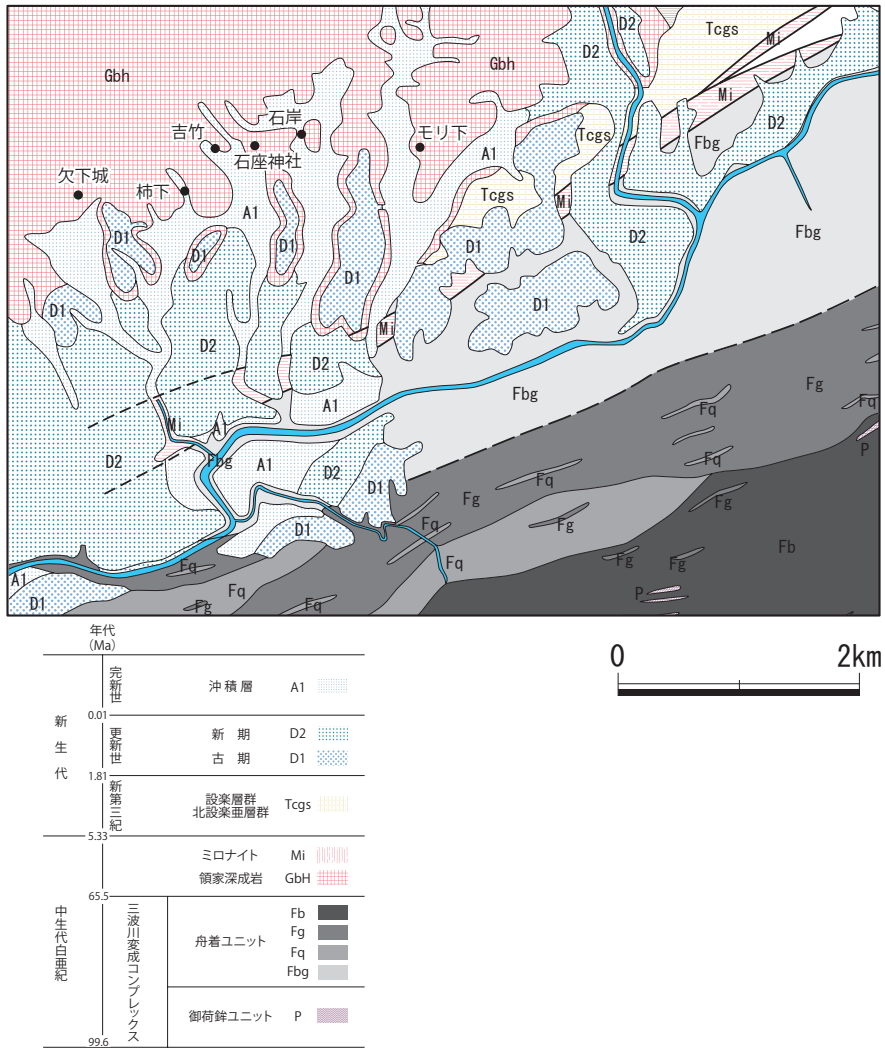
に礫の間を充填した灰褐色や褐色を呈する礫混じりの極粗粒砂層や砂混じりのシルト層により覆われている。それらの砂層やシルト層の堆積年代について、礫を覆う堆積物中に含まれる試料を用いて放射性炭素年代測定を行なったところ、10A区において巨礫を覆う極粗粒砂層（写真1）の基質中に含まれた標高135.6mより採取した灰黒色を呈する土壌が2712 - 2456 cal yrs BP (PLD-26646)、10C区において巨礫を覆う砂混じりシルト層（写真2）の標高132.3mから採取した炭化物が602 - 557 cal yrs BP (PLD-26647)の数値年代を示した。

謝辞

放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループの伊藤茂氏・安昭炫氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomatidze氏・Ineza Jorjoliani氏・小林克也氏にお世話になった。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- 猪俣道也, 1978, 浜名湖北方雨生山・富幕山周辺における“みかぶ緑色岩”と超塩基性複合岩体の地質, 地球科学, 32, 336-344
- 猪俣道也, 1979, 愛知県黄柳野超塩基性岩体のカンラン石はんれい岩とその斜長石, 地質雑, 85, 293-297
- 木村一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄, 1981, 豊川中流および下流の段丘と更新統(その1, 段丘面), 愛知教育大学研究報告(自然科学), 30, 221-232
- 木村一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄, 1982, 豊川中流および下流の段丘と更新統(その2, 段丘堆積層), 愛知教育大学研究報告(自然科学), 31, 195-210
- 杵掛俊夫, 2005, 領家帯, 日本の地質 増補版, 共立出版, 173-174
- 町田 貞・大倉陽子, 1960, 豊川中・下流の段丘地形・地理学評論, 33, 551-563
- Seki, Y., 1961, Geology and metamorphism of Sanbagawa crystalline schists in the Tenryu district, central Japan. Sci. Rep. Saitama Univ., ser.B, 4, 75-92
- 山田直利・加藤碩一編, 1991, 日本の地質図体系 中部地方, 朝倉書店, 136p



第3図 欠下城跡周辺の地質図 (山田・加藤編(1991)の地質図を基に改変)



写真1 欠下城跡 10A 区におけるトレンチ断面
南から撮影
下位の粗粒砂層中より放射性炭素年代測定用の土壌試料を採取



写真2 欠下城跡 10C 区におけるトレンチ断面
南から撮影
下位のシルト層中より放射性炭素年代測定用の炭化材試料を採取

第3節 欠下城跡の歴史的環境（第4図）

欠下城跡(1)のある豊川中流域の右岸には、設楽ヶ原とよばれる豊川の中位段丘面から山地に入る部分に多くの遺跡がみられる。この地域における人間活動は旧石器が出土する杉山にある建長寺遺跡(2)や縄文時代の大ノ木遺跡(3)、石岸遺跡(4)、夜燈遺跡(5)などから始まる。この中で石岸遺跡では平成20年度の調査で縄文時代後期の平面円形の竪穴状遺構が9基確認されている。

弥生時代から古墳時代の初めにかけては、南西から諏訪遺跡(6)、神田遺跡(7)、堂塚遺跡(8)、神ノ前遺跡(9)、荒井遺跡(10)、建長寺遺跡(2)、国広遺跡(12)、古御堂遺跡(13)、タイカ遺跡(14)、谷下遺跡(15)、上ノ川遺跡(16)、野辺神社遺跡(17)、神田遺跡(18)、松尾遺跡(19)、北下遺跡(20)、吉竹遺跡(21)、石座神社遺跡(22)、石岸遺跡(4)、段上山10号墳(23)、南貝津遺跡(24)、八剣遺跡(25)、神宮寺跡遺跡(26)などがあり、多くの遺跡が雁峰山系の山麓付近に展開することがわかる。その中で、古墳時代の初めには、前方後方墳の可能性のある段上山10号墳(23)が築かれ、付近には平成20年度～平成22年度に発掘調査され、竪穴建物跡が確認された吉竹遺跡(21)、石岸遺跡(4)、石座神社遺跡(22)、モリ下遺跡(地図の東側外の新城市八束穂に所在)などの集落遺跡が存在し、この地域が政治的中心地となった可能性がある。また諏訪遺跡(6)では弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居や方形周溝墓が確認されており、上ノ川遺跡(16)においても同様な時期の竪穴建物跡が確認されている。

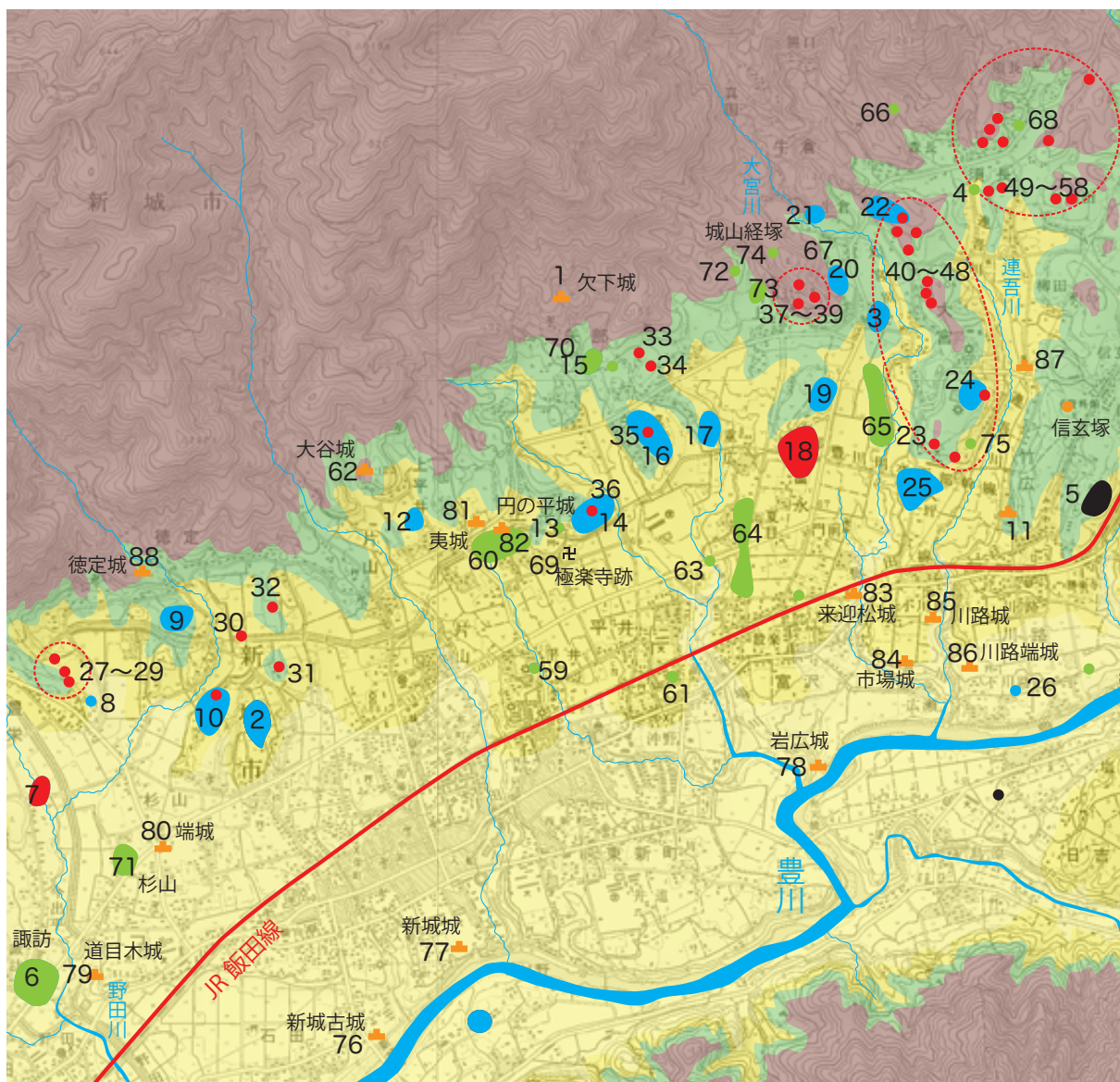
続く古墳時代中期以後の遺構・遺物が知られている集落遺跡は、あまり知られていないが、この地域には多くの後期古墳がみられる。多くは須恵器や鉄製品などの副葬品が出土する円墳が主体であり、堂塚古墳群(27～29)、神ノ前古墳(30)、亀ノ甲古墳(31)、矢入古墳(32)、矢野第1号墳(33)、矢野第2号墳(34)、矢野第3号墳(35)、矢部4号墳(36)、茶白山1号墳～3号墳(37～39)、段上山1号墳～9号墳(40～48)、須長1号墳～10号墳(49～58)、荻平1号墳～4号墳(地図の東側外の新城市川路に所在)などが知られている。こ

れらの後期古墳は段丘の丘陵上に立地しており、平成21年度に発掘調査された須長10号墳(58)のような横穴式石室が残るものがあり、今後の調査が期待される。

古代の遺跡は、段丘丘陵部の緩斜面から丘陵下の平坦面に立地する遺跡が多い。南西から数前遺跡(59)、円の平遺跡(60)、東原遺跡(61)、谷下遺跡(15)、向夏目遺跡(63)、東田遺跡(64)、楠遺跡(65)、しゃくじ遺跡(66)、加原遺跡(67)、石岸遺跡(4)、須長遺跡(68)などがある。先に述べた諏訪遺跡(6)では奈良時代から平安時代前期にかけての竪穴建物跡44棟、掘立柱建物跡10棟などが確認されており、石岸遺跡(4)では、7世紀前半には大溝が掘削され、8世紀～9世紀前半には、多くの竪穴建物跡や掘立柱建物跡が調査された。この遺跡では8世紀後半とされる大型総柱建物が見つかり、この地域に存在した豪族層に関連する施設の可能性が指摘されている。また加原遺跡(67)では平安時代の10世紀後半になる竪穴建物跡が確認されていて、中世の集落に続く端緒と思われるものである。

中世では、欠下城跡(1)の南南西約1.9kmに所在する極楽寺跡(69)があり、欠下城跡の西に隣接する勅養寺(70、古代の中腹寺)も営まれていた可能性が高い。極楽寺跡(69)の北側には鎌倉時代の古御堂遺跡(13)もあり、密接な関係が存在する可能性がある。また南西から諏訪遺跡(6)、杉山遺跡(71)、屋川遺跡(72)、柿下遺跡(73)、城山経塚(74)、北下遺跡(20)、楠遺跡(65)、壇上遺跡(75)があり、段丘の緩斜面から平坦面に営まれた。この中で明確な遺構は確認されていないが、北下遺跡(20)と楠遺跡(65)では、中世の山茶碗・小皿、土師器の皿・鍋などが多数出土している。

室町時代以後には城館跡が形成され、段丘地形の特徴を利用した遺跡が多くみられ、大きく3つに分布に分けることができる。一つは豊川流域の沖積層に面した城館で、南西から新城古城跡(76)、新城城跡(77)、岩広城跡(78)がある。二つ目は豊川へ北から流れ込む支流に面した段丘地形を利用した城館跡で、南西から道目木城跡(79)、杉山端城跡(80)、夷城跡(81)、円の平城跡(82)、来迎松城跡(83)、市場城跡(84)、川路城跡(85)、川路端城跡(86)、滝川氏屋敷跡(87)がある。三つ目は中位段丘面を見下ろす山地上に築か



1. 欠下城跡、2. 建長寺遺跡、3. 大ノ木遺跡、4. 石岸遺跡、5. 夜燈遺跡、6. 諏訪遺跡、7. 神田遺跡、
 8. 堂塚遺跡、9. 神ノ前遺跡、10. 荒井遺跡、11. 設楽氏陣屋跡、12. 国広遺跡、13. 古御堂遺跡、
 14. タイカ遺跡、15. 谷下遺跡、16. 上ノ川遺跡、17. 野辺神社遺跡、18. 神田遺跡、19. 松尾遺跡、
 20. 北下遺跡、21. 吉竹遺跡、22. 石座神社遺跡、23. 段上山 10号墳、24. 南貝津遺跡、25. 八剣遺跡、
 26. 神宮寺遺跡、27~29. 堂塚古墳群、30. 神ノ前古墳、31. 亀ノ甲古墳、32. 矢入古墳、33. 矢野第 1号墳、
 34. 矢野第 2号墳、35. 矢野第 3号墳、36. 矢部第 4号墳、37~39. 茶臼山 1号墳~3号墳、
 40~48. 段上山 1号墳~9号墳 49~58. 須長 1号墳~10号墳、59. 藪前遺跡、60. 円の平遺跡、
 61. 東原遺跡、62. 大谷城跡、63. 向夏目遺跡、64. 東田遺跡、65. 楠遺跡、66. しゃくじ遺跡、
 67. 加原遺跡、68. 須長遺跡、69. 極楽寺跡、70. 勅養寺 (中腹寺)、71. 杉山遺跡、72. 屋川遺跡、
 73. 柿下遺跡、74. 城山経塚、75. 壇上遺跡、76. 新城古城跡、77. 新城城跡、78. 岩広城跡、
 79. 道目木城跡、80. 杉山端城跡、81. 夷城跡、82. 円の平城跡、83. 来迎松城跡、84. 市場城跡、
 85. 川路城跡、86. 川路端城跡、87. 滝川氏屋敷跡、88. 徳定城跡

第 4 図 欠下城跡周辺の遺跡 (1:50,000)

れた城館跡で、南西から徳定城跡（88）、大谷城跡（62）、欠下城跡（1）がある。この中では、この地域周辺で国人領主として勢力誇った山家三方衆のひとりである田峯・菅沼氏の2代定忠が永正年間（1504～1521）に築いた大谷城跡（89）がはじめとされ、その後一族により築かれたのが新城古城跡（76）、杉山端城跡（80）、道目木城跡（79）である。天正3年（1575）の長篠合戦の後に奥平貞昌により築かれたのが新城城跡（77）で、その後天正18年（1590）にこの地域を治めた池田輝政の家臣の片桐一長により石田城跡（地図の南西外の新城市石田に所在）が築かれた。このように中世に形成されていった城館跡は、地域権力が変遷していった痕跡を今に伝えるものであろう。また杉山遺跡（71）と杉山端城跡の発掘調査で確認された溝跡や掘立柱建物跡は、杉山端城跡（80）の周辺に方形区画で区画された地割りやその地割りに沿った建物が形成されたことを示しており、この地域の歴史景観を考える上で興味深いものである。

江戸時代になると、この地域には幕府の公領地が設置されるようになり、新城城跡は慶安元年（1648）に新城陣屋となり、また周辺には新城市竹広に所在する設楽氏陣屋跡（11）や新城市野田に所在する島田陣屋跡（地図の南西外）、新城市清井田に所在する清井田陣屋（地図の西外）が置かれ、明治に入るまで統治の中心となる。

参考文献

- 新城市誌編集委員会編 1963『新城市誌』愛知県新城市
- 北村和宏 1988『杉山遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第5集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 酒井俊彦 1989『諏訪遺跡 杉山端城跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第7集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木隆司 1996『楠遺跡発掘調査報告書』「新城市埋蔵文化財調査報告書X」新城市教育委員会
- 渡辺敬一 1997『北下遺跡発掘調査報告書』「新城市埋蔵文化財調査報告書XII」新城市教育委員会
- 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 2009「吉竹遺跡」・「加原遺跡」・「石岸遺跡」・「モリ下遺跡」『平成20年年報』
- 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 2010「モリ下遺跡」・「須長10号墳」『平成21年年報』
- 澤田孝編 2012『新城城跡発掘調査報告書』新城市教育委員会
- 永井邦仁編 2012『柿下遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第176集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 日紫喜勝重編 2013『新城城跡発掘調査報告書II』新城市総務部・新城市教育委員会
- 日紫喜勝重編 2013『武田勝頼戦地本陣跡発掘調査報告書』新城市総務部・新城市教育委員会

第2章 遺構

今回の発掘調査地は、丘陵の斜面部分から、平坦面、そして丘陵に挟まれた谷部に至る範囲に及ぶため、調査区により堆積状況が大きく異なり、調査も堆積状況に応じたものとなっている。以下では、調査区毎に層の特徴を述べ、各調査区の遺構について述べる。

全体の基本遺構図について、1面平面図は第5図、2面平面図は第45図～第52図、基本層序は第53図～第55図にある。

第1節 10Aa区・10Ac区の概要

(第5図・第6図・第9図～第12図)

10Aa区・10Ac区は調査区の北からつづく谷部にあたり、発掘調査前は昭和40年頃まで耕作されていたと思われる棚田にヒノキの植林が行われた状態であった。調査前の標高は標高140.0m～143.0m前後で、調査では、表土となる腐植土と昭和の棚田の耕作土、昭和の棚田を造成した際に埋めた谷の堆積をバックホウにより除去して1面の遺構調査を行った(第5図)。昭和の棚田に伴う耕作土を除去すると、近世後期～近代の棚田と思われる整地面が検出され、調査区東側の谷に沿うものであった。近世後期～近代の棚田に伴う耕作土は、10Aa区の北西側で検出した001SNと002SNで確認できたのみで、その他は昭和の棚田に伴う造成により削平されているものと思われる。また1面の近世後期～近代の棚田造成面は、調査区内に山側から3段あり、山側の上段の谷側と北東側は近世以後の盛土により整地されていた。この棚田に伴う道は棚田造成面の東側を谷に沿ってはしるものと考えられ、10B区の南西からつづく道である。10Aa区の南西隅部にて確認できた北西から南西に花崗岩が4個並ぶ石列は、この道の西側の土留めにあたるものと思われる。

近世以前の堆積を2面の遺構調査として行った。2面の調査では、近世後期～近代の棚田造成面においてすでに上部がみえていたが、その下は、土石流と思われる自然流路を上から004NR、005NR、010NR上層、

010NR下層に分けておおよその平面を確認した。これらの自然流路は、長径1mを超える花崗岩の巨礫が多数含まれる自然堆積であり、出土遺物から004NRと005NRは江戸時代、010NR上層と010NR下層は中世の遺構と考えられる。010NR下層の下もより古い自然堆積であり、大小の花崗岩礫を多数含むものであった。以下は個別の解説を述べる。

1面の棚田：3段の造成面がある。山側から上段は標高142.0m～142.5m前後にやや谷側が下がる傾斜をもつもので、谷側から北東側に近世以後の盛土が行われている。規模は谷側の造成面を守るためと思われる石列が設けられていた。中段は東にある谷から西に標高140.7m～140.1m前後にほぼ水平に造成されているもので、谷側が幅2m程流れている。下段は東にある谷から西に標高137.5m～140.0m前後に南の谷側が下がる傾斜をもつもので、中央付近には近年の攪乱が2ヶ所及んでいた。その為本来はより平坦な造成面が存在したかもう一つ別の段が造成されていた可能性もある。

001SN・002SN：棚田の中段、東の谷に面して残存していた水田耕作土と思われる一連の堆積で、どちらも暗青灰色粗粒砂混じり粘土の部分を検出した。001SNは長軸3.55m、短軸1.05m、深さ0.05mで002SNより山側で新しく、002SNは長軸6.89m、短軸2.01m、深さ0.10mで、造成面の張り出す平面に対応するので分けているが、両者は一連のものである可能性もある。

003SD：近代以後のもので、10Aa区の谷から南にある10B区の西側谷の上に造成されていた旧水田に導水する暗渠水路で、10B区の030SDに続く。溝の底付近には径3cm～径5cmの針葉樹の幹・枝を束ねた状態で設置しており、規模は幅0.56m、深さ0.82mであった。溝の上層堆積は最も新しい谷の堆積の上部を被っており、溝の機能時は空いていた可能性が高い。

004NR・005NR：江戸時代の一連の谷堆積で、下流は10B区の012NRや015SD・10B区の西側谷堆

積につながる。埋土は004NRがオリーブ褐色・黄褐色・にぶい黄褐色の細粒～粗粒シルトで花崗岩の細礫を多量に含むもので、005NRが暗灰黄色粗粒シルト～極細粒砂で花崗岩の細礫を多量に含むものであった。005NRは004NRに比べて暗い色調の堆積であった。どちらの自然流路も谷全体に及んで堆積したものであると思われるが、004NRは谷の西側を中心に堆積があり、005NRは谷の東側に堆積が残っていた。

010NR 上層・下層：中世の谷堆積で、下流は10B区の035NRに主につながるようである。004NR・005NRの下にある暗褐色～黒褐色の細粒シルト～粘土質シルトに花崗岩の細礫から巨礫までを多量に含む堆積であった。どちらの自然流路も谷全体に及ぶもので、谷の西側を中心に堆積が残っていた。

015SD：10Aa区の南隅部に検出された遺構で、10B区の西側谷を埋める堆積につながる土石流と思われる自然流路の谷頭部である。埋土は暗褐色細粒シルトで、遺構は近世後期以後の水田耕作土より古いが、004NR・005NRより新しいもので、江戸時代の遺構である。

023SK：調査区東側の005NRの底面にて検出したもので、長径1.08m、短径0.83m、深さ0.14mの土坑である。埋土はオリーブ褐色細粒シルトに焼土と炭化物を含むもので、底面には焼土面が確認できた。

024SK：調査区南東隅部の東壁にかかる位置に検出された土坑で、径1.30m程、深さ0.40mの土坑である。埋土は暗灰黄色細粒シルトであった。

第2節 10Ab区の概要（第7図・第8図）

10Ab区は10Aa区・10Ac区を流れる谷の東に位置し、調査前の標高は標高137.0m～139.0m前後で、調査では、表土となる腐植土と昭和の耕作土、水道のポンプ室に伴う堆積をバックホウにより除去して1面の遺構調査を行った。昭和以後の耕作土を除去すると、近世後期～近代の造成面が2段検出でき、ほぼその造成面にて2面の溝と土坑、柱穴などを検出できた。1面の造成面は、上段が標高138.0m～138.5m前後、下段が標高137.0m～137.5m前後に形成され、規模は上段が長軸7.0m、短軸1.0m、下段が長軸9.0m、

短軸1.6m前後を確認した。造成面に伴う耕作土はほとんど残っていなかった。またこの造成面の下は10C区の谷部分につづく。

2面の遺構は、上段と下段の造成面（地山面）に検出でき、埋土は黄褐色～褐色細粒砂・細粒シルトの地山の色調に似たものから、暗褐色～黒褐色粘土質シルトの比較的明確に判別できる埋土をもつものがあった。遺構の埋土が黄褐色～褐色細粒砂・細粒シルトの埋土の遺構は、006SK・007SK・009SP・026SP～035SP・037SP～041SP・043SP～053SP・055SKで、暗褐色～黒褐色粘土質シルトの埋土の遺構は、008SK・011SP・017SP～022SP・025SK・036SP・042SP・054SK・056SDであった。出土遺物はあまりないが、001SPから中世土師器鍋片、006SKより南部系陶器と中世土師器鍋片、008SKから中世土師器小皿、009SPより南部系陶器片、011SPより中世土師器皿片が出土している。以下に個別の遺構について述べる。

10Ac区の柱穴：調査区西側と東側で遺構が集まっていて、それぞれ径0.25m～0.60m前後の平面円形の柱穴がいくつかみられる。これらから掘立柱建物を構成するような組み合わせが抽出することはできなかったが、埋土が類似するという条件で関係づけると、調査区西側で011SP・017SP～021SPは不定間隔であるが地形に沿って東西に並んでおり、同様な色調の022SPや036SPと組み合わせ可能性がある。またその周辺にあるその他の柱穴も地形に沿った東西方向に点在する傾向が見られる。調査区東側では039SP・053SP・051SP・052SPが3.0m～4.3mの不定間隔で並んでいるものと038SP・040SP・043SP・050SPが2.3m～2.9mの不定間隔で並んでいるものがある、ともに地形に沿って東西方向に並ぶ。この中で011SPは柱穴中央に径20cm程の柱痕跡らしき堆積が確認できる。

006SK：長径1.30m、短径1.23mの平面円形の土坑として検出できた。掘削すると、土坑の東側は埋土が黄褐色細粒シルトで深さ0.20mの皿状の形態であるが、西側は埋土が褐色細粒シルトで、深さ0.30m前後にやや柱穴状にくぼむ部分が確認できた。断面による観察では、もう一つ別の柱穴が重複している可能性がある。中世の南部系陶器の碗（E027）が出土しており、

中世の遺構と考えられる。

007SK・057SK：当初一つの土坑として検出したが、断面観察の結果、東側の007SKが長径1.47m、短径0.95m、深さ0.33mの平面楕円形の丸底の土坑、057SKが長径1.65m、短径1.01m、深さ0.43mの平面不整形の丸底の土坑と判明した。埋土はどちらの土坑も上層が褐色細粒シルトであるが、007SKの下層が黒褐色粗粒シルト、057SKの下層が暗褐色細粒シルトで、類似した堆積構造をもつものであった。007SKから出土した白磁の碗（E037）は、12世紀後半～13世紀初頭のもので、遺構もこの時期に考えておきたい。

008SK：長径1.49m、短径1.01m、深さ0.52mの平面楕円形の丸底の土坑で、暗褐色～黒褐色の粘土質シルトの埋土で、土坑の中層から下層において被熱した人骨片が多数確認できた。この土坑からは中世の土師器小皿2点（E039・E040）が出土した。これらの出土遺物から、土壙墓の可能性が高い。

025SK：調査区の北壁に半分かかる土坑で、東西2.00m程の平面不整形の形で検出できた。遺構の深さは0.50mで、断面はやや平底状のものである。

056SD：調査区の東側で地形に沿った東西方向に長さ8m程確認できた溝で、ちょうど上段の造成面から下段の造成面に下がる法面の下に残るものであり、下段の造成に伴う溝と考えられる。上段の造成面からはかると幅1.00m前後、深さ0.45m前後となる。埋土は暗褐色細粒シルトである。

第3節 10B区の概要（第9図～第22図）

10B区は欠下城址のある丘陵の北側斜面の西側と丘陵の北側斜面からつづく尾根部分、その尾根の南西側の谷を合わせた調査区である。今回の発掘調査の中心となる部分は欠下城址のある丘陵の北側斜面からつづく尾根の部分で、中世から近世の遺構・遺物を多数確認できた。この尾根の南西側の谷では、調査から柵田と思われる段が複数認められ、表土を除去すると、1面の遺構面となる近世後期以後の盛土・整地による造成面が確認できた。1面の調査終了後、トレンチを掘削し、谷の堆積（第54図Iライン）を確認し、バックホウにより、近世以後の盛土・整地層とその下にあっ

たにぶい黄褐色粗粒シルトの堆積を除去して遺構検出を行った。近世以後の盛土・整地層の中からは中世の陶磁器、土師器（E356～E362）が出土したが、にぶい黄褐色粗粒シルト層からは遺物は出土しなかった。本来はにぶい黄褐色粗粒シルト層の上面が遺構面である可能性が高い。また欠下城址のある丘陵の北側斜面とすでに丘陵の上り道になっている部分では、表土となる腐食土や昭和の盛土部分を除くと地山面となり、遺構・遺物はなかった。以下、個別遺構について述べる。

010SK：021SDと024SDの上面にて検出した土坑で、長径3.35m、短径0.90m、深さ0.11mの平面不整形の皿状の形態である。褐色細粒砂の埋土のものである。15世紀後半以後の遺構である可能性が高い。

012NR：調査区の東側を10Aa区・10Ac区のある北西から10C区にいたる自然流路で、10Aa区・10Ac区の004NR・005NRに相当する江戸時代の堆積である。埋土は上部が暗灰黄色細粒シルト、下部が黄灰色粘土質シルトである。10B区の北側で幅約10m程のもので、深さは1.0m程である。調査の最後に012NRの底面の断ち割りを実施した（第55図Rライン）。流路の西側が0.50mさらに下がり、中央部付近では古代の布目瓦（E088）などとともに中世の南部系陶器・土師器が出土した。調査時には10Aa区・10Ac区の004NR・005NRの下層部分や10B区の035NRの下層部分の想定もした。埋土は西側上部が黄褐色～灰オリーブ色極細粒砂、中央の下部が黒褐色～暗褐色の粗粒シルトと極細流砂の互層になるものであった。中世以前の堆積が主体と思われる。

020SD・021SD：020SDと021SDは欠下城址の丘陵から本調査区に下りてきた平坦面の東側に掘削された溝で、幅0.50m前後の掘り残し部を挟んである。020SDは幅6.75m、深さ0.46m、021SDは幅4.50m、深さ0.61mで、020SDは長さ6m程、021SDは長さ4m程を検出できた。断面は底面が平底になる逆台形に近い。021SDと重複する136SDは021SDの掘り直しの痕跡を示す可能性がある。021SDは024SDより新しい。埋土はどちらも褐色極細粒砂を主体とするものである。この2つの溝は多数の柱穴や土坑と重複しており、出土遺物には12世紀～13世紀中頃の南部系陶器の碗・小皿（E089～E096）、土師器の皿・小皿

(E097・E098) と 13 世紀後半～14 世紀の伊勢型鍋 (E100～E102)、古瀬戸陶器の盤類 (E099) が出土している。021SD の東に柱穴と思われる 087SP があり、15 世紀後半の古瀬戸陶器の天目茶碗 (E226) が出土している。はじめは、溝と重複する柱穴が 12 世紀～13 世紀中頃のものが多く、15 世紀後半の柱穴が溝の付近にあることから、020SD・021SD は 13 世紀後半～14 世紀の遺構と考えたが、掘立柱建物 2 の南側柱の一つになる可能性がある 087SP から 15 世紀後半の古瀬戸陶器が出土していることから、溝の時期を 16 世紀以後の遺構と考えた。

022SD・024SD：欠下城址の丘陵から調査区に下りてきた平坦面の中央部 020SD・021SD の西に掘削された溝で、幅 0.50m 前後の掘り残し部を挟んである。022SD は幅 14m 程、深さ 0.20m 程、024SD は幅 8.32m、深さ 0.59m 前後で、022SD は長さ 3.8m 程、024SD は長さ 6.8m 程を検出できた。断面は底面が平底になる逆台形に近い。024SD は 021SD より古い。埋土はどちらも明褐色～褐色細粒砂・極細粒砂を主体とするものである。南部系陶器の碗・小皿、土師器の皿・小皿、古瀬戸陶器灰釉平碗、砥石が出土している (E103～E107・E116～E123)。この 2 つの溝も多数の柱穴や土坑と重複しており、先に述べた 020SD・021SD と同様に溝と重複する柱穴には 12 世紀～13 世紀中頃のものが多い。022SD・024SD の時期については、先に述べた 020SD・021SD と同様に、15 世紀後半以後から 16 世紀のものと考えたい。

027SP：035NR の上から掘削された遺構で、径 0.67m、短径 0.48m、深さ 0.29m の平面円形の丸底の柱穴で、底面に柱を支えたと思われる根石が置かれていた。この根石は径 0.25m 前後の三角形の板石であった。埋土は黒褐色粘土で、出土遺物に完形の南部系陶器の小皿 B3 点 (E127～E129) が出土した。これらの遺物が柱を立てた時のものか抜き取り後のものかは不明であるが、13 世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

035NR：10B 区の西側にある自然流路の堆積で、10Aa 区・10Ac 区の 010NR に対応するものである。多数の遺構と重複しており、主なものを上げると、035NR → 027SP・156SP (13 世紀前半～中頃) → 040SK (15 世紀後半) → 10Aa 区 004NR (江戸時代)

→ 10Aa 区 015SD・10B 区の西側谷堆積 (江戸時代以後) となる。出土遺物には、南部系陶器の碗・皿、土師器の皿・小皿・内耳鍋、古瀬戸陶器、近世陶磁器が出土する。以上の遺構の重複関係と出土遺物から、035NR が土石流などの自然流路の堆積と考えると、027SP と 156SP が 035NR の堆積である黒褐色～暗褐色シルト層の上から掘削された柱穴であることが明確であることから、13 世紀前半の時期が想定され、13 世紀中頃以後の遺物は 035NR 埋没後の別の遺構に伴う遺物と考えられる。

040SK：035NR の上から掘削された土坑で、長径 2.62m、短径 1.60m、深さ 0.60m をはかる。形態は平面円形の丸底のもので、埋土は上層が黒褐色細粒シルトや暗灰黄色極細粒砂、中層が褐色粗粒シルト、下層が黒褐色極細粒砂～細礫と黒色粗粒シルトの斑土であった。土坑からは花崗岩の礫とともに南部系陶器の碗・小皿、古瀬戸陶器の灰釉平碗、常滑産甕、土師器の皿・鍋が出土した (E213～E222)。特に土坑の底面近くから常滑産甕 (E218～E220) と土師器の内耳鍋 (E222) がまとまって出土した。出土遺物から 15 世紀後半の遺構と考えられる。また 035NR からも 15 世紀後半以後の土師器の内耳鍋片などが出土しており、付近にこの時期の別の遺構が存在した可能性が高い。

100SD：021SD の東に沿ってはしる溝で、長さ 5m 程検出できた。幅 0.40m、深さ 0.10m 前後の丸底で、埋土は暗褐色極細粒砂である。南部系陶器片が 1 点出土した。

101SK：調査区の東壁にかかる地点で検出した土坑で、平面円形状で底面は平底となる断面箱形である。径は 3.2m、深さ 0.40m をはかる。埋土は、上層がにぶい黄褐色細粒砂、下層が褐色極細粒砂である。出土遺物はなかった。

156SP：035NR の上から掘削された遺構で、第 54 図 K ラインの断面において確認できた遺構である。形態は径 0.48m、深さ 0.60m の平面円形の丸底の柱穴で、埋土は黒褐色細粒シルトに少量の炭化物が含まれていた。出土遺物に完形の南部系陶器の小皿 1 点 (E242) と土師器の小皿 1 点 (E243) が出土した。柱穴の中央から遺物が出土しており、柱抜き取り後に入った可能性が高いものである。出土遺物から 13 世紀前半～中

頃の遺構と考えられる。

10B区西側の柱穴：035NR付近にて検出された柱穴群について述べる。調査で確認できた柱穴は035NRの埋土中にて確認されたものがほとんどで、先に振れた027SPや156SPのように035NRの上から掘削された柱穴は径0.50m～0.70m前後、深さ0.60m前後になるものと思われ、掘削された時期も13世紀前半以後と考えられる。埋土には色調が灰褐色や褐色、暗褐色、黒褐色で、粒度が細粒砂、極細粒砂、シルトと幅がある。黒色シルトを主体とする035NRの中で遺構検出を行っているものが多いので、全ての柱穴を確認できていないものと思われる。根石が確認された柱穴は、027SP、039SP、157SP、159SP、161SP、164SP、257SPがあった。

掘立柱建物1：先に述べた027SPと156SPの並びを軸に検討すると、243SP・156SP・160SP・159SPの東西3間の7.8m、156SP・027SP・258SPの南北2間の6.0mの総柱建物を復元できる。この建物に伴うと思われる柱穴は、140SP・166SP・149SPがある。南側は後世の自然流路により南側が流失している可能性もあるので、もう少し建物が広がる可能性もある。この掘立柱建物は027SPと156SPの出土遺物から13世紀前半～中頃と考えられる。また、周辺にはこれらと組み合わない柱穴が5基前後存在するので、周辺で立て替えられた掘立柱建物は5軒以上存在するものと思われる。根石をもつ柱穴で、157SPと161SP、243SPの西にある根石と思われる板状石材と039SPは、別に組み合わせる可能性があるものである。

10B区中央部から東側の柱穴：020SD・021SD・022SD・024SDと重複する位置にあるので、同様な色調の埋土をもつ柱穴は検出できていないものと思われる。確実に020SD～022SD・024SDより新しい柱穴もいくつかあるが、溝より古い柱穴も多くみられた。確認された柱穴は、径0.10m前後のものもあるが、上部を溝に削平されているものが多いことを考えると、大部分は径0.50m～0.80m前後、深さ0.50m～0.80mの規模と思われる。埋土はにぶい黄褐色～褐色の極細粒砂を主体とするものが多い。根石をもつ柱穴は126SP・157SP・159SP・183SP・220SP・247SP・257SPがあり、掘立柱建物が存在した可能性が高い。

また断面において径0.10m～0.20m前後の柱痕跡か柱の抜き取り痕と思われる堆積が039SP・042SP・046SP・049SP・050SP・053SP・054SP・056SP・057SP・062SP・074SP・075SP・082SP・086SP・087SP・088SP・090SP・092SP・093SP・098SP・102SP・105SP・130SP・148SP・153SP・155SP・184SP・186SP・188SP・189SP・195SP・198SP・199SP・202SP・204SP・205SP・208SP・212SP・232SP・243SPにみられた。柱穴の並びの軸線はN-12°-E～N-16°-E前後に100SDの東、020SD・021SDの東側、020SD・021SDの西側、024SDの東側、024SDの西側の5列の柱穴の並びがみられる。その5列の並び以外にも柱穴が付近に5基以上あり、柱穴の組み合わせを容易には抽出できない。

掘立柱建物2：020SDと021SDの東上端に沿って並ぶ多数の柱穴の中で、東から248SP（あるいは182SP）、070SP（あるいは061SP）、086SP（あるいは087SP）、005SPの3間分と対応する024SDの東上端に沿って並ぶ230SP、221SP、128SPの組み合わせから建物跡を推定できる可能性がある。他に内側の柱穴として147SP、112SPなどが組み合わせる可能性がある。建物の時期は、248SPは020SDより古い遺構であり、087SPからは、古瀬戸後IV古期の天目茶碗片（E226）が出土していることから、15世紀後半以後の建物と考えたい。この他にも多数の柱穴があり、別の建物や区画溝に伴う柵などが存在した可能性がある。

第4節 10C区の概要（第23図）

10Aa区・10Ac区・10B区からつづく谷の部分で、谷底部分は10B区の012NRの下流部分である。10Ab区の南東に続く斜面部では7基の土坑と1条の溝を検出できた。10Ab区南東の斜面部は表土をとるとほぼ地山面が表れたが、谷底部分では現在の沢がはしる調査区南端で標高135.5m前後であり、その下に2.0m～2.2mの盛土が行われて、旧水田が営まれていた。従って、遺構面はこの盛土の下標高133.5m前後にて行い、近世以前の自然流路を確認した（湧水の為、確認できたのは自然流路の一部、標高132.5mまで）。この自然流路からは中世以後の土師器・陶磁器が出土し

た。

167SK～171SK：167SK～171SKは斜面に沿って並んで検出できた土坑で、167SKが長径0.84m、短径0.72m、深さ0.26mの平面楕円形の土坑、168SKが長径1.30m、短径1.00m、深さ0.31mの平面楕円形の土坑、169SKが長径0.60m、短径0.54m、深さ0.25mの平面円形の土坑、170SKが長径0.51m、短径0.46m、深さ0.25mの平面円形の土坑、171SKが長径0.62m、短径0.51m、深さ0.25mの平面円形の土坑で、167SK～170SKは少し重複する。埋土は167SKと168SKがにぶい黄褐色極細粒砂、169SKと170SKが暗褐色極細粒砂、171SKが褐色極細粒砂で、167SK～169SKからは中世の土師器皿・小皿・鍋、南部系陶器の碗などが出土した（図化したのはE364～E367）。これらの土坑は中世の遺構の可能性はある。

172SK：長径2.09m、短径0.71m、深さ0.47mの平面楕円形の土坑で、断面は丸底で、暗褐色極細粒砂の埋土であった。出土遺物はない。167SK～171SKの東に隣接して存在しており、中世の遺構の可能性はある。

173SD：10C区の北側斜面に傾斜に沿って東西に検出できた溝で、長さ約11.3mを確認した。山側の遺構上端から計測すると、幅は1.10m前後、深さ0.73mをはかる。埋土は暗褐色～にぶい黄褐色の極細粒砂で、断面は丸底である。出土遺物に南部系陶器の碗、土師器の皿などがある（図化したのはE368～E373）。出土遺物から13世紀の遺構と考えられる。

第5節 11A区の概要

欠下城址の丘陵北斜面の東側にある調査区で、調査区の山側の緩斜面の部分を001SXとして調査した。その他の傾斜の強い地点は、表土である腐植土を除くと、山側からの流土である褐色砂質シルトが薄く残る部分があったが、ほぼ地山である黄褐色砂質シルトがみられた。

001SX：おおよそ東西13.0m、南北4.0mの平面半円形の緩斜面で、標高139.0m～140.5m前後の部分である。表土である腐植土の下に、斜面の流土である褐色砂質シルトが0.10m～0.30m程堆積しており、そ

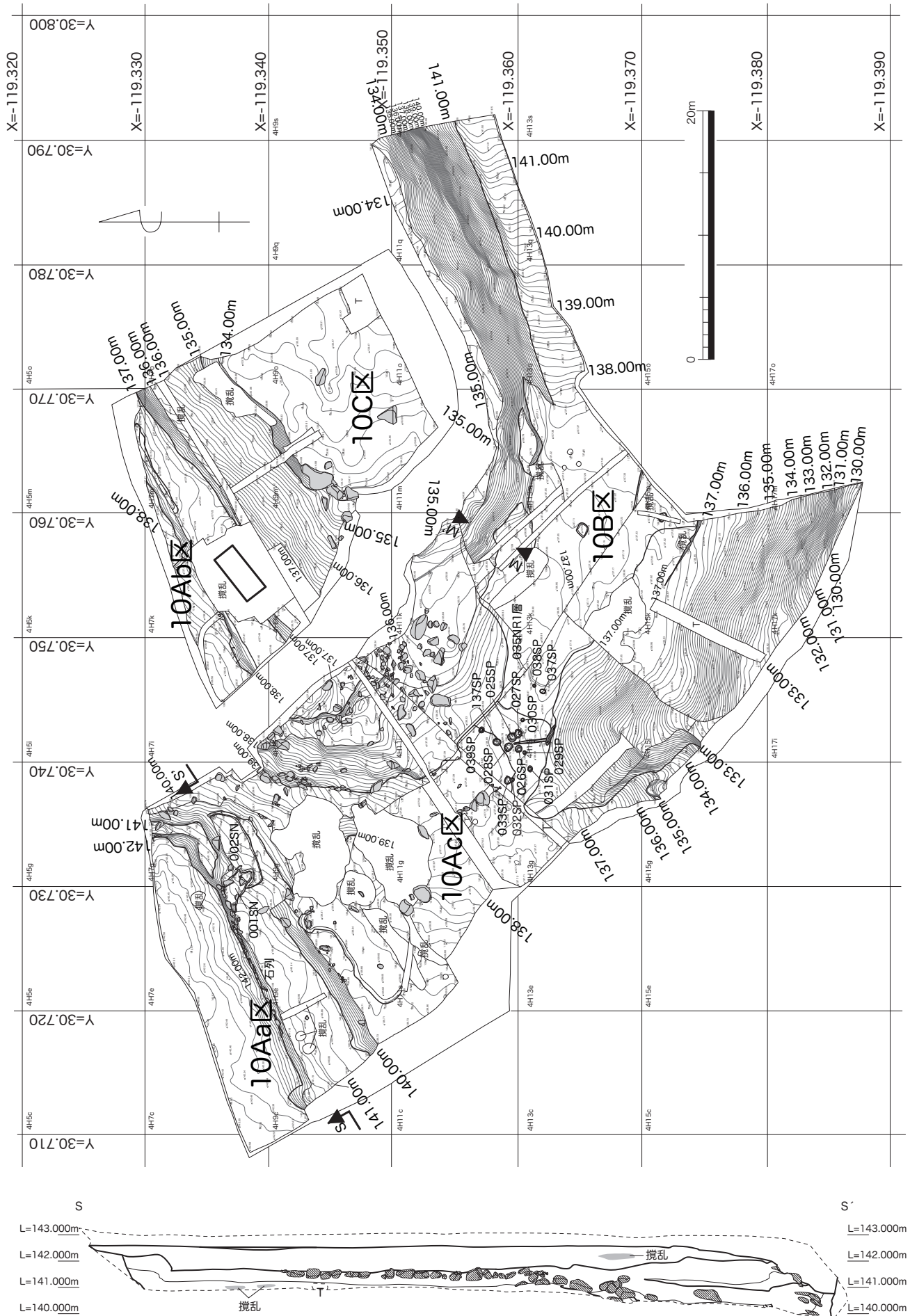
の下に赤黄褐色砂質シルトの堆積が地山から0.10m～0.15m程あった。出土遺物には、南部系陶器・北部系陶器・中世土師器皿・古瀬戸陶器・近世陶磁器の破片が7点出土した（図化したものはE406～E409）。001SXの埋土はいずれも丘陵の上からの流れ込みであり、中世から近世の出土遺物は丘陵上の平坦面である欠下城址からのものである。

第6節 11B区の概要

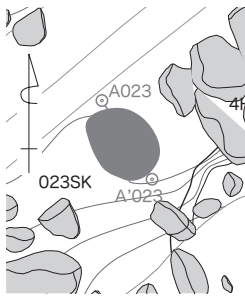
欠下城址の丘陵東斜面にある調査区で、調査区の北東部にて007SKを、調査区の南側の緩斜面の部分にて002SD～006SDを確認した。調査区南側の緩斜面は南北約26m、東西約4mの平面三日月状の形状で、標高128.5m～129.5mの地点にある。その他の傾斜の強い地点は、表土である腐植土を除くと、山側からの流土である褐色砂質シルトが若干残る部分があるのみであった。

002SD～006SD：調査区南側の緩斜面にて検出されたもので、表土である腐植土を埋土とするものである。近代以後の溝と思われる。幅1.10m～1.30m、深さ0.20m前後の断面緩い丸底である。これらの溝からは中世の土師器小皿・皿と鍋、近世陶磁器が出土している（図化したものはE410～E414）。

007SK：径2.75mの平面やや不整な円形で断面平底の土坑である。埋土は上層が褐色砂質シルト、下層が褐灰色砂質シルトで、長径0.30m～1.40mの花崗岩の大小の礫が6個入っていた。中世土師器の小皿・皿（E415・E416）が出土している。中世の遺構の可能性はある。



第5図 10A区・10B区・10C区1面遺構図(1:400)と石列立面図(1:200)

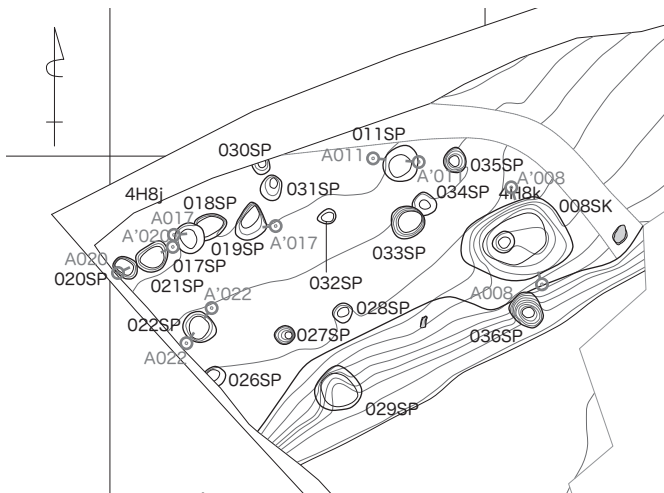


023SK
A023 A'023
L=140.000m L=140.000m
L=139.500m 3 1 2 3 L=139.500m
L=139.000m L=139.000m

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細粒シルト。焼土・炭化物を含む。(023SKの埋土。)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細粒シルト。3層の上面が被熱し赤化した面上に炭化物が多量に認められる。(023SKの埋土。)
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細粒シルト。(地山。)



第6図 10Aa区 023SK (1:100)



008SK
A008 A'008
L=138.500m L=138.500m
L=138.000m L=138.000m
L=137.500m L=137.500m
L=137.000m L=137.000m

1. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト。細礫～中礫を含む。(008SKの埋土。)
2. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト。細礫を含む。火葬骨を多量に含む。(008SKの埋土。)
3. 10YR4/6 褐色 シルト。細砂～極粗粒砂を多量に含む。(008SKの埋土。)
4. 10YR3/4 暗褐色 細粒シルト。極細粒砂を多量に含む。(008SKの埋土。)
5. 10YR4/6 褐色 粗粒シルト。細礫・極粗粒砂を多量に含む。(地山。)

011SP
A011 A'011
L=138.500m L=138.500m
L=138.000m L=138.000m
L=137.500m L=137.500m

1. 10YR4/2 灰黄褐色 細粒シルト。細礫を少量含む。炭化物を多量に含む。(011SPの埋土。)
2. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト。細礫～中礫を含む。(011SPの埋土。)
3. 10YR3/4 暗褐色 細粒シルト。細礫～中礫を含む。(011SPの埋土。)
4. 10YR4/6 褐色 粗粒シルト。細礫・極粗粒砂を多量に含む。(地山。)

017SP-018SP-019SP
A017 A'017
L=139.000m L=139.000m
L=138.500m L=138.500m
L=138.000m L=138.000m

1. 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト。細礫を少量含む。(017SPの埋土)
2. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト。細礫を少量含む。(018SPの埋土)
3. 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト。細礫を少量含む。(019SPの埋土)
4. 10YR4/6 褐色 粗粒シルト。細礫・極粗粒砂を多量に含む。(地山。)

020SP-021SP
A020 A'020
L=139.000m L=139.000m
L=138.500m L=138.500m
L=138.000m L=138.000m

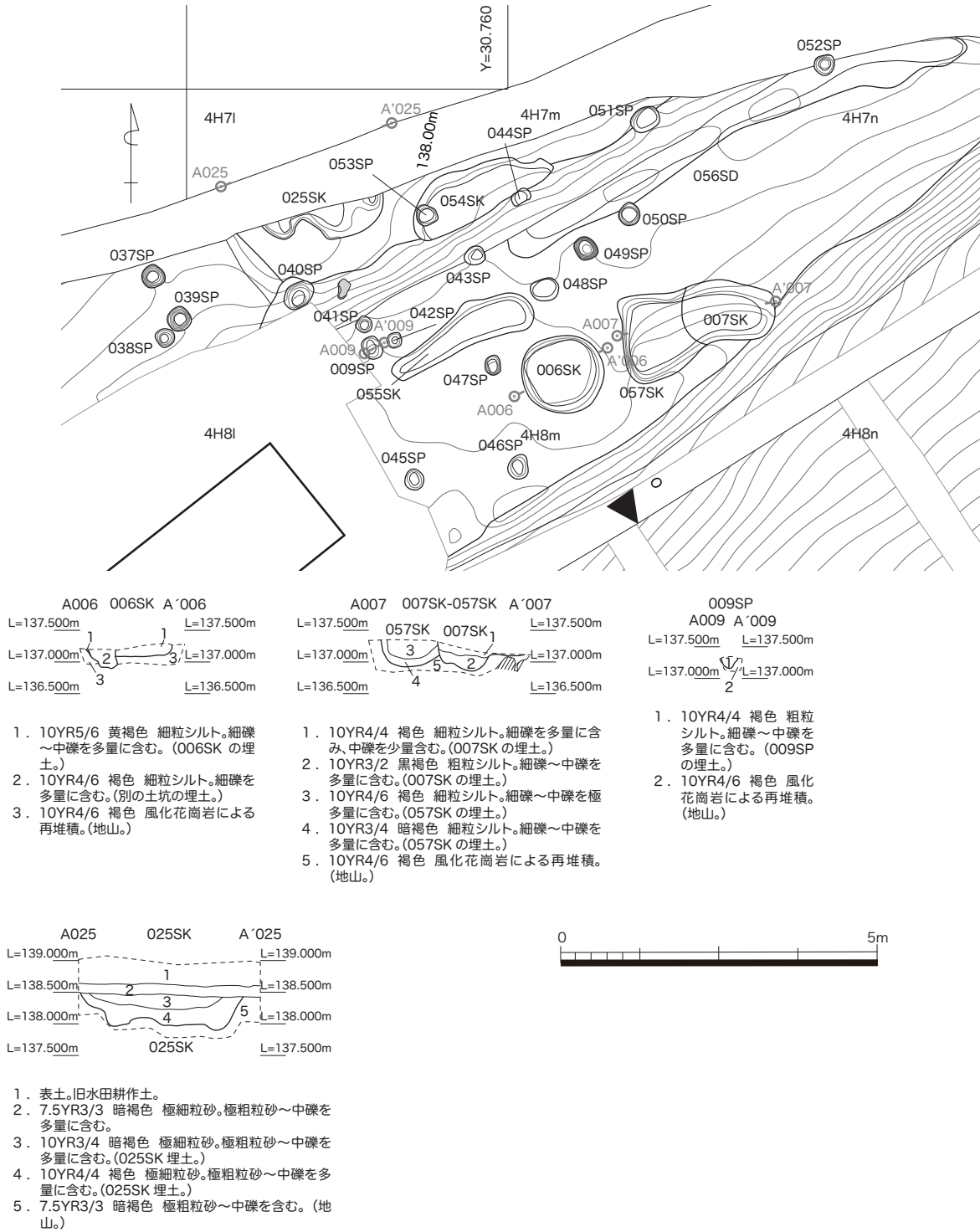
- 20SP-21SP
1. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト。細礫を少量含む。(020SPの埋土。)
 2. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト。細礫を少量含む。(021SPの埋土。)
 3. 10YR4/6 褐色 粗粒シルト。細礫・極粗粒砂を多量に含む。(地山。)

022SP
A022 A'022
L=138.500m L=138.500m
L=138.000m L=138.000m
L=137.500m L=137.500m

1. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト。細礫を少量含む。(022SPの埋土。)
2. 10YR4/6 褐色 粗粒シルト。細礫・極粗粒砂を多量に含む。(地山。)



第7図 10Ab区西側の土坑 (1:100)

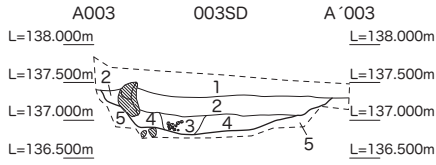


第8図 10Ab区東側の土坑 (1:100)

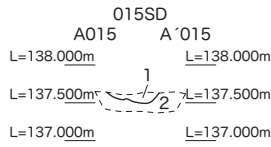


第9図 10Aa区・10B区西側の土坑と溝1 (1:100)

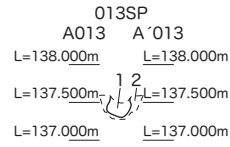
第2章 遺構



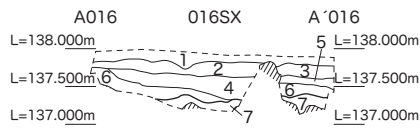
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細粒シルト。細礫を少量含む。(表土・整地層。)
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 細粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。(003SDの埋土。)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 極粗粒砂。細礫～中礫を多量に含む。(締まりに欠ける遺構覆土。003SDの埋土。)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。(003SDの埋土。)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 細粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。



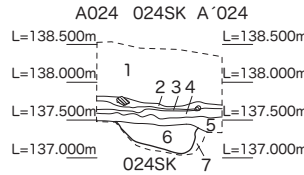
- 10YR3/3 暗褐色 細粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。(015SDの埋土。)
- 10YR4/6 褐色 細粒シルト。細礫・中礫を極多量に含む。



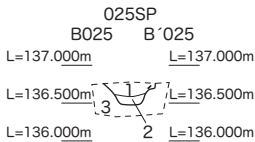
- 10YR4/4 褐色 細粒砂。極粗粒砂を含む。(013SPの埋土。)
- 10YR4/6 褐色 粗粒シルト。風化花崗岩。(地山。)



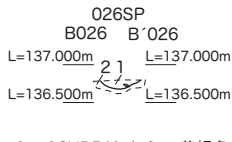
- 表土
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細粒シルトに、2.5Y4/6 オリーブ褐色が混ざる斑土。細礫～中礫を多量に含む。
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。
- 2.5Y4/6 オリーブ褐色 細粒シルトに、2.5Y4/3 オリーブ褐色が混ざる斑土。細礫～中礫を多量に含む。
- 2.5Y4/6 オリーブ褐色 細粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。
- 2.5Y3/2 黒褐色 細粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。(検出2にて掘削。)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。



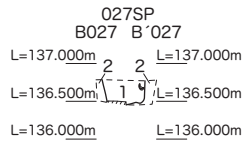
- 表土(客土)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト。細礫を少量含み、還元している。
- 10YR5/8 黄褐色 粘土質シルト。細礫を少量含む。
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘土質シルト。細礫～中礫を少量含み、還元している。
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 細粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。本層の上下は酸化している。
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 細粒シルト。中礫を極多量に含む。(024SK埋土。)
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 細粒シルト。中礫を極多量に含む。



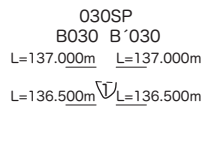
- 10YR2/1 黒色 細粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(025SPの埋土。)
- 10YR1.7/1 黒色 粘土。極粗粒砂～細礫を含む。(025SPの埋土。)
- 035NRの覆土。



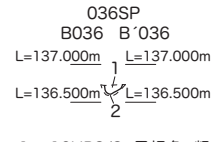
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(026SPの埋土。)
- 035NRの覆土。



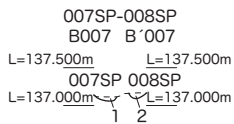
- 7.5YR2/2 黒褐色 粘土。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(027SPの埋土。)
- 035NRの覆土。



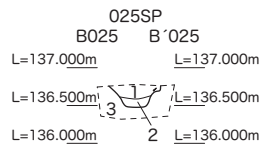
- 10YR3/2 黒褐色 細粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(030SPの埋土。)



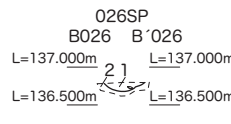
- 10YR2/2 黒褐色 粗粒シルト。細礫・炭化物粒を含む。(036SPの埋土。)
- 地山。



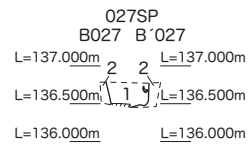
- 10YR4/6 褐色 細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(007SPの埋土。)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(008SPの埋土。)



- 10YR2/1 黒色 細粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(025SPの埋土。)
- 10YR1.7/1 黒色 粘土。極粗粒砂～細礫を含む。(025SPの埋土。)
- 035NRの覆土。



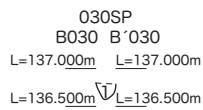
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(026SPの埋土。)
- 035NRの覆土。



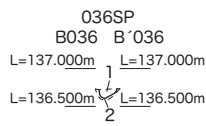
- 7.5YR2/2 黒褐色 粘土。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(027SPの埋土。)
- 035NRの覆土。



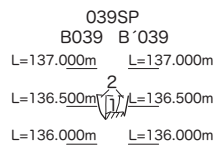
第10図 10Aa区・10B区西側の土坑と溝2 (1:100)



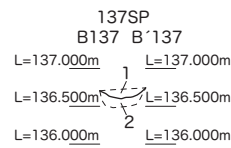
- 10YR3/2 黒褐色 細粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(030SPの埋土。)



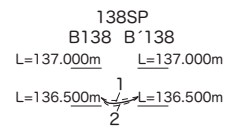
- 10YR2/2 黒褐色 粗粒シルト。細礫・炭化物粒を含む。(036SPの埋土。)
- 地山。



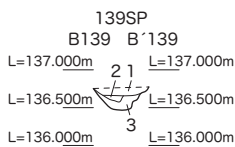
- 10YR2/2 黒褐色 細粒シルト。細礫を含む。(039SPの埋土。)
- 10YR3/3 暗褐色 細粒シルト。細礫を含む。(039SPの埋土。)



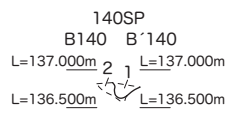
- 10YR3/3 暗褐色 細粒シルト。細礫・炭化物粒を含む。(137SPの埋土。)
- 地山。



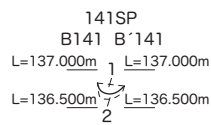
- 10YR2/2 黒褐色 細粒シルト。(138SPの埋土。)
- 地山。



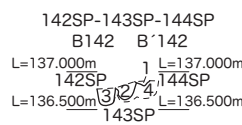
- 10YR3/2 黒褐色 細粒シルト。細礫を含む。(139SPの埋土。)
- 10YR3/2 黒褐色 細粒シルト。細礫を含む。(139SPの埋土。)
- 10YR2/1 黒色 細粒シルト。細礫を含む。(139SPの埋土。)



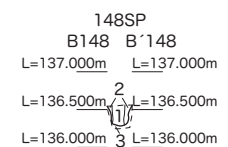
- 10YR3/2 黒褐色 細粒シルト。(140SPの埋土。)
- 地山。



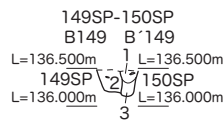
- 10YR3/2 黒褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(141SPの埋土。)
- 地山。



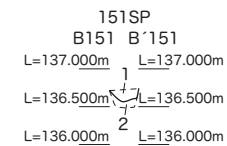
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(144SPの埋土。)
- 上部 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂。下部 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂。(全体に極粗粒砂～細礫を多量に含む。143SPの埋土。)
- 10YR3/2 黒褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を少量含む。(142SPの埋土。)
- 地山。



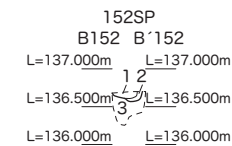
- 10YR3/2 黒褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を多量に含む。炭化物を含む。(148SPの埋土。)
- 10YR3/3 暗褐色 細粒シルト。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(148SPの埋土。)
- 地山。



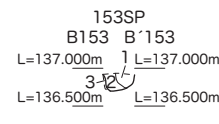
- 10YR3/2 黒褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(150SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 細粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(149SPの埋土。)
- 10YR3/3 暗褐色 細粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(150SPの埋土。)



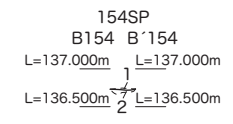
- 10YR3/2 黒褐色 粗粒シルト。極粗粒砂を含む。(151SPの埋土。)
- 地山。



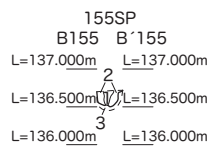
- 10YR2/2 黒褐色 粘土。極粗粒砂～細礫を含む。(152SPの埋土。)
- 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(152SPの埋土。)
- 地山。



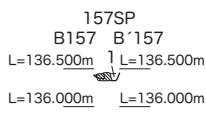
- 10YR3/3 暗褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(153SPの埋土。)
- 10YR3/2 黒褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(153SPの埋土。)
- 地山。



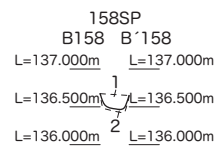
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(154SPの埋土。)
- 地山。



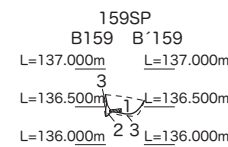
- 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(155SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(155SPの埋土。)
- 地山。



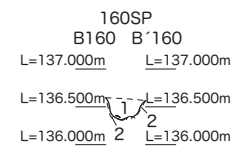
- 10YR3/3 暗褐色 粗粒シルトと 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂の斑土。極粗粒砂～細礫を含む。(157SPの埋土。)



- 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。炭化物を含む。(158SPの埋土。)
- 地山。



- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(159SPの埋土。)
- 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(159SPの埋土。)
- 地山。

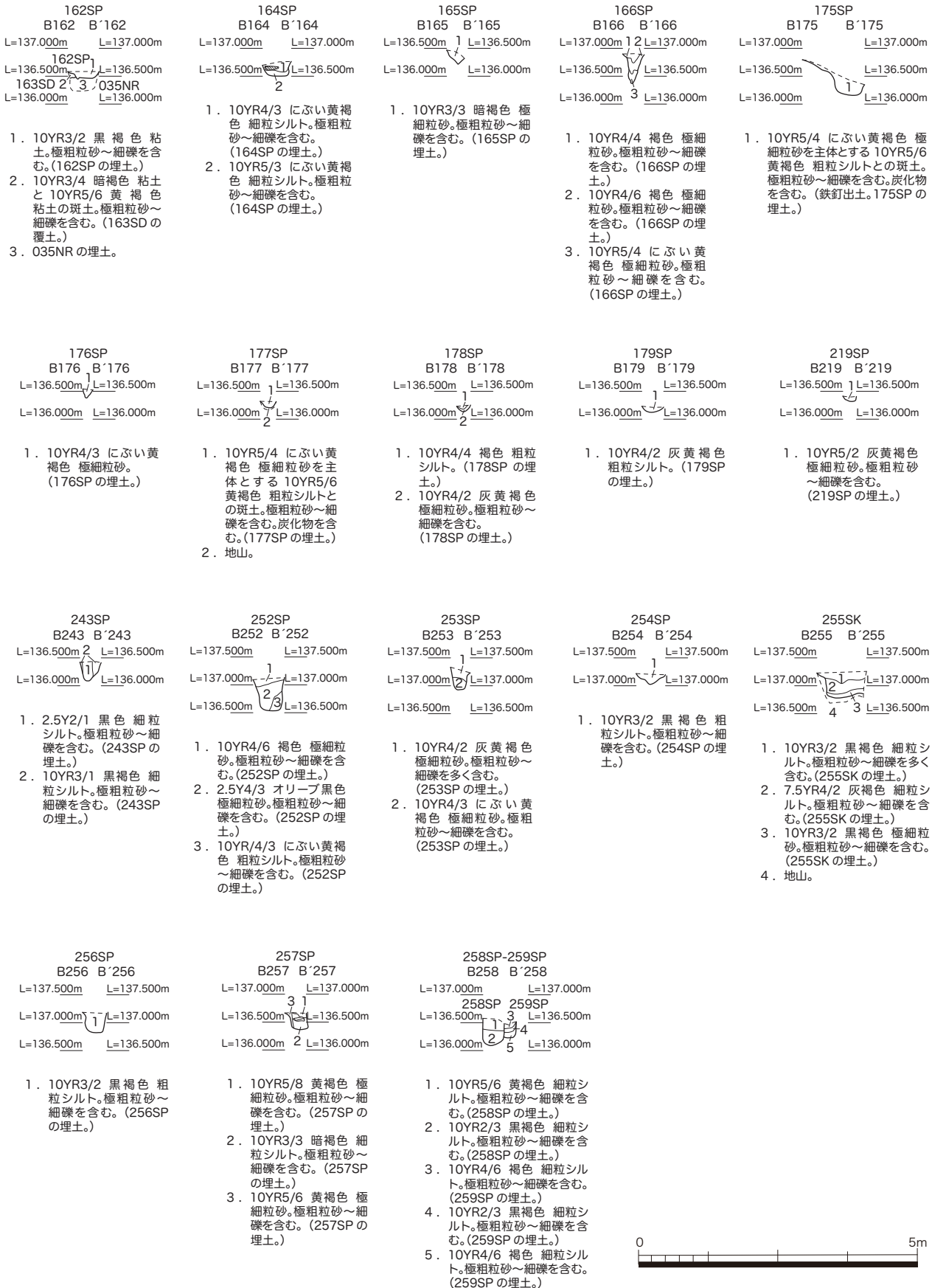


- 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルトと 10YR1.7/1 黒色 細粒シルトの斑土。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(160SPの埋土。)
- 地山。

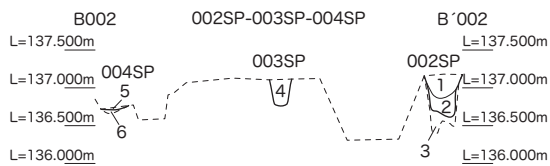
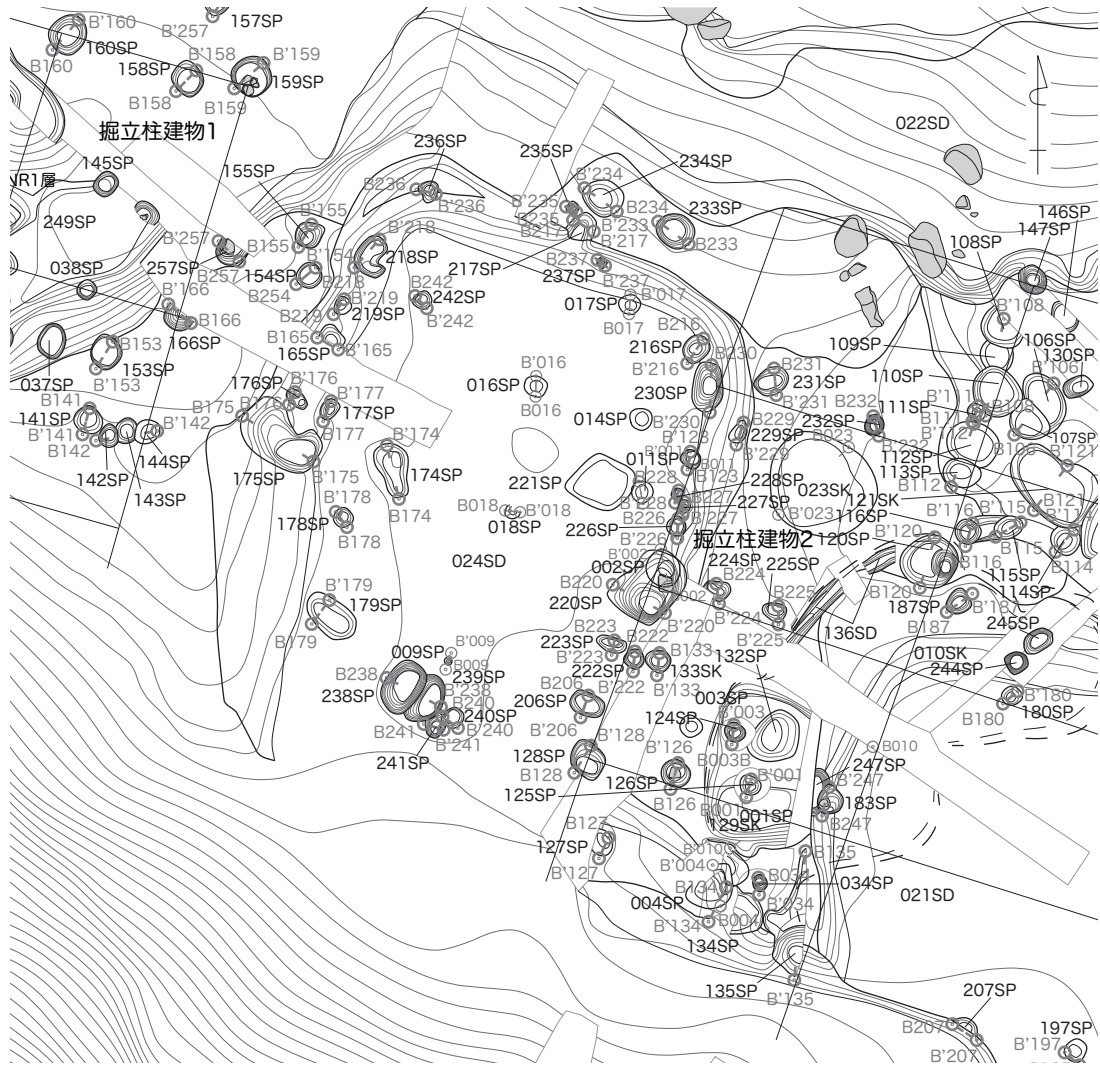


第 11 図 10Aa 区・10B 区西側の土坑と溝 3 (1:100)

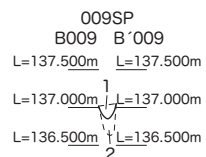
第2章 遺構



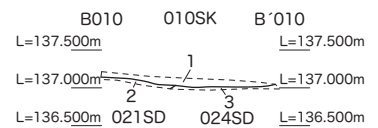
第12図 10Aa区・10B区西側の土坑と溝4 (1:100)



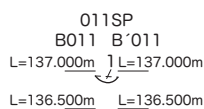
1. 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂と7.5YR5/6 (明褐) 極細粒砂の細かい斑土。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(002SPの埋土。)
2. 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂と7.5YR5/6 (明褐) 極細粒砂の細かい斑土。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(002SPの埋土。)
3. 10YR4/6 褐色 粗粒砂。極粗粒砂～中礫を多量に含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(003SPの埋土。)
5. 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(004SPの埋土。)
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 細粒シルト。細礫～中礫を含む。



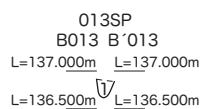
1. 10YR3/3 暗褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(009SPの埋土。)
2. 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。粗粒砂を含む。



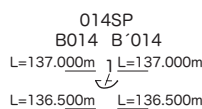
1. 7.5YR4/6 褐色 細粒砂。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(010SKの埋土。)
2. 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(021SDの埋土。)
3. 2.5Y4/6 オリーブ褐色 粗粒シルト。細礫～中礫を多量に含む。(024SDの埋土。)



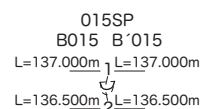
1. 10YR4/6 褐色 細粒シルト。極粗粒砂を少量含む。(011SPの埋土。)



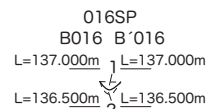
1. 10YR4/6 褐色 細粒シルト。極粗粒砂～細礫を少量含む。(013SPの埋土。)



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒シルト。粗粒砂を少量含む。(014SPの埋土。)



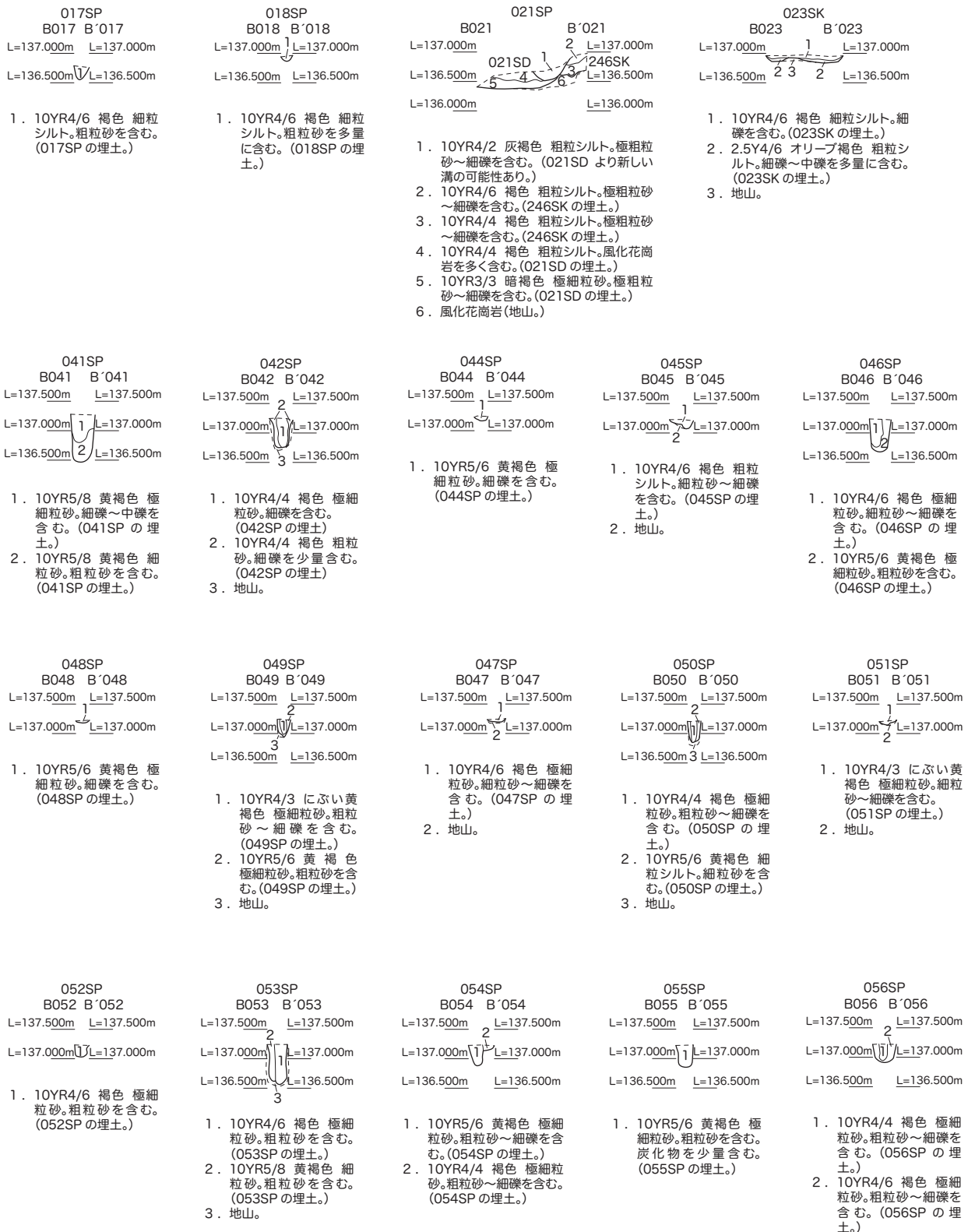
1. 10YR3/4 暗褐色 細粒シルト。極粗粒砂を極少量含む。(015SPの埋土。)
2. 10YR4/4 褐色 細粒シルト。中礫を極少量含む。



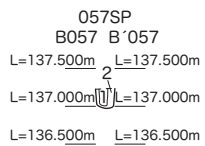
1. 10YR4/6 褐色 細粒シルトと10YR6/4 にぶい黄褐色 粘土の斑土。細礫～大礫を多量に含む。(016SPの埋土。)
2. 10YR4/6 褐色 細粒シルト。粗粒砂を含む。

第13図 10B区中央部の土坑1 (1:100)

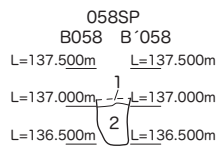
第2章 遺構



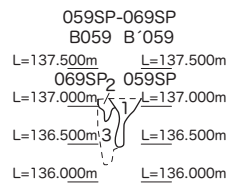
第14図 10B区中央部の土坑2 (1:100)



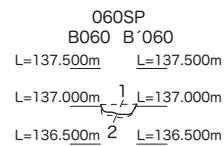
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。粗粒砂～細礫を含む。(057SPの埋土。)
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。粗粒砂を含む。(057SPの埋土。)



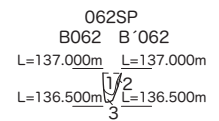
- 10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト。細礫を多量に含む。(058SPの埋土。)
- 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。粗粒砂を多量に含む。(058SPの埋土。)



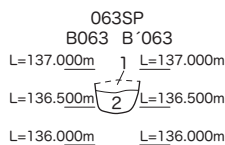
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。柱痕部分は10YR3/4 暗褐色 粗粒シルト。粗粒砂～細礫を含む。(059SPの埋土。)
- 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。粗粒砂～細礫を多量に含む。(069SPの埋土。)
- 地山。



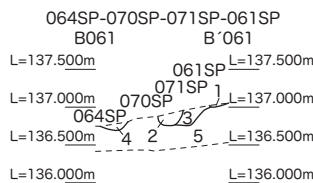
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。粗粒砂～中礫を多量に含む。(060SPの埋土。)
- 地山。



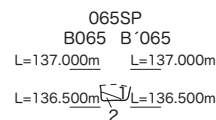
- 10YR4/4 褐色 細粒砂。細礫～中礫を多量に含む。(062SPの埋土。)
- 10YR5/6 黄褐色 細粒砂。細礫を多量に含む。(062SPの埋土。)
- 10YR5/8 黄褐色 細粒砂。粗粒砂～細礫を多量に含む。(062SPの埋土。)



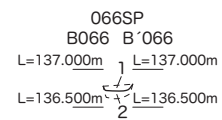
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。粗粒砂～細礫を含む。(063SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 細粒シルトと10YR6/6 明黄褐色 粘土質シルトの斑土。粗粒砂を含む。(063SPの埋土。)



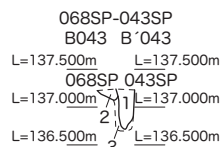
- 10YR4/4 褐色 粗粒シルト。粗粒砂を含む。(061SPの埋土。)
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。粗粒砂を含む。(070SPの埋土。)
- 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。粗粒砂～細礫を含む。(071SPの埋土。)
- 10YR5/8 黄褐色 中粒砂。細礫～中礫を多量に含む。(064SPの埋土。)
- 地山。



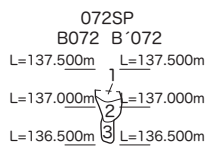
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。粗粒砂を含む。(065SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 粗粒シルト。粗粒砂を含む。(065SPの埋土。)



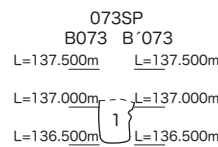
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。粗粒砂を含む。(066SPの埋土。)
- 地山。



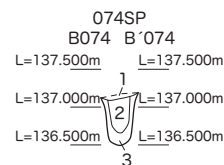
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。細礫を含む。(043SPの埋土。)
- 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。細礫～中礫を含む。(068SPの埋土。)
- 地山。



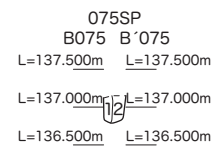
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(072SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(072SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(072SPの埋土。)



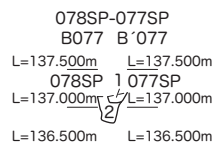
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(073SPの埋土。)



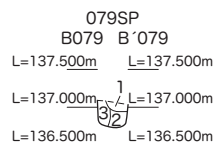
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(074SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(074SPの埋土。)
- 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(074SPの埋土。)



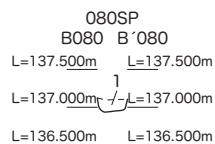
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(075SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(075SPの埋土。)



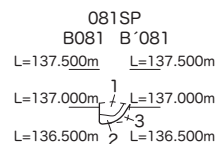
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(077SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(078SPの埋土。)



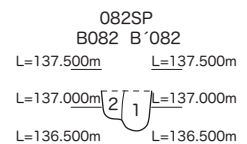
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(079SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(079SPの埋土。)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(079SPの埋土。)



- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(080SPの埋土。)



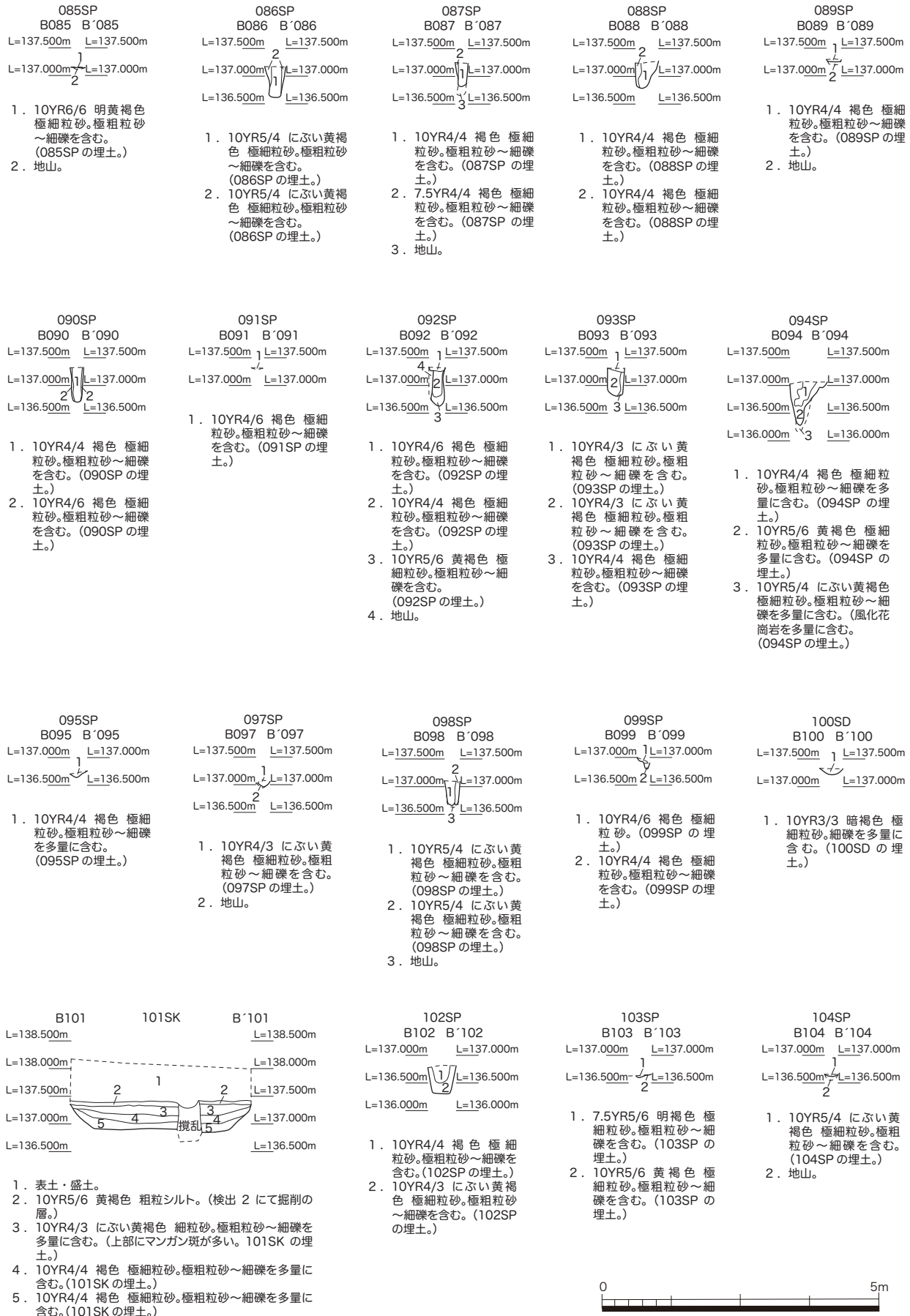
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(081SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(081SPの埋土。)
- 地山。



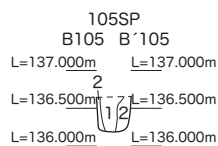
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(082SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(082SPの埋土。)

第 15 図 10B 区中央部の土坑 3 (1 : 100)

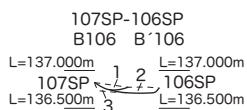
第2章 遺構



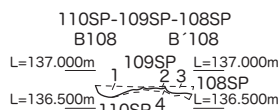
第 16 図 10B 区中央部の土坑 4 (1 : 100)



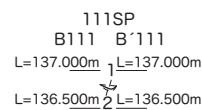
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(105SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(105SPの埋土。)



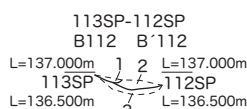
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(107SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(106SPの埋土。)
- 地山。



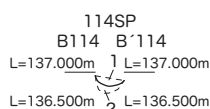
- 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(110SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(109SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(108SPの埋土。)
- 地山。



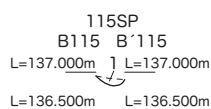
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(111SPの埋土。)
- 地山。



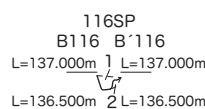
- 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(113SPの埋土。)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(112SPの埋土。)
- 地山。



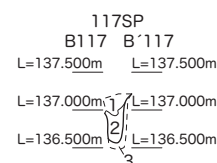
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(114SPの埋土。)
- 地山。



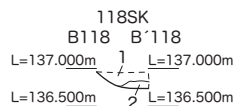
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(115SPの埋土。)



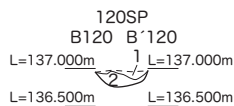
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(116SPの埋土。)
- 地山。



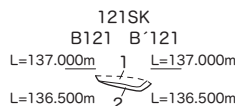
- 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(117SPの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(117SPの埋土。)
- 地山。



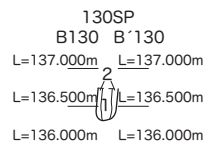
- 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(118SKの埋土。)
- 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(118SKの埋土。)



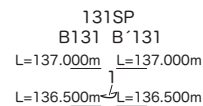
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(120SPの埋土。)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(120SPの埋土。)



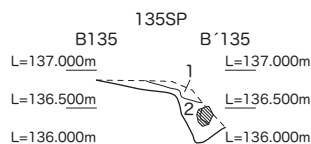
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(121SKの埋土。)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(121SKの埋土。)



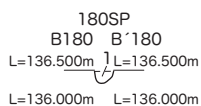
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(130SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(130SPの埋土。)



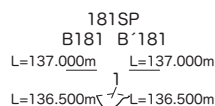
- 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(131SPの埋土。)



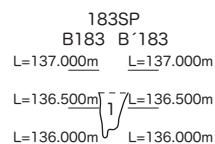
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(135SPの埋土。)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(135SPの埋土。)



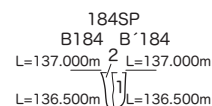
- 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂。(180SPの埋土。)



- 10YR5/8 黄褐色 中粒砂。細礫～中礫を多く含む。(181SPの埋土。)



- 10YR4/6 褐色 細粒シルト。極粗粒砂～中礫を多量に含む。(183SPの埋土。)

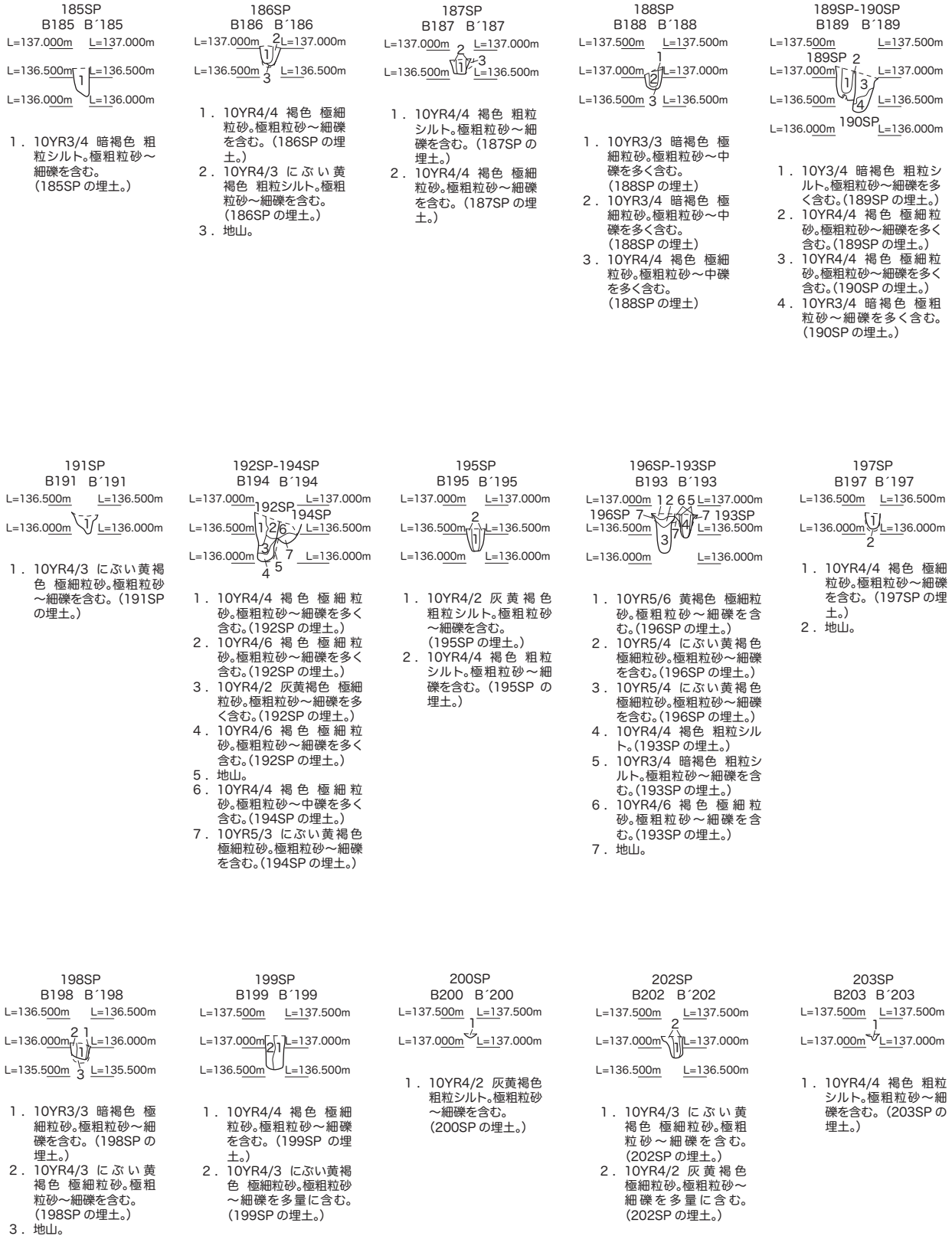


- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(184SPの埋土。)
- 10YR4/6 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(184SPの埋土。)

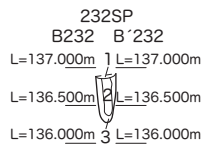
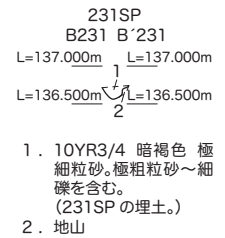
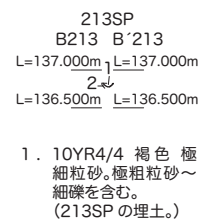
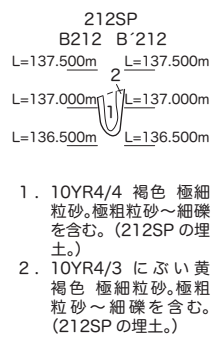
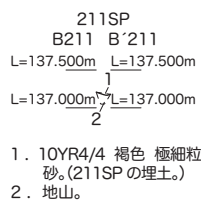
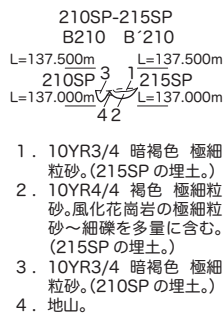
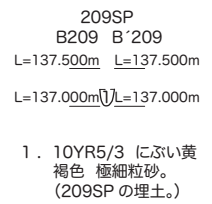
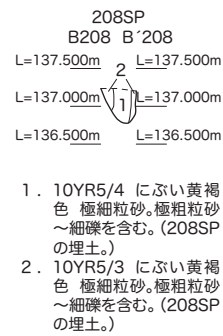
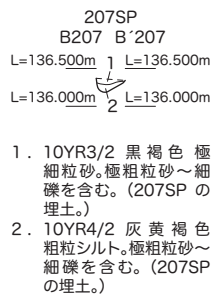
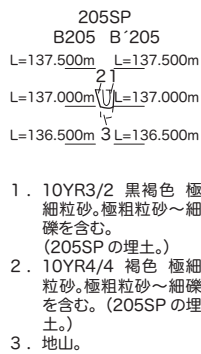
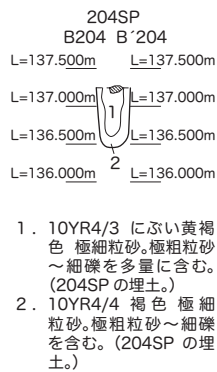


第 17 図 10B 区中央部の土坑 5 (1 : 100)

第2章 遺構



第 18 図 10B 区中央部の土坑 6 (1 : 100)



第 19 図 10B 区中央部の土坑 7 (1 : 100)



005SP
B005 B'005
L=137.000m L=137.000m
L=136.500m L=136.500m

1. 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～中礫を含む。(005SPの埋土。)

006SP
B006 B'006
L=137.500m L=137.500m
L=137.000m L=137.000m
L=136.500m L=136.500m

1. 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(006SPの埋土。)
2. 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(006SPの埋土。)

034SP
B034 B'034
L=137.000m L=137.000m
L=136.500m L=136.500m

1. 10YR3/3 暗褐色 粗粒シルト。極細粒砂～細礫を含む。(034SPの埋土。)
2. 地山。

123SP
B123 B'123
L=137.000m L=137.000m
L=136.500m L=136.500m
L=136.000m L=136.000m

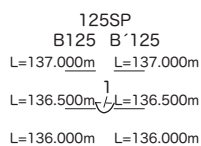
1. 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(123SPの埋土。)

124SP
B124 B'124
L=137.000m L=137.000m
L=136.500m L=136.500m
L=136.000m L=136.000m

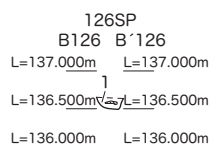
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(124SPの埋土。)



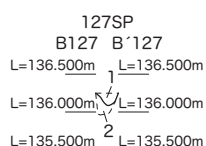
第20図 10B区東側の土坑と溝 1 (1:100)



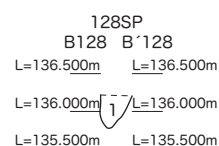
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(125SPの埋土。)



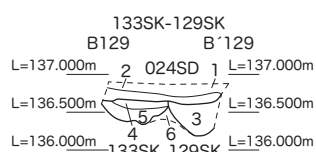
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(126SPの埋土。)



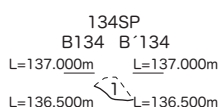
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。(127SPの埋土。)
- 地山。



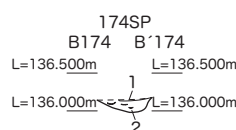
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(128SPの埋土。)



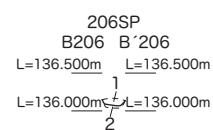
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(024SDの埋土。)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(024SDの埋土。)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(129SKの埋土。)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(133SKの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(133SKの埋土。)
- 地山。



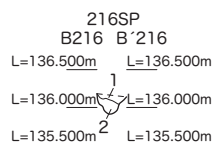
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(134SPの埋土。)



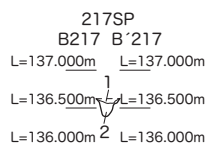
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(174SPの埋土。)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。炭化物を含む。(174SPの埋土。)



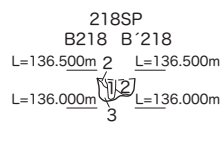
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(206SPの埋土。)
- 地山。



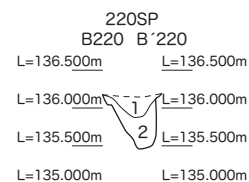
- 10YR6/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(216SPの埋土。)
- 10YR5/2 灰黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(216SPの埋土。)



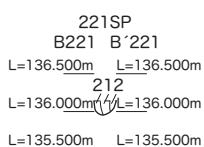
- 10YR4/2 灰黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(217SPの埋土。)
- 10YR4/2 灰黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(217SPの埋土。)



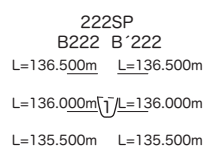
- 10YR3/3 暗褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(218SPの埋土。)
- 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多量に含む。(218SPの埋土。)
- 地山。



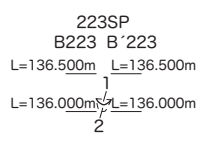
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を少量含む。(220SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 粗粒シルト。極粗粒砂～細礫を含む。(220SPの埋土。)



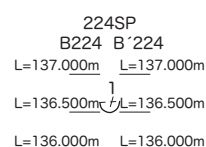
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(221SPの埋土。)
- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(221SPの埋土。)



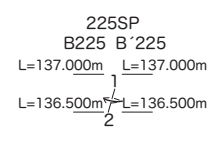
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(222SPの埋土。)



- 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(223SPの埋土。)
- 地山。



- 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(224SPの埋土。)



- 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(225SPの埋土。)
- 地山。

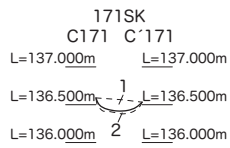
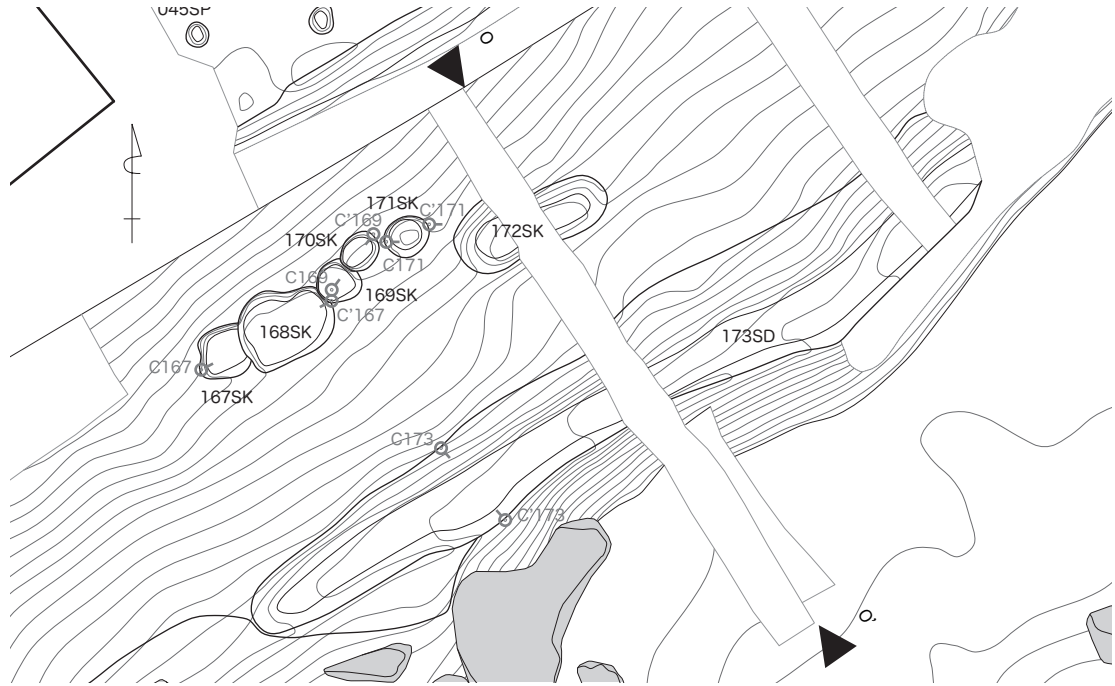


第 21 図 10B 区東側の土坑と溝 2 (1 : 100)

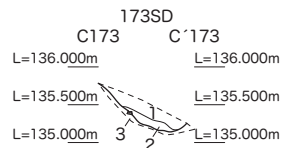
第2章 遺構



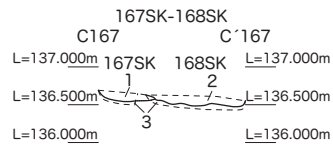
第22図 10B区東側の土坑と溝3 (1:100)



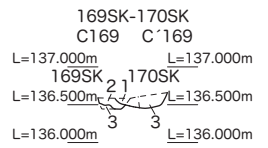
1. 10YR4/4 褐色 極細粒砂。極粗粒砂から細礫を多く含む。(171SKの埋土。)
2. 地山。



1. 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(173SDの埋土。)
2. 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を含む。(173SDの埋土。)
3. 地山。



1. 10YR4/3 にふい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多く含む。(167SKの埋土。)
2. 10YR4/3 にふい黄褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多く含む。(168SKの埋土。)
3. 地山。



1. 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多く含む。(169SKの埋土。)
2. 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多く含む。(169SKの埋土。)
3. 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂。極粗粒砂～細礫を多く含む。(170SKの埋土。)
4. 地山。



第 23 図 10C 区の土坑と溝 (1 : 100)

第3章 出土遺物

第1節 遺物整理の方法と分類 (第24図)

今回の発掘調査では、コンテナに10箱の出土遺物があり、中世のものを中心に古墳時代から近代にいたるものまでがある。出土遺物は、土器・陶磁器、石製品、金属（鉄）製品があり、これらの分類の後、不完全ではあるが発掘調査でみつかった遺構の時期や性格を考えるために、土器・陶磁器の出土状況を各遺構・出土層位毎に出土破片点数をカウントした。そのための土器・陶磁器の主要なものは12種類あり、以下の通りである。

須恵器：古墳時代後期から平安時代の陶器であるが、杯身・杯蓋・皿・盤・瓶類などがある。本遺跡では、全部で10点出土し、4点が図化できた。図化はしていないが、10B区035NRから出土した8世紀の壺が1点ある。

古代土師器：古墳時代後期から平安時代の土師器であるが、古代のナデ調整の甕・鍋、杯・皿類がある。本遺跡では、古代の土師器で明確なものは無いが、可能性のあるものとして、全部で25点を確認した。大部分は10Aa区の土石流と思われる自然流路の堆積から出土した。その他に、古墳時代の土師器が2点ある。

灰釉陶器：平安時代の愛知県の猿投古窯産と東三河から遠江の二川古窯産のものがあり、灰釉を施した碗・皿・瓶類を中心にみられるものである。本遺跡では、10B区の西側の谷と東側の谷につながる035NRから出土したものがほとんどで、全部で8点確認でき、7点図化した。主に10世紀のものがみられる。

南部系陶器：平安時代末からみられる、碗と小皿、片口鉢、甕である。渥美窯産のものを主体に少量の瀬戸窯産、設楽窯産などがみられる。瀬戸窯産のものは渥美窯産のものよりも、色調が明るく、胎土が緻密なものを分類した。全部で527点出土し、多くの遺構から出土した。おおよそロクロナデ成形で、底部に糸切り痕を残す。以下で細分するが、出土した遺物は全形が分かるものは少なく、細分ができないものは、器種のみ分類した(第24図)。

碗A：体部は丸みをもち、口縁部が外反するもので、高台は比較的高く断面「ハ」の字形になる。口縁部にヘラによる輪花が施されるものがあり、口縁部から内・外面に灰釉が施されるものが多い。渥美1型式に含まれる。

碗B：体部は丸みをもち、口縁部が外反するもので、高台は断面三角形になる。口縁部に指押さえによる輪花が施されるものがあり、口縁部から内・外に灰釉が施されるものがある。渥美2型式に含まれる。

碗C：体部の丸みが少なくなり、口縁部の外反が弱く、あるいは直線的にひらくもので、高台は扁平な断面三角形や不整形なものになる。口縁部の輪花や内・外面の施釉による灰釉は不明瞭になる。一部は渥美2b型式に含まれるが、大部分は渥美3型式に含まれる。

碗D：体部は丸みがなくなり、口縁部が直線的にひらくもので、高台が付かない。渥美3型式に含まれる。

小碗：体部は丸みをもち、口縁部が外反するもので、高台が付くもの。渥美1型式に含まれる。

皿A：体部が下半にやや丸みがあり、口縁部が弱く外反するもので、器高が2.0cm～2.5cm前後のもの。底部がやや突出するものがある。渥美2型式に含まれる。

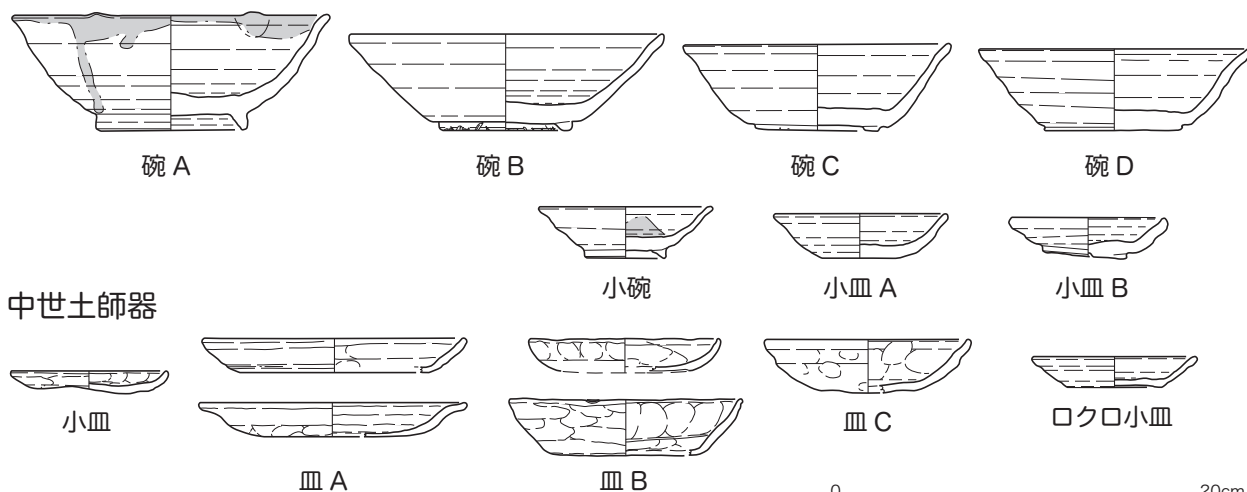
皿B：器高が1.7cm～1.8cm前後の扁平な形態になるもので、口縁部が底部から直線的にひらいておわるもの。渥美3型式に含まれる。

片口鉢：底部から斜め上方に大きくひらいておわる鉢形のもので、高台が付き、口縁部に指ナデによる片口を設ける。

北部系陶器：美濃産の山茶碗と小皿がある。南部系陶器と比べると、薄手で、緻密な胎土をもつ。10B区の検出2から1点と10B区129SKから1点、11A区001SXから1点(E407)が出土した。E407は碗の口縁部で、口縁部径13.0cmをはかる、明和窯型式～大畑大洞窯型式のものと思われる。

中世土師器：中世のロクロ成形の小皿・皿、ナデ・ヨコナデ調整小皿・皿である(第24図)。ナデ・ヨコナデ調整によるものが主体で、ロクロナデ調整のものは

南部系陶器



*口クロ皿は良好な残りのものがなく、代表例を提示できなかつた。

第 24 図 南部系陶器 碗・皿類と中世土師器 皿類の分類 (1:4)

少ない。全部で 397 点出土した。

小皿：内・外面の底部付近は指押さえやナデ調整が主体で、口縁部をヨコナデ調整する。形態は口縁部径 8.0cm～9.0cm 前後より小さく、器高が 1.5cm 前後の、比較的扁平な形態のものである。個々の形態には微細な違いがみられ、時期や製作地・製作者などの違いが存在するものと思われる。

皿 A：調整はナデ小皿と同様で、形態は口縁部径 10cm 前後より大きく、器高が 2.0cm 以下の比較的扁平な形態のものである。底部は丸みをもつものと平底のものがあり、口縁部もやや内湾状におわるものや強く外反しておわるものがある。

皿 B：調整はナデ小皿と同様で、形態は口縁部径 10cm 前後より大きく、器高が 2.5cm 前後と杯に近い形態をもつものである。底部はやや丸みをもつものと平底のものがある。

皿 C：調整はナデ小皿と同様で、形態は口縁部径 10cm 前後より大きく、器高が 2.5cm 前後と鉢に近い形態をもつものである。底部はやや丸みをもつようである。

口クロ小皿：ロクロナデ調整によるもので、口縁部径 8cm～9cm 前後の小型の皿である。ほとんどが底部に糸切り痕が残る。

口クロ皿：ロクロナデ調整によるもので、口縁部径が不明瞭なものを含む。

古瀬戸陶器：鎌倉時代から室町時代の瀬戸窯産の施釉

陶器で、天目茶碗・灰釉の皿類・鉢類・瓶類、鉄釉擦鉢類・瓶類などがみられる。出土点数は 31 点で、10B 区の溝や柱穴と思われる土坑から主に出土した。

青磁：中世に渡来した青緑色の釉が施された磁器で、碗・香炉・小鉢がある。全部で 8 点出土した。

白磁：中世に渡来した白色の釉が施された磁器で、碗・瓶がある。全部で 2 点出土した。

大窯陶器：室町時代末・戦国時代の瀬戸・美濃窯産の施釉陶器で、天目茶碗・灰釉の皿類・鉢類・瓶類、鉄釉擦鉢類・瓶類などがみられる。出土点数は全部で 5 点と少なかった。

常滑産甕：中世常滑窯産の口縁部を外側に折り返した甕を中心に持ち上げた。出土点数は 54 点で、10B 区の土坑や溝を中心に出土した。

中世土師器鍋：鎌倉時代から戦国時代の伊勢型鍋、羽釜形鍋、内耳鍋である。全部で 453 点ある。10B 区から大部分が出土しているが、その他の調査区からも少量出土している。

伊勢型鍋：球形の体部に、頸部がすばまり、口縁部が外反してひらく鍋で、口縁部を内面側にやや肥厚するか、内面側に折り返して成形する。口縁部はヨコナデ調整で、体部は内・外面ともハケ調整やナデ調整を施す。

羽釜形鍋：球形からやや扁平な球形の体部から口縁部が内湾しておわる鍋で、口縁部の下に扁平な鍔がめぐるものである。口縁部はヨコナデ調整で、体部の外面はハケ調整、内面はヨコナデ調整をする。

内耳鍋：口縁部内面の2ヶ所に内耳が付く鍋で、やや扁平な球形の体部から頸部ですぼまり口縁部が外反しておわるものと頸部がややすぼまり口縁部が内湾しておわるものがある。口縁部はヨコナデ調整で、体部の内・外面ともは指ナデ・ヨコナデ調整を施す。

「く」の字口縁鍋：球形の体部から頸部がすぼまり、口縁部が断面「く」の字状に外反しておわる鍋で、口縁部が適まみ上げられているものである。内耳鍋の口縁部が外反するものと同一の可能性がある。口縁部はヨコナデ調整で、体部の内・外面ともヨコナデ調整を施す。

茶釜形鍋：球形の体部から口縁部が折れて上方に立ち上がるいわゆる茶釜形の鍋で、体部上半に扁平な鏝がめぐる。口縁部はヨコナデ調整で、体部は内・外面ともハケ調整の後ナデ・ヨコナデ調整を施している。15世紀後半以後のものである。

近世陶磁器：江戸時代の瀬戸窯と美濃窯などで生産された陶器・磁器、他地域産の磁器などがみられる。江戸時代後期以後のものが多く、全部で21点出土した。

いぶし瓦：江戸時代後期以後の表面を黒色にいぶした瓦で、15点出土した。その中で形態の分かるいぶし瓦を3点図化した。これらは調査区の西にある丘陵上にあった勅養寺観音堂に伴っていた可能性が高いものである。

近世土師器：江戸時代の焙烙鍋がほとんどである。3点出土した。

石製品：石製品は全部で12点出土しており、剥片石器の未製品が1点、砥石が7点、磨石・台石が3点、敲き石が1点ある。

鉄製品：釘が2点、近代の蹄鉄が1点ある。

土製品：10B区の検出1から出土したものが1点(E327)ある。

以上の分類で、各遺構・出土層位毎に出土破片点数をカウントした上で、各遺構の時期を反映する遺物や図示することができる遺物を抽出し、実測図と一覧表を作成した。また主要な遺物に関しては、写真撮影を行い、写真図版にその遺物を掲載した。ただし、実測図を作成した遺物は、各遺構の時期より古いものも多く、全てが遺構の時期を反映する訳ではないので、各遺構の時期については、第2章 遺構に記載したものを

参照されたい。器形の計測値では、端部の接地点で口縁部径、底部径などを計測しており、底部径で、高台のあるものは高台部の径を計測した。

尚、出土遺物について、遺物観察表、出土遺物をカウントした出土状況の一覧表を添付DVDの中に収録した。

第2節 各調査区の出土遺物

・10Aa 区の出土遺物 (第25図)

003SD (E001・E002)：E001は南部系陶器の小皿Bで器高1.7cm、E002は南部系陶器の碗である。

004NR (E003～E006)：E003は瀬戸美濃産陶器の17世紀前半の志野釉皿で、体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が外に折れて終わるものである。口縁部径10.8cm、底部径6.0cm、器高2.6cmである。E004は「く」の字口縁鍋で、外面には煤が付着しており、口縁部径16.4cmをはかる、16世紀のものと思われる。

E005は甕か鉢と思われる底部片で、底部径10.8cmをはかる。E006は茶釜形鍋で、頸部径18.0cmである。

検出1 (E007～E015)：E007～E009は南部系陶器の碗Cで、E007が口縁部径14.2cm、底部径7.0cm、器高4.5cm、E008が口縁部径15.3cm、底部径8.2cm、器高4.8cm、E009が口縁部径15.0cmをはかる。E009の外面には字は不明であるが、墨書がみられる。E010は南部系陶器の小皿Bで、別の小皿が釉着している、口縁部径8.3cm、器高1.7cmである。

E011は口縁部が内湾する土師器の皿Aで、口縁部径10.0cmをはかる。E012は土師器のロクロ皿で、底部径6.8cmである。E013は磁器の染付小碗で、底部径2.8cmの近世後期以後のものである。E014・E015は近世後期以後のいぶし瓦で、平面は台形状の道具瓦で、長さ10.5cm前後、下端の幅10.5cm前後、厚み1.5cm前後をはかる、内面型外し後ケズリ成形とナデ調整が入り、内面に型に伴う布圧痕と爪圧痕が残る。

検出2 (E016～E026・S001・S002)：E016は古墳時代前期の土師器の壺の底部で、底部径5.5cm、表面は摩滅していた。E017は底部径11.4cmの須恵器の壺である。E018～E023は南部系陶器で、E018は小皿Bで口縁部径9.9cm、底部径7.4cm、器高1.7cm

である。E019は碗Bで口縁部径14.6cm、E020～E023は碗Cで、E020が口縁部径14.6cm、E021が底部径6.6cm、E022が底部径6.0cm、E023が底部径5.6cmをはかる。E024はロクロ小皿で底部径5.8cm、E025はロクロ皿で底部径9.4cmである。E026は土師器の羽釜で、口縁部は欠損している可能性があるが、口縁部の内傾が大きくなる北村分類の羽釜A4類に近く、15世紀のもの可能性がある。S001は安山岩製の剥片で、長径4.4cm、短径3.4cm、厚み0.7cmをはかる。片面の縁辺に小剥離が認められる。S002は凝灰質泥岩製の砥石で、長さ9.0cm、幅3.6cm、厚み1.2cmの板状で、端面を除く平面を砥面として、挿り目の方向は長辺の方向が多い。

・10Ab区の出土遺物(第25図・第26図)

006SK(E027):E027は南部系陶器の碗Bで底部径7.0cmである。

007SK(E028～E038):E028～E036は南部系陶器である。E028は小皿Bで口縁部径9.4cm、底部径6.2cm、器高1.9cmをはかる。E029は碗Bで底部径6.0cm、E030・E031は碗Aで口縁部径16.0cmをこえる大型のもの、E032～E034の碗は口縁部径14.0cm～14.6cm、E035・E036は口縁部径12.6cmと13.6cmで小型である。E037は白磁の碗の底部で、底部径7.0cmの削り出し高台である。この白磁碗は、12世紀後半～13世紀初頭の白玉縁の口縁になるものと思われる。E038は伊勢型鍋で、口縁部を端面が内傾して肥厚させる北村分類の鍋A2類にあたり、口縁部径20.8cmで、12世紀後半のものと思われる。

008SK(E039・E040):E039・E040は内・外面指ナデ・指押さえとヨコナデ調整による土師器の小皿で、どちらも口縁部径8.2cm、器高1.2cmである。E040の体部内・外面に白色付着物がみられる。

009SP(E041):E041は南部系陶器の碗で、口縁部径13.8cmである。

011SP(E042):E042は土師器の皿で、口縁部径14.0cmをはかる。

検出1(E043・E044):E043は南部系陶器の小皿Bで、口縁部径8.0cm、E044は土師器の皿Bで、口縁部径9.8cmをはかる。

検出2(E045):E045は土師器の皿Aで、体部下半

は丸みをもつ。口縁部径9.6cmである。

・10Ac区の出土遺物(第26図)

004NR・検出2(E046～E049):E046は南部系陶器の碗で、口縁部径14.0cmの小型のもの、E047は平安時代末から中世初期にさかのぼる可能性のあるロクロナデ調整の土師器皿で、糸切りをした底部から、体部が斜め上に直線的にのびて口縁部にいたるもので、口縁部径12.6cm、底部径7.0cm、器高3.2cmをはかる。E048は土師器の皿BかCで、口縁部径11.6cmをはかる、口縁部の内面に爪圧痕がのこる。E049は土師器の羽釜形鍋で、内湾した口縁部から北村分類の羽釜A3類～A4類と類似する形態で、14世紀後半のものと思われる。

010NR(E050～E054):E050・E051は南部系陶器で、E050は碗Cで底部径7.7cm、E051は甕の底部片で、内・外面ヨコナデ調整がみられ、底部径13.8cmをはかる。E052～E054は中世の土師器で、E052は底部の丸い小皿で、口縁部径8.6cm、器高1.6cmである。E053・E054は皿Bで、どちらも底部を欠くが、E053は口縁部径10.0cm、器高2.5cmの杯形のもの、E054は口縁部径11.6cmのやや丸底のものである。

・10B区の出土遺物(第26図～第35図)

010SK(E055～E057):E055は南部系陶器の小皿Bで、口縁部径9.2cm、E056は南部系陶器の碗Cか碗Dで、口縁部径14.0cmをはかる。E057は古瀬戸陶器で、口縁部内・外面に灰釉が施された灰釉椀型鉢と思われる。やや受け口状になる口縁部で、径16.0cmである。

011SD(E058):土師器の小皿で、口縁部径6.6cm、底部径3.0cm、器高1.0cmである。

012NR(E059～E088・M001・S003～S007):E059は青磁の小鉢か香炉と思われる口縁部片で、口縁部が外に折れておわるものである。口縁部径11.2cmをはかる。E060～E076は南部系陶器である。E060～E066は小皿で、E060～E062は小皿Bで口縁部径7.4cm～8.2cm、底部径4.8cm～6.9cm、器高1.5cm～1.9cmの扁平な形態なもので、E063は小皿Aで口縁部径9.0cm、底部径4.0cm、器高2.35cmで、E062は尾張6型式のものと思われる。E067～E075は碗で、E070・E073は碗Bで底部径6.8cmと

7.0cm、E071・E072・E074・E075 は碗 C で底部径 6.4cm～7.0cm、E069 は碗 D で底部径 7.4cm である。E071 の外面底部には字は不明であるが、墨書がみられる。E076 は甕の肩部で、外面にタタキ痕がみられる。E077 は片口鉢で、口縁部径 30.0cm をはかる。E078～E086 は中世の土師器である。E078～E082 は皿 B で、口縁部径 11.8cm～14.8cm、E078 は平底の形態である。E083 は底部径 7.6cm のロクロ皿、E084 は小皿で、口縁部径 5.6cm、器高 1.15cm をはかる。E085 は 15 世紀後半以後の茶釜形鍋で、口縁部径 15.0cm、頸部径 15.7cm である。E086 は「く」の字口縁の内耳鍋で、口縁部径 22.2cm、頸部径 21.0cm、体部径 23.4cm、器高 13.5cm で 15 世紀後半以後のものである。E087 は灰釉四耳壺の肩部で、肩部に帯状の粘土を貼り付けた把手が付き、沈線直線文が 3 条めぐり、古瀬戸後 II 期～後 IV 期のものである。E088 は須恵質の凹面布目の残る平瓦で、厚みは 2.4cm である。M001 は蹄鉄で、前後 11.5cm、左右 10.3cm、厚み 0.6cm 前後の左後ろ足の可能性が高いもので、やや小型のものである。平面馬蹄形の右と左にそれぞれ 3ヶ所の長方形の釘穴がある。S003・S004 が凝灰岩製の砥石で、S003 は厚み 6.1cm の扁平な角礫で、平坦な 2 面に研磨痕がある、被熱を受けた煤が付着している。S004 は厚み 5.9cm の扁平な亜円礫で、平坦な 2 面に研磨痕がみられる。S005～S007 は磨石か台石と思われるもので、扁平な亜円礫の平坦面が円滑になっている。S005 が安山岩で、長径 18.9cm、短径 12.5cm、厚み 4.8cm、S006 が片麻岩で、長径 16.6cm、短径 9.85cm、厚み 5.0cm、S007 が凝灰岩で、長径 9.95cm、短径 6.25cm、厚み 4.3cm である。S007 は破面も含めて全体が被熱して煤が付着している。

O20SD (E089) : E089 は土師器の小皿で、口縁部径 8.0cm、底部径 4.7cm、器高 1.4cm をはかる。

O21SD (E090～E102・S008) : E090～E096 は南部系陶器である。E090 は小碗で口縁部径 10.0cm、E091 は小皿 B で口縁部径 8.2cm、底部径 4.4cm、器高 1.7cm、E092 は小皿の底部で底部径 3.8cm をはかる。E093～E096 は碗で、E093 は口縁部径 16.5cm、E094・E095 が口縁部径 15.0cm、E096 は碗 D で底部径 7.6cm である。E097 は土師器の小皿で口縁部径

8.2cm、底部径 4.2cm、器高 1.3cm、E098 は土師器の皿 B か皿 C で、口縁部径 12.0cm をはかる。E099 は古瀬戸陶器の盤類と思われる平底のもので、底部径 11.8cm をはかる、外面底部際を回転ヘラケズリ調整されている。E100～E102 は土師器の伊勢型鍋で、口縁部を大きく外反させて、口縁端部を内面に折り返す北村分類の A4b 類～A5 類にあたるもので、13 世紀後半～14 世紀のものと思われる。口縁部径は E100 が 30.0cm、E101 が 32.0cm、E102 が 47.0cm をはかる。S008 はホルンフェルス製の砥石で、長さ 11.55cm、幅 4.5cm、厚み 2.0cm の長方形の板状の形態で、平坦な 2 面が砥面として使われており、摺り目の方向は不定である。

O22SD (E103～E107) : E103 は南部系陶器の小皿で口縁部径 8.0cm、E104 は南部系陶器の碗 B で口縁部径 13.6cm、尾張 6 型式に分類できる。E105 は土師器の小皿で、底部中央が上げ底になる、口縁部径 7.0cm、器高 1.3cm である。E106 は土師器の皿 C になるものと思われる、口縁部径 10.8cm である。E107 は古瀬戸陶器の灰釉平碗で、口縁部径 12.0cm の古瀬戸後 III 期のものと思われる。

O23SD (E108～E115) : E108・E109 は南部系陶器の小皿 B で、E108 が口縁部径 8.4cm、底部径 6.0cm、器高 1.4cm、E109 が口縁部径 9.0cm をはかる。E110～E112 は南部系陶器の碗で、E110 は口縁部径 13.0cm、E111・E112 は碗 C で、E111 は底部径 6.8cm、E112 は底部径 6.0cm である。E113 は土師器の杯身の形態になるもので、口縁部がヨコナデ調整されて、薄くおわる。E114 は土師器の皿 C で口縁部径 10.0cm である。E115 は土師器のロクロ皿の底部で、6.2cm をはかる。

O24SD (E116～E123) : E116～E121 は南部系陶器である。E116・E117 は小皿 B で、E116 は口縁部径 8.6cm、底部径 6.2cm、器高 1.5cm、E117 は口縁部径 8.2cm、底部径 5.4cm、器高 1.8cm をはかる。E118 は碗で口縁部径 17.0cm、E119 は碗 C で底部径 9.4cm、E120 は尾張 6 型式と思われる碗 B で底部径 7.6cm をはかる。E121 は片口鉢で、底部径 13.0cm をはかる。E122 は土師器の皿 B でやや丸みのある底部をもつ、口縁部径 12.0cm、底部径 6.5cm、器高 2.9cm

である。E123は土師器のロクロ小皿で、口縁部径8.0cmである。

025SP (E124) : E124は南部系陶器の碗で、口縁部径15.6cmである。

026SP(E125・E126) : E125・E126は土師器の小皿で、E125は粘土紐の積み上げ痕が左回りに残る、口縁部径8.5cm、底部径4.2cm、器高1.75cm、E126は口縁部径7.2cmである。

027SP (E127～E130) : E127～E129は南部系陶器の小皿Bで、口縁部径7.7cm～8.1cm、底部径3.5cm～4.5cm、器高1.55cm～2.05cmである。E130は南部系陶器の碗で、口縁部径15.6cmである。13世紀前半～中頃のものと思われる。

035NR (E131～E210・S009・S010) : E131は須恵器の杯身で底部径7.6cmである。E132・E133は灰釉陶器の皿で、E132は内・外面に灰釉がみられ、口縁部径16.0cm、E133は断面方形の高台が付くもので、底部径7.2cmである。E134～E136は灰釉陶器の碗の底部で、どちらも内湾する断面三日月形の高台が付くものである、E134は底部径7.15cmの折戸53号窯型式、E135は底部径6.4cmをはかる。E136は底部径6.0cmで、東山72号窯型式のものである。またE134の外面底部には墨書「[錢_カ」がみられる。E137～E197は南部系陶器である。E137は小碗で、底部外面に墨書「[千]」がみられる、底部径4.0cmである。E138～E142は小皿で、E142は底部径4.4cmで小皿A、E138・E139・E141は小皿Bで、E138は口縁部径7.8cm、底部径3.7cm、器高1.75cm、E139は口縁部径9.0cm、E141は底部径5.6cmで、E140は口縁部径8.4cmである。E139は胎土の特徴からの尾張6型式～7型式のものと思われる。E143～E197は碗で、碗AはE160・E161・E164・E172・E184・E190・E192・E194、碗BはE143～E148・E173・E180・E182・E183・E185～E189・E193・E196、碗CはE191に分けられ、E172は灰釉陶器に近い特徴を持ち、E194は尾張3型式と思われる。墨書がE148・E191・E196にみられ、E148は底部外面に「□□丸」、E191は底部外面に「[]う」、E196は底部内面に「上[紙_カ」が確認できた。碗の法量では、口縁部径はE143が17.2cm、底部径7.3cm、器高5.4cmで最も大きく、

E149～E152が17.0cm、E153が16.8cm、E144が16.4cm、E145・E158・E159が16.4cm、E146が16.1cm、E154～E157・E160～E162が16.0cm、E147が15.8cm、E148・E163～E169が15.6cm、E172が15.4cm、E170・E171・E173が15.0cm、E174・E175が14.8cm、E176が14.0cm、E177が13.6cm、E178が13.2cm、E179が13.0cmで、口縁部径16.0cmが多い。底部径はE180が8.5cmと最も大きく、E181・E182が8.0cm、E183・E184が7.6cm、E185が7.5cm、E143・E146が7.3cm、E186～E190が7.0cm、E144が6.8cm、E192が6.7cm、E193が6.6cm、E191が6.5cm、E148・E194・E196が6.4cm、E147が6.3cm、E195が6.0cm、E197が5.4cm、E145が5.3cmで7.0cm前後が多い。器高はE147・E148が5.7cm、E145が5.55cm、E143・E146が5.4cm、E144が5.1cmである。口縁部径の小さいものは碗Cや碗Dになるものが含まれる。E198～E203は中世の土師器である。E198はロクロ小皿で口縁部径8.6cm、底部径5.0cm、器高1.6cm、E199は小皿で口縁部径9.2cm、E200は皿Bで口縁部径11.2cm、底部径7.2cm、器高2.15cm、E201は皿Aで口縁部径12.0cm、E202はロクロ皿で底部径6.0cmである。E203は伊勢型鍋で、北村分類のA4類と思われる。E204～E208は10B区035NRから出土したもので、E204は灰釉縁釉小皿の底部片で底部径4.7cm、E205・E206は灰釉平碗の口縁部で、E205が口縁部径15.0cm、E206が口縁部径16.6cmをはかる。E207は灰釉卸目付大皿で、口縁部径42.0cmの口縁部内面上端がヨコナデによりくぼむ形態である。E208は灰釉平碗の底部片で、内・外面に灰釉がみられ、高台は削り出し高台のものである。E204～E208は古瀬戸後Ⅲ期～古瀬戸後Ⅳ古期のものである。E209は青磁の香炉と思われるもので、底部径26.0cmの大型の平底のものである。E210は江戸時代の美濃窯産陶器の灰釉丸碗である、口縁部径13.0cmをはかり、口縁部内・外面に灰釉を施す。S009・S010は10B区の035NRから出土したもので、S009は安山岩の棒状の垂円礫を使用したもので、端部に敲打痕がみられる。欠損しているが長さ7.8cm、幅4.0cm、厚み2.8cmをはかる。S010は泥質凝灰岩製の砥石で、欠損しているが長さ

3.5cm、幅 2.9cm、厚み 0.6cm の扁平な板状のもので、平坦な 2 面に研磨痕がみられる。

035NR は中世以前の土石流と思われる堆積で、その上層付近から 13 世紀前半～中頃の 027SP が掘削されているので、13 世紀中頃以後の遺物は 035NR の堆積以後に掘削された遺構に伴う可能性が高く、鎌倉時代後期から江戸時代の遺構が存在した痕跡になる。

036SP (E211・E212) : E212 は土師器の小皿で、口縁部径 8.8cm、底部径 5.6cm、器高 1.7cm、E213 は土師器の皿 A で、口縁部が内湾するもので、口縁部径 13.0cm をはかる。

040SK (E213～E222) : E213～E216 は南部系陶器で、E213 は小皿 A、E214～E216 は碗である。E213 は底部径 4.0cm、E214 は口縁部径 19.0cm で E214 は設楽窯産と思われる碗、E215 は口縁部径 14.0cm、E216 は底部径 4.3cm である。E217 は古瀬戸陶器の灰釉平碗で、口縁部径 16.0cm をはかる。灰釉が口縁部から内・外面に施されており、古瀬戸後 III 期のものと思われる。E218～E220 は常滑産甕で、E218 は体部上半の張った肩部から狭まり、頸部から口縁部が短く上方に立ち上がり、口縁部の端部が外側に折り曲げられて、上・下に分かれている。常滑 10 型式と思われるもので、口縁部径 36.0cm、頸部径 34.2cm をはかる。E219 は口縁端部が折り曲げられて口縁端部が離れていないもので、口縁部径 34.0cm をはかり、常滑 10 型式のものと思われる。E220 は底部片で、底部径 20.0cm をはかるもの、E218・E219 と同一個体の可能性がある。E221 は土師器の皿 A で、口縁部が強く外反するもので、口縁部径 14.0cm、底部径 7.4cm、器高 1.8cm をはかる。E222 は土師器の茶釜形鍋で、口縁部径 15.8cm、頸部径 14.5cm、体部径 25.9cm で、体部上半に耳が付く、15 世紀後半以後のものである。内面と外面体部下半に煤が付着する。

044SP (E223) : E223 は古瀬戸陶器の灰釉平底末広碗で、やや小さい底部から斜め上に口縁部が広がる、口縁部径 11.0cm で、古瀬戸中 III 期～古瀬戸中 IV 期である。

045SP (E224) : E224 は口縁部が内傾する羽釜形鍋で、14 世紀後半の北村分類の A3 類になるものと思われる。

075SP (E225) : E225 は土師器の皿 A で、口縁部が

内湾するもので、口縁部径 13.8cm である。

087SP (E226) : E226 は古瀬戸陶器の天目茶碗で、古瀬戸後 IV 古期のものと思われる。

092SP (E227) : E227 は土師器の小皿で、口縁部径 7.8cm、底部径 5.8cm をはかる。

120SP (E228) : E228 は南部系陶器の小皿で、口縁部径 8.0cm である。

122SK (E229・E230) : E229 は南部系陶器の碗の底部で、底部径 7.6cm。E230 は土師器の小皿で、口縁部径 9.0cm である。

128SP (E231) : E231 は土師器の皿で、破片であるが、断面の形態から皿 B になる可能性が高い。

133SK (E232) : E232 は南部系陶器の碗 C で、底部径 6.5cm をはかる、尾張 6 型式に分類できる。

140SP (E233) : E233 は南部系陶器の小皿 B で、口縁部径 8.0cm、底部径 4.8cm、器高 1.9cm をはかる、尾張 6 型式に分類できる。

148SP (E234・E235) : E234・E235 は土師器で、E234 は口縁部径 9.0cm の小皿、E235 は皿 B で、口縁部径 14.0cm、底部径 8.0cm、器高 2.9cm をはかる。

149SP (E236～E239) : E236～E239 は南部系陶器の碗で、E236・E237 は口縁部径 15.0cm、E238 底部径 7.0cm の碗 C、E239 は断面三角形のきれいな高台が付く碗 A で、渥美 1 式以前の古い特徴を持つもの、底部径 6.8cm である。

150SP (E240・E241) : E240 は土師器の皿 B で、口縁部径 13.8cm。E241 は南部系陶器の碗で、口縁部径 16.0cm である。

156SP (E242・E243) : E242 は南部系陶器の小皿 B で、口縁部径 8.7cm、底部径 5.0cm、器高 1.8cm で、尾張 6 型式に分類できる。E243 は土師器の小皿で、口縁部径 8.0cm である。

157SP (E244・E245) : E244 は土師器の皿 B で、口縁部径 14.0cm、E245 は土師器の皿 A で、口縁部径 10.0cm の口縁部が内湾するものである。

158SP (E246) : E246 は南部系陶器の碗で、底部径 6.6cm である。

159SP (E247) : E247 は土師器の小皿で、口縁部径 7.0cm、底部径 4.0cm、器高 1.15cm の扁平なものである。

160SP(E248～E253):E248は南部系陶器の碗Bで、底部外面に墨書「[東_カ」がある。底部径6.3cmである。E249～E251は土師器の小皿で、E249は底部がやや上げ底になるもので、口縁部径8.6cm、底部径5.2cm、器高1.2cm、E250は口縁部径8.2cm、底部径4.2cm、器高1.45cm、E251は口縁部径7.8cm、器高1.15cmである。E252は土師器の皿Bで、口縁部径20.0cmをはかる。E253は青磁の碗の体部片で、内面に文様がみられる。

163SP (M002):M002は鉄製品の釘と思われるもので、頭部と先端部は欠損しているが長さ6.35cm、幅1.2cm、厚み0.8cmである。

174SP (E254・E255):E254・E255は土師器の伊勢型鍋で、北村分類のA5類にあたり、同一個体の可能性がある。E254は口縁部径26.0cm、E255は頸部径21.0cm、体部径24.7cmをはかる。

175SP (E256～E260・M003):E256～E258は南部系陶器で、E256は小皿Aで口縁部径7.8cm、底部径4.5cm、器高1.9cmをはかる、E257は碗Cで底部径7.0cm、E258は片口鉢で底部径10.0cm、E257・E258は尾張6型式に分類できる。E259・E260は土師器の皿Bで、E259は口縁部径12.2cm、E260は底部径7.2cmをはかる。M003は鉄製品の釘で、先端部は欠損しているが、東部が屈曲する形態で、長さ3.8cm、幅1.0cm、厚み0.75cmである。

195SP (E261):E261は南部系陶器の小碗で、口縁部径8.0cmである。

206SP (E262):E262は南部系陶器の碗で、口縁部径15.0cmである。

210SP (E263):E263は土師器の皿Bで、口縁部径12.0cm、内面に煤が付着する。

218SP (E264):E264は南部系陶器の碗Cで、底部径5.6cmである。

227SP (E265):E265は土師器で、口縁部径10.0cm程であるが、薄手なので小皿と考えた。

238SP (E266・E267):E266は土師器の小皿で、口縁部径7.6cm、底部径5.5cm、器高1.0cmである。E267は南部系陶器の碗Cで、口縁部径12.8cm、尾張6型式に分類できる。

244SP (E268・E269):E268は南部系陶器の碗C

で、底部外面に墨書がみられる、底部径7.0cmである。

E269は土師器の皿Bで、口縁部径13.0cmをはかる。

254SP (E270・E271):E270は土師器の皿Bで、口縁部径14.0cm、底部径9.0cm、器高2.6cmである。E271は南部系陶器の小皿Bで、口縁部径8.8cm、底部径4.2cm、器高1.8cmである。

255SK (E272～E274):E272は南部系陶器の片口鉢で、尾張6型式に分類できる、口縁部径29.8cmをはかる。E273は土師器の小皿で、口縁部径8.8cm、E274は土師器の皿Bか皿Cで、口縁部外面に指ナデ調整の際の爪圧痕がみられる。口縁部径10.8cmである。

検出1 (E275～E327・S011):E275は8世紀の須恵器の杯身で、口縁部径12.0cm、底部径8.8cm、器高3.8cmをはかる。E276は灰釉陶器の碗の底部で、底部径6.0cm、やや外にひらく内湾する高台が付く。E277～E282は南部系陶器の小皿で、E277～E279・E282は小皿Aに分類できる。E277は口縁部径8.8cm、底部径4.6cm、器高1.9cm、E278は口縁部径8.3cm、底部径4.2cm、器高1.8cm、E279は口縁部径7.9cm、底部径4.8cm、器高2.0cmをはかる。E280・E281は口縁部径9.0cm、E282は底部径4.0cmである。E279は内・外面に煤が付着しており、灯明皿に転用されたものと思われる。E283～E298は南部系陶器の碗で、E287は灰釉陶器の皿に近い形態をもつもの、E294・E296は碗Bで尾張6型式に分類できるもの、E298も碗Bで外面底部に墨書がみられるもの、E283～E285・E291～E293・E297は碗Cである。碗の口縁部径は、E286が19.6cmで最も大きく、E283・E287は16.8cm、E284が15.8cm、E288が15.4cm、E285・E289が15.0cm、E290が14.2cmである。次に碗の底部径は、E283が8.6cmと最も大きく、E292・E293が7.0cm、E285が6.8cm、E291が6.5cm、E294が6.2cm、E284・E295が6.0cm、E296が5.8cm、E297・E298が5.6cmである。また器高はE283が5.0cm、E284が5.4cm、E285が5.1cmである。E299は南部系陶器の甕の外反する口縁部で、口縁部径68.0cmである。E300～E317は土師器の皿で、E300・E307・E312は口縁部が内湾する皿A、E301～E304・E308～E311・E313は皿B、

E305・E306・E314・E315は小皿、E316はロクロ皿、E317はロクロ小皿である。皿AのE300は口縁部径13.7cm、底部径10.0cm、器高1.7cm、E307は口縁部径13.0cm、E312は口縁部径10.0cmである。皿BのE301は口縁部径13.0cm、底部径5.4cm、器高2.5cm、E302は口縁部径12.1cm、底部径3.5cm、器高2.85cm、E303は口縁部径11.4cm、底部径6.0cm、器高2.4cm、E304は口縁部径11.0cm、底部径6.8cm、器高2.2cm、E308は口縁部径12.0cm、E309は口縁部径12.0cm、E310は口縁部径11.0cm、E311は口縁部径10.0cm、E313は口縁部径9.8cmである。小皿のE305は口縁部径9.0cm、底部径6.0cm、器高1.2cm、E306は口縁部径8.0cm、底部径5.6cm、器高0.9cm、E314は口縁部径9.0cm、E315は口縁部径8.8cmである。皿A・皿Bの小さいものは、小皿と法量の違いが少なく、形態的区分が不明瞭になる傾向がある。E300～E315は指ナデ調整・ヨコナデ調整を主体とするものであるが、E302・E303・E305・E310・E313では、口縁部の調整に関して左斜め上がりの爪圧痕がみられ、皿Bと小皿とは共通の調整痕がみられる。E316は底部径10.0cm、E317は底部径3.8cmである。E318～E321は土師器の鍋で、E318は「く」の字口縁鍋で口縁部径21.2cm、E319・E320は口縁部が内湾する内耳鍋で、E319が口縁部径26.0cm、E320が口縁部径27.4cm、E321は伊勢型鍋で口縁部径30.0cmである。E318～E320は15世紀後半以後のもの、E321は北村分類のA5類で14世紀のものと思われる。E322～E325は古瀬戸陶器で、E322は古瀬戸後I期の灰釉卸目皿で、皿状の形態で、口縁部の内・外面に灰釉が施され、内面底部側に卸目と思われる沈線がみられる。E323は古瀬戸後II期の灰釉平碗の口縁部で、口縁部径16.0cm、E324は古瀬戸後IV期の灰釉縁釉小皿で、底部径4.0cmの底部糸切りのもの、E325は古瀬戸後IV古期の灰釉折縁深皿で、口縁部径28.0cmで、体部から口縁部が大きくひらき、口縁端部が上面を水平にして外折しておわる。口縁部の内・外面に灰釉がみられる。E326は青磁の香炉で、口縁部径6.8cmの筒形の形態である。E327は断面内湾する小破片で、凸面に帯状の凸帯が弧状にみられる。仏供具などの土製品の可能性がある。S011は10B区の検

出1から出土した凝灰岩製の砥石で、欠損しているが、長さ7.2cm、幅5.5cm、厚み2.1cmの長方形板状の形態で、平坦な2面を砥面としている。挿り目の方向は不定であるが、片面は擦り痕によりへこんでいる。

検出2 (E328～E353・S012) : E328～E338は南部系陶器で、E328～E331は小皿、E332～E337は碗、E338は片口鉢である。E328・E329は小皿Bで、E328は口縁部径8.5cm、底部径5.6cm、器高1.5cm、E329は口縁部径8.0cm、底部径6.0cm、器高1.85cmをはかる。E330は口縁部径9.0cm、E331は底部径4.2cmである。E334～E337は碗Cで、E334・E335は尾張6形式に分類でき、E336・E337は渥美窯産のものである。E334は底部径7.0cm、E336は底部径6.5cm、E335・E337は底部径6.0cmである。E332・E333は口縁部片で、E332は口縁部径16.8cm、E333は口縁部径15.0cmである。E338は常滑窯産と思われる片口鉢で、口縁部径36.0cmである。E339～E350は土師器でE339～E345が小皿と皿、E346～E350が鍋である。E339・E340・E342は皿Aで、E339は口縁部径10.0cm、底部径6.0cm、器高1.3cm、E340が口縁部径9.6cm、底部径7.0cm、器高1.3cm、E342が口縁部径9.8cmで、皿Aに分類したが、小皿に近い形態である。E341は口縁部径6.6cm、底部径4.4cm、器高2.2cmで、皿Bに近い杯形の皿である。E343・E344は皿Bで、E343は口縁部径12.0cm、E344は口縁部径15.0cmである。E345はロクロ皿で、底部径6.3cmである。E346～E349は14世紀のものと思われる伊勢型鍋で、北村分類のA5類に分類できる。E346は口縁部径23.6cm、E347は口縁部径27.0cm、頸部径22.8cm、E348は口縁部径28.0cm、頸部径24.8cm、E349は口縁部径31.0cmをはかる。E350は羽釜形鍋で、口縁部径20.8cmをはかる、北村分類のA3類に分類でき、14世紀後半のものと思われる。E351は青磁の碗で、口縁部径20.0cmで、外面に稜花文がみられる。E352は古瀬戸陶器の灰釉縁釉小皿で、無高台の小型の碗形のもので、口縁部径9.8cm、底部径5.2cm、器高3.2cmをはかる。古瀬戸後IV古期のものと思われる。E353は大窯陶器の鉄釉挿鉢の口縁部で、やや受け口形態になる大窯2段階のものと思われ、口縁部径25.0cmである。S012は泥質凝灰岩製の砥石で、

多くを欠損しているが、長さ 3.2cm、幅 3.2cm、厚み 0.7cm で扁平板状の形態が想定できる。残る平坦面に不定方向の揃り目がある。

検出 3 (E354・E355) : E354・E355 は南部系陶器の碗で、E354 は口縁部径 15.9cm、E355 は口縁部径 14.0cm である。

西側斜面 (E356～E359) : E356 は土師器の皿 A で、口縁部が強く外反して開くものである、口縁部径 14.0cm、8.4cm、器高 2.0cm をはかる。15 世紀後半以後のものと思われる。E357 は皿 B か皿 C とされるもので、やや鉢形の形態のもので、口縁部径 13.0cm、外面にタテハケ調整のような条線がみられる。E358 は南部系陶器の片口鉢で、口縁部径 28.8cm をはかり、口縁部に指押さえ調整による片口が形成されている。尾張 6 型式に分類できる。E359 は古瀬戸陶器の鉄釉擦鉢で、揃り目が体部下半にみられる。口縁部径は 33.4cm で、口縁端部が受け口状となり、内面に二股状になる、古瀬戸後 IV 古期のものと思われる。

西側谷底埋土中 (E360～E362) : E360 は南部系陶器の碗で、口縁部径 14.6cm である。E361 は灰釉陶器の碗で、内・外面に灰釉がみられ、断面やや丸い方形の高台が付く、底部径 5.6cm で折戸 53 号窯型式のものと思われる。E362 は土師器の羽釜型鍋で、口縁部径 24.8cm をはかり、口縁部が内傾する北村分類の羽釜 A4 類に分類でき、15 世紀前半のものと思われる。

表土掘削 (E363) : E363 は瀬戸美濃産陶器の志野釉大型鉢で、内面と外面の口縁部のみに志野釉が施される、口縁部径 49.0cm で口縁端部が外に折れて終わるもので、下端の欠損箇所から、深さ 10cm 前後のたらい形になるものと思われる。

・ 10C 区の出土遺物 (第 35 図・第 36 図)

167SK (E364) : E364 は土師器の皿 B で、口縁部径 10.0cm である。

168SK (E365・E366) : E365・E366 は南部系陶器で、E365 は底部径 5.2cm の小皿、E366 は底部径 8.2cm の碗 D である。

169SK (E367) : E367 は土師器の小皿で、口縁部径 9.0cm で、鉢形になる皿 C の形態に近いものである。

173SD (E368～E373) : E368～E370 は南部系陶器である。E368 は碗 C で、口縁部径 14.0cm、底部径

6.5cm、器高 4.55cm をはかる。E369 は碗で、口縁部径 14.0cm である。E370 は尾張 6 型式に分類できる片口鉢で、口縁部径 28.5cm である。E371 は土師器の皿 B で、口縁部径 12.2cm、底部径 7.2cm、器高 3.0cm をはかる。E372・E373 は土師器のロクロ皿で、E372 が底部径 6.6cm、E373 が底部径 7.0cm をはかる。

検出 1 (E374～E396) : 10B 区 012NR から続く堆積から出土したもので、E374～E394 は南部系陶器で、E374～E377 は小碗、E378～E384・E386・E388～E390・E392・E393 は碗 A、E385・E387・E391 は碗 B、E394 は碗 C である。小碗では、E374 が口縁部径 9.1cm、底部径 4.1cm、器高 2.7cm、E375 は底部径 4.2cm、E376 は底部径 3.9cm、E377 は底部径 3.9cm である。碗 A では、E378・E381・E382 で口縁部に輪花が確認でき、内・外面に灰釉が確認できるものが多い。口縁部径は E378 が 16.7cm、E379 が 16.4cm、E380 が 16.0cm、E381・E382 が 16.0cm、E383 が 15.0cm、E384 が 14.0cm で、口縁部径が 16.0cm より大きいものが多い。底部径は、E386 が 8.8cm と最も大きく、E378 が 7.5cm、E379・E388・E389 が 6.9cm、E390・E391 が 6.8cm、E392 が 6.7cm、E393 が 6.2cm で、底部径は 6.7cm～6.9cm のものが多い。器高は E378 が 6.1cm、E379 が 6.45cm をはかる。碗 B では、E385 が口縁部径 13.8cm と碗 A に比べて小さく、E387 が底部径 7.2cm、E391 が底部径 6.8cm である。碗 C の E394 は底部径が 6.2cm で小さい。E395・E396 は土師器の伊勢型鍋で、E395 は北村分類の A1 類で口縁部径 21.0cm、頸部径 19.1cm、E396 は北村分類の A2 類になり口縁部径 23.0cm、頸部径 21.0cm で、12 世紀のものと思われる。

北斜面トレンチ (E397～E405) : E397～E402 は南部系陶器、E403～E405 は土師器である。E397 は小皿 B で、口縁部径 9.2cm、底部径 6.0cm、器高 1.9cm をはかる。E398 は碗で口縁部径 15.6cm、E399 は碗 B で口縁部径 15.0cm、E400 は碗 A で口縁部径 15.0cm、E401 は碗で口縁部径 14.0cm、E402 は尾張 6 形式に分類でき、底部径 7.0cm である。E403 は皿 C で、丸底になる形態のもので、口縁部径 10.8cm、器高 2.8cm をはかる。E404 は皿 B で、口縁部径 15.0cm である。E405 は北村分類の羽釜 A3 類に分類

できる羽釜形鍋で、14世紀後半のものと思われる。

・11A区出土遺物(第36図)

001SX (E406～E409) : E406は南部系陶器の碗の体部片、E407は北部系陶器の碗で口縁部径13.0cmをはかり、13世紀後半～14世紀前半の明和～大畑大洞型式に分類できる。E408は口縁部が内湾する皿Aで、口縁部径10.0cm、器高1.7cmの小皿に近い形状である。E409は古瀬戸陶器の四耳壺で外面の肩部に沈線直線文がめぐる。

・11B区出土遺物(第36図・第37図)

002SD (E410) : E410は土師器の小皿で、口縁部径8.6cmである。

003SD (E411～E413) : E411は土師器の小皿で、口縁部径6.6cm、器高1.3cmである。E412・E413は江戸時代中期の美濃窯産陶器で、E412が鉄釉丸碗、の底部片で、貼り付け高台のもの。E413が鉄釉花瓶で外面に把手が付く。

004SD (E414) : E414は土師器の小皿で、口縁部径7.6cmである。

007SK (E415・E416) : E415は南部系陶器の小皿で口縁部径7.8cm、E416は土師器の皿Bで口縁部径10.4cmである。

検出1 (E417～E426) : E417～E421は南部系陶器で、E422は土師器の皿B、E423～E425は土師器の鍋、E426は常滑陶器の甕である。E417・E418は小皿Bで、E417が口縁部径7.7cm、底部径4.8cm、器高1.5cm、E418は口縁部径7.4cm、底部径4.0cm、器高1.2cmをはかり、E418は底部中央がやや上げ底である。E419は碗で口縁部径17.2cm、E420は碗Cである。E421は甕の体部上半部分である。E423は口縁部が内湾する内耳鍋で口縁部径26.4cm、E424は口縁部ほぼ直立する内耳鍋で口縁部径26.8cm、E425が「く」の字口縁の甕で、頸部から体部上半の外面に左上がり斜めハケ調整がみられる。E426は甕の体部片で、外面にタタキ痕がみられる。

・範囲確認調査(第37図)

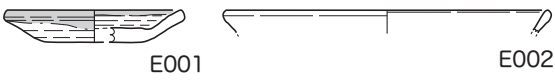
各トレンチ (E427～E434) : E427～E429は南部系陶器の碗で、E427は口縁部径14.2cm、底部径7.2cm、器高4.3cmの碗Dに分類でき、E428は口縁部径15.0cm、E429は底部径7.0cmの碗Dであ

る。E430は古墳時代の土師器で、高杯の杯部と脚部の継ぎ目の部分と思われる。E431は土師器の伊勢型鍋で、口縁部径25.8cm、頸部径21.5cmをはかり、北村分類のA5類に分類でき、14世紀のものと思われる。E432・E433は瀬戸窯産陶器で、E432は志野釉鉄絵碗、E433が灰釉片口鉢である。E432・E433は登窯8期以後の灰釉に貫入が入るもので、E432は底部径3.3cm、E433は口縁部径12.6cmである。E434は範囲確認調査で採取されたいぶし瓦の軒平瓦である。

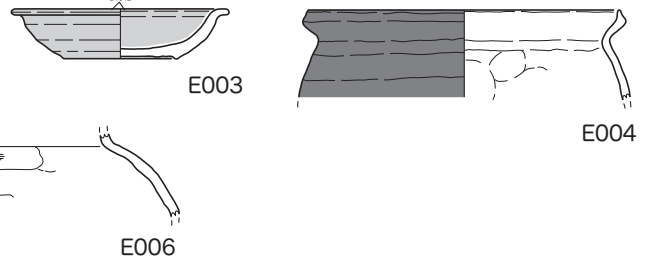
参考文献

鈴木正貴 1995 「清洲城下町遺跡の遺物様相」『清洲城下町遺跡Ⅴ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
北村和宏 1996 「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報平成7年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 2007 「総論」『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
中野晴久 2012 「総論 常滑系」『愛知県史 別編窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県

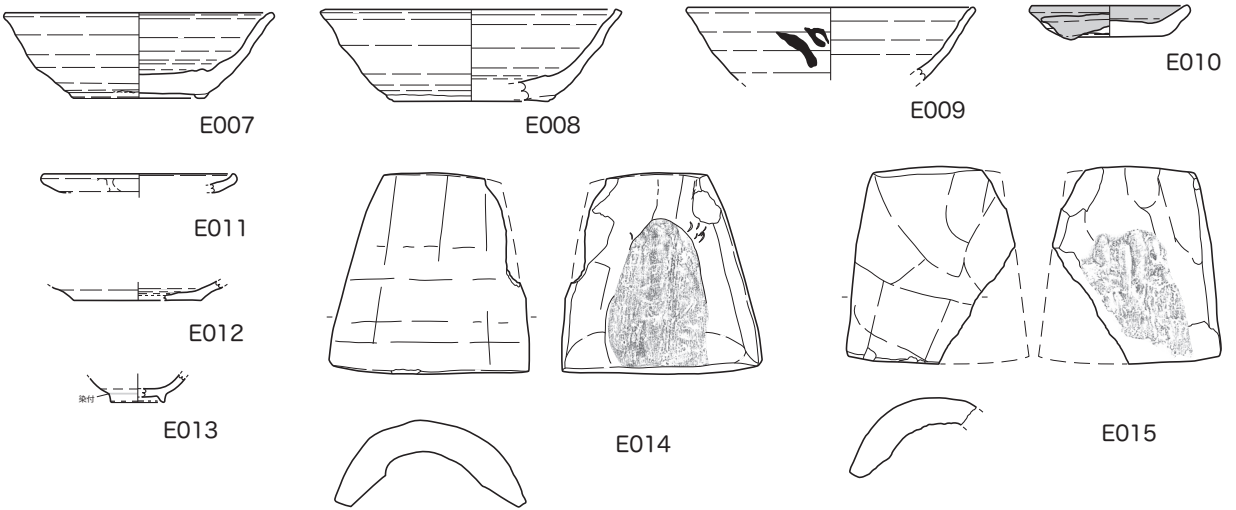
10Aa 区 003SD (E001・E002)



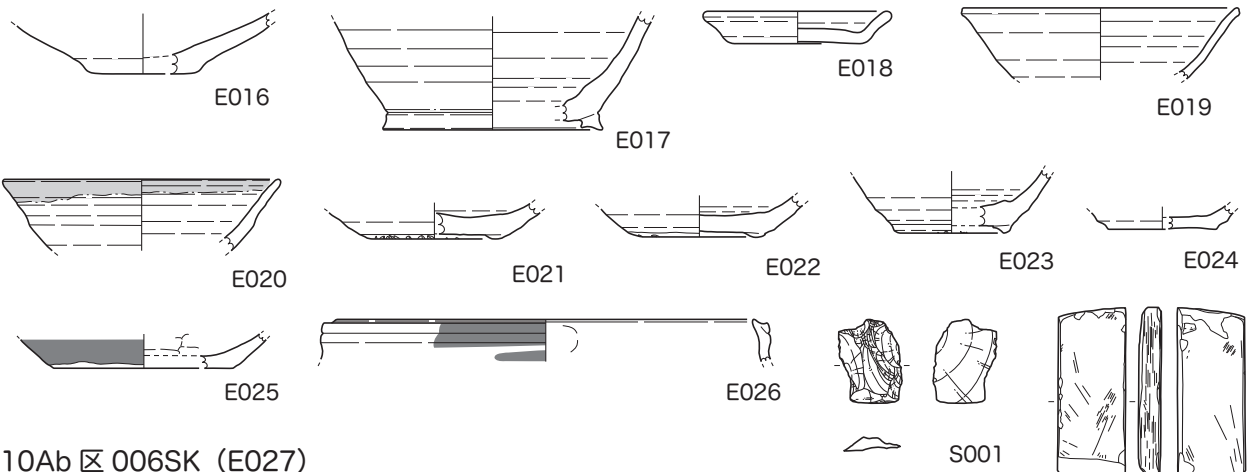
10Aa 区 004NR (E003 ~ E006)



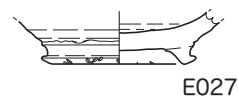
10Aa 区検出 1 (E007 ~ E015)



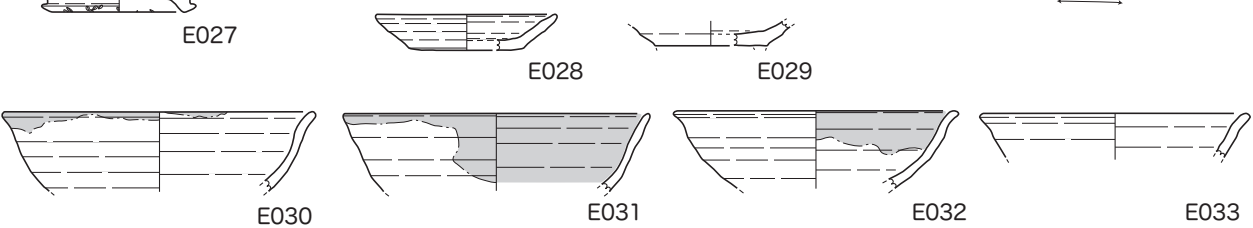
10Aa 区検出 2 (E016 ~ E026・S001・S002)



10Ab 区 006SK (E027)



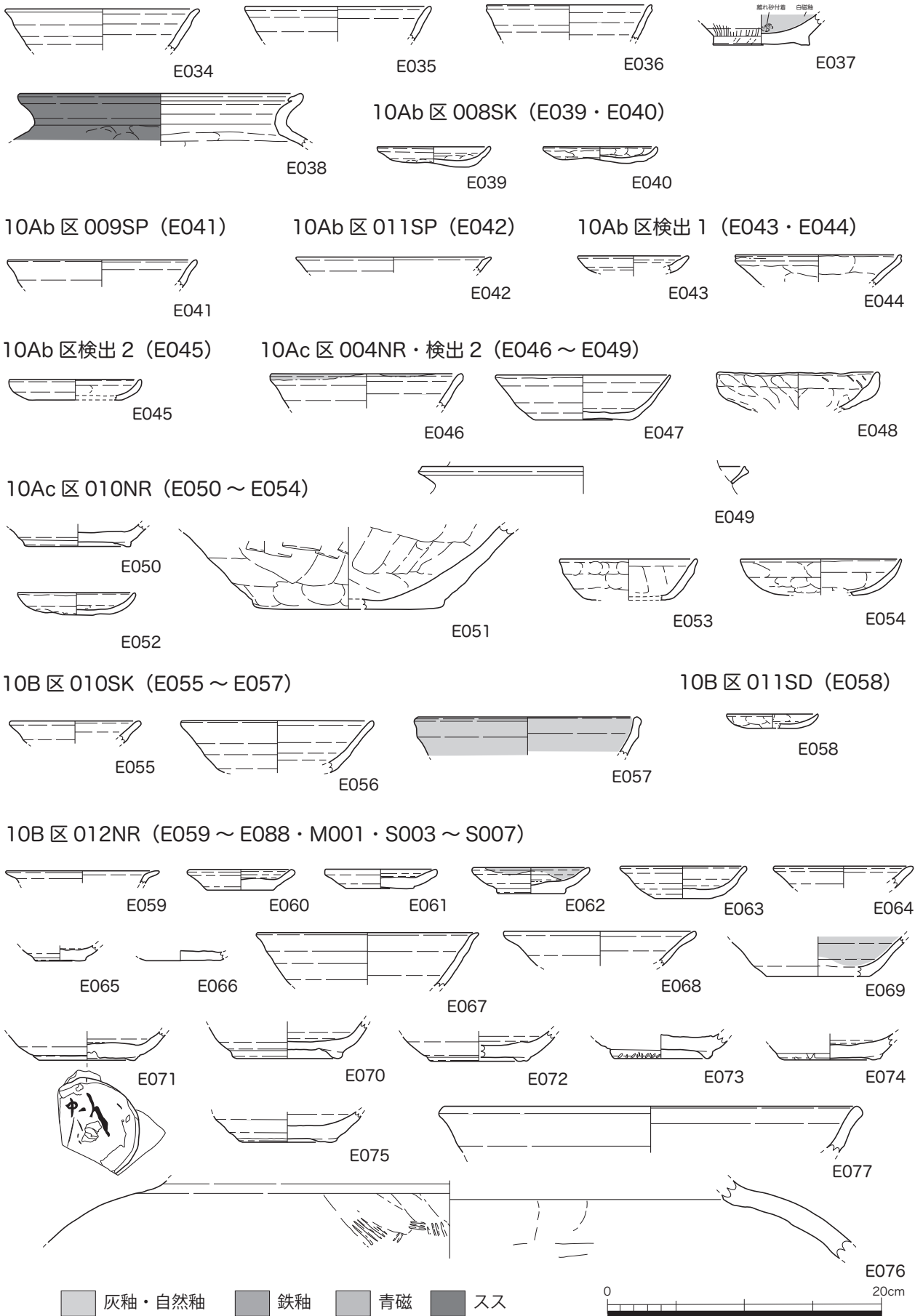
10Ab 区 007SK (E028 ~ E038)



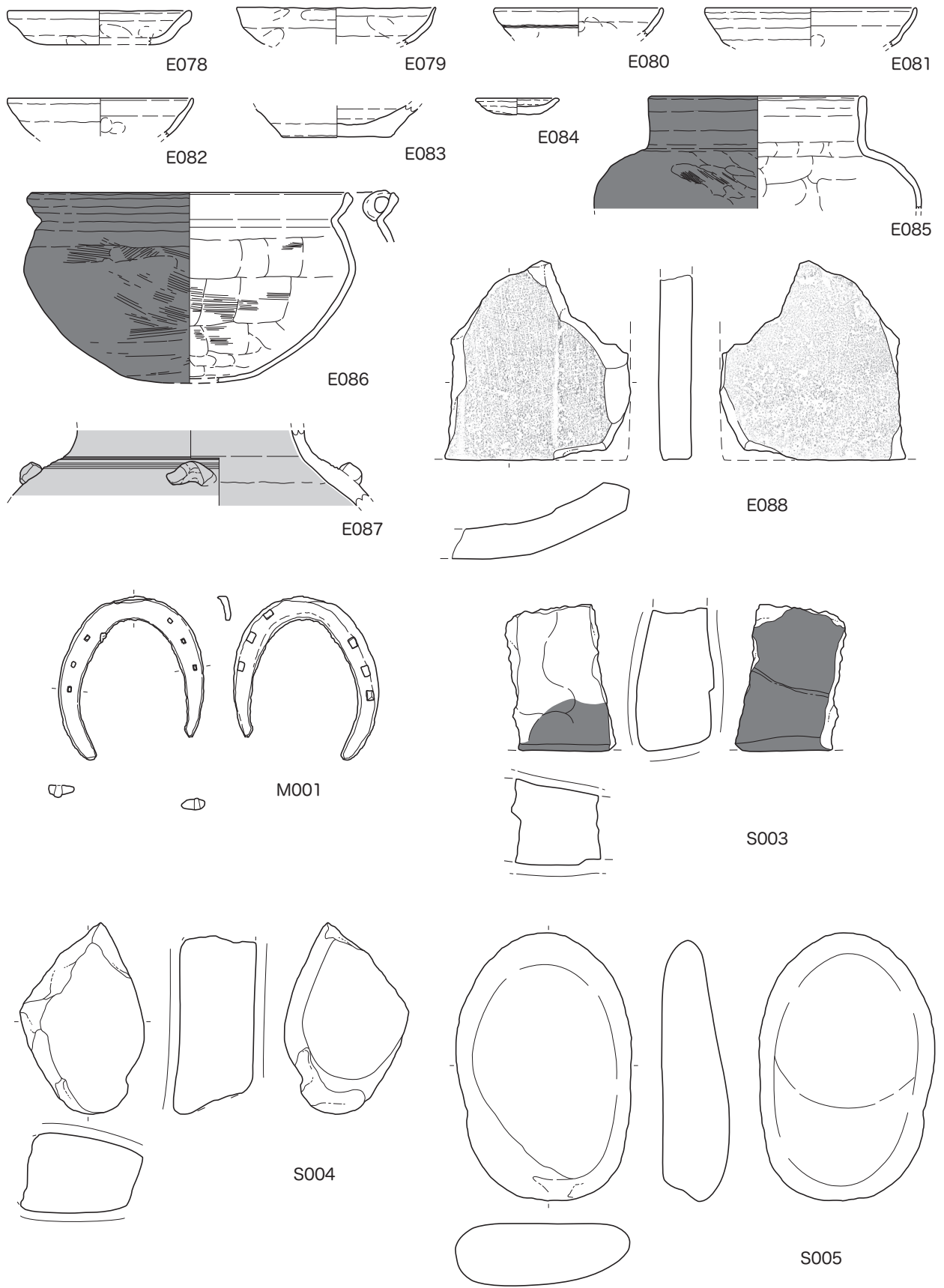
灰釉・自然釉
 鉄釉
 青磁
 スス

0 20cm

第 25 図 10Aa 区・10Ab 区出土遺物 (1 : 4)



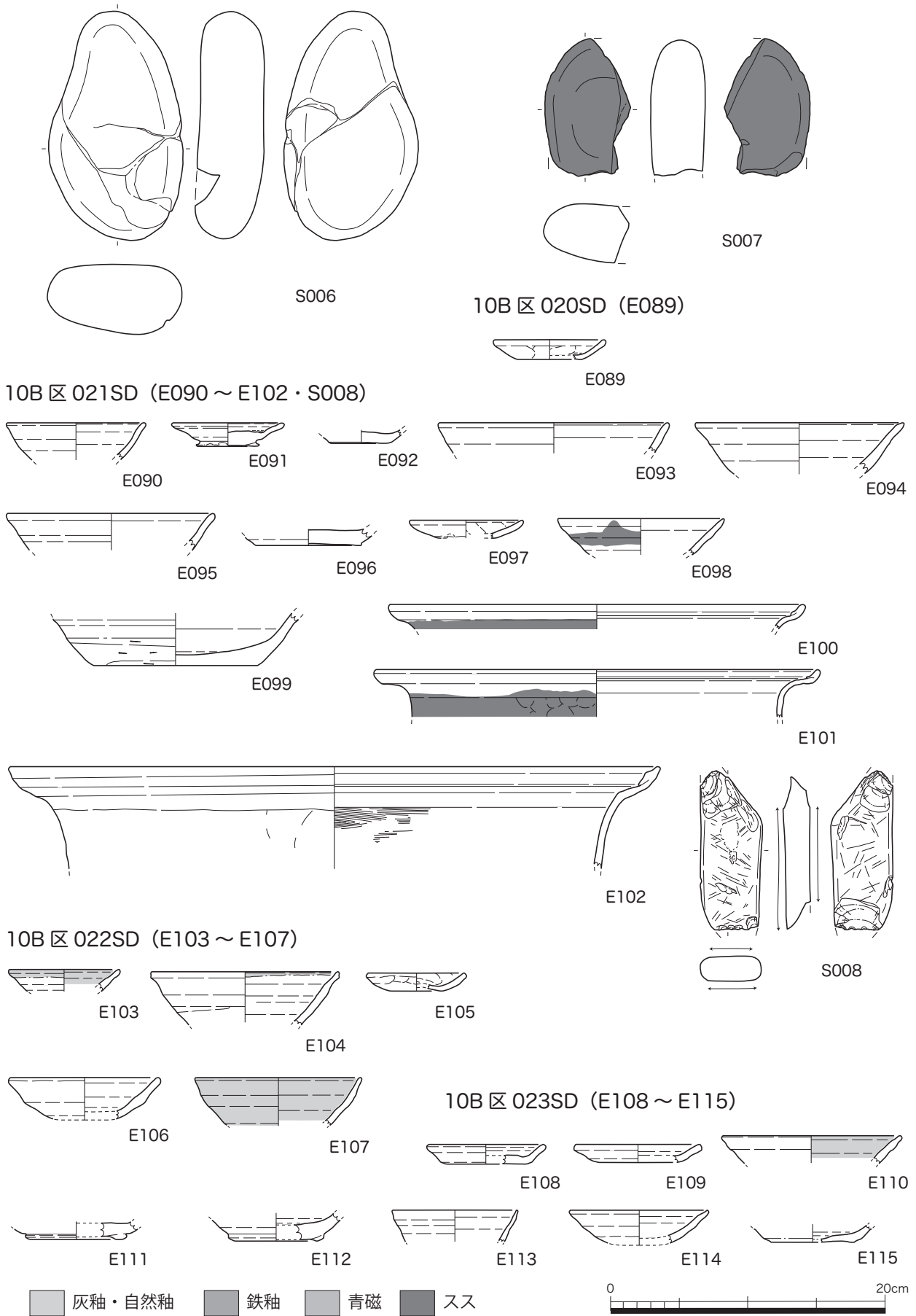
第26図 10Ab区・10Ac区・10B区出土遺物 (1:4)



灰釉・自然釉
 鉄釉
 青磁
 スス

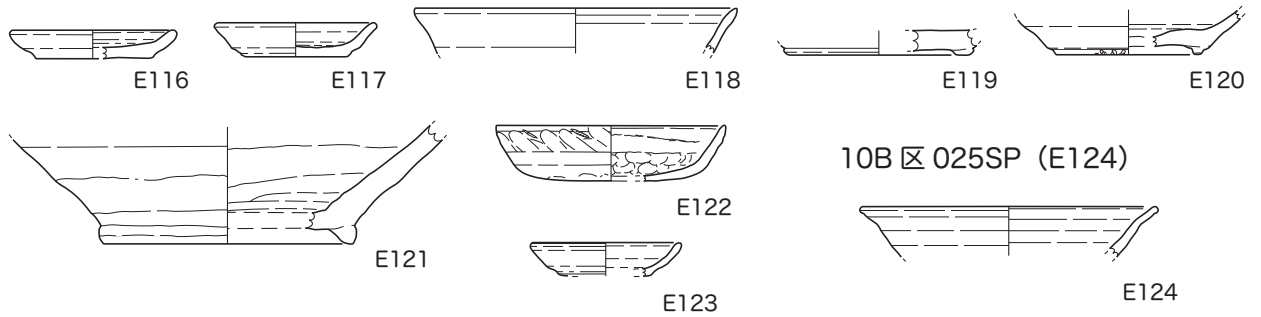
0 20cm

第 27 図 10B 区出土遺物 1 (1 : 4)



第28図 10B区出土遺物2 (1:4)

10B区 024SD (E116 ~ E123)



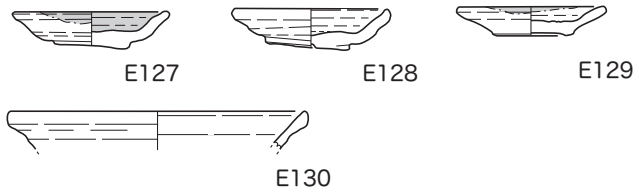
10B区 025SP (E124)



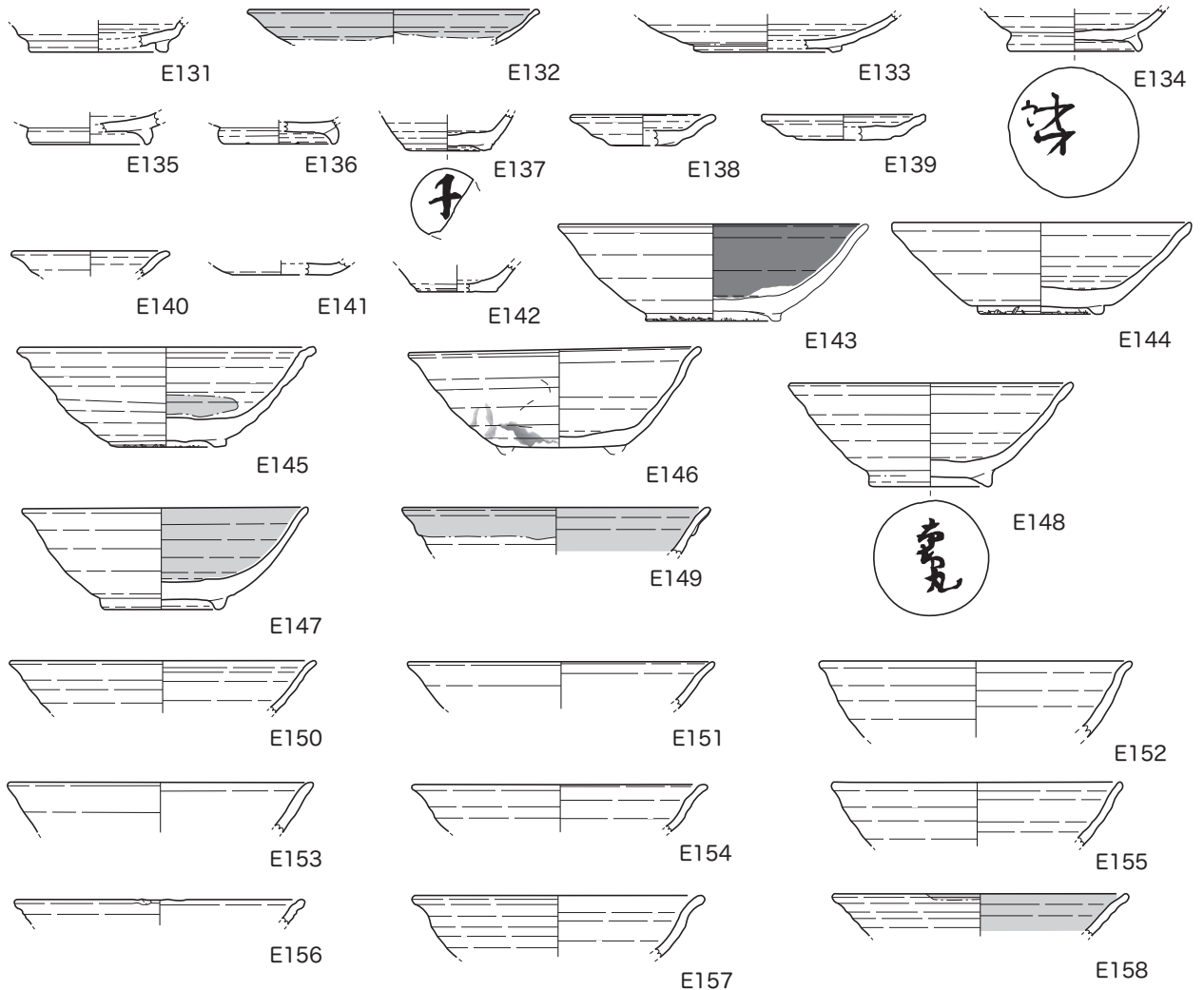
10B区 026SP (E125 · E126)



10B区 027SP (E127 ~ E130)



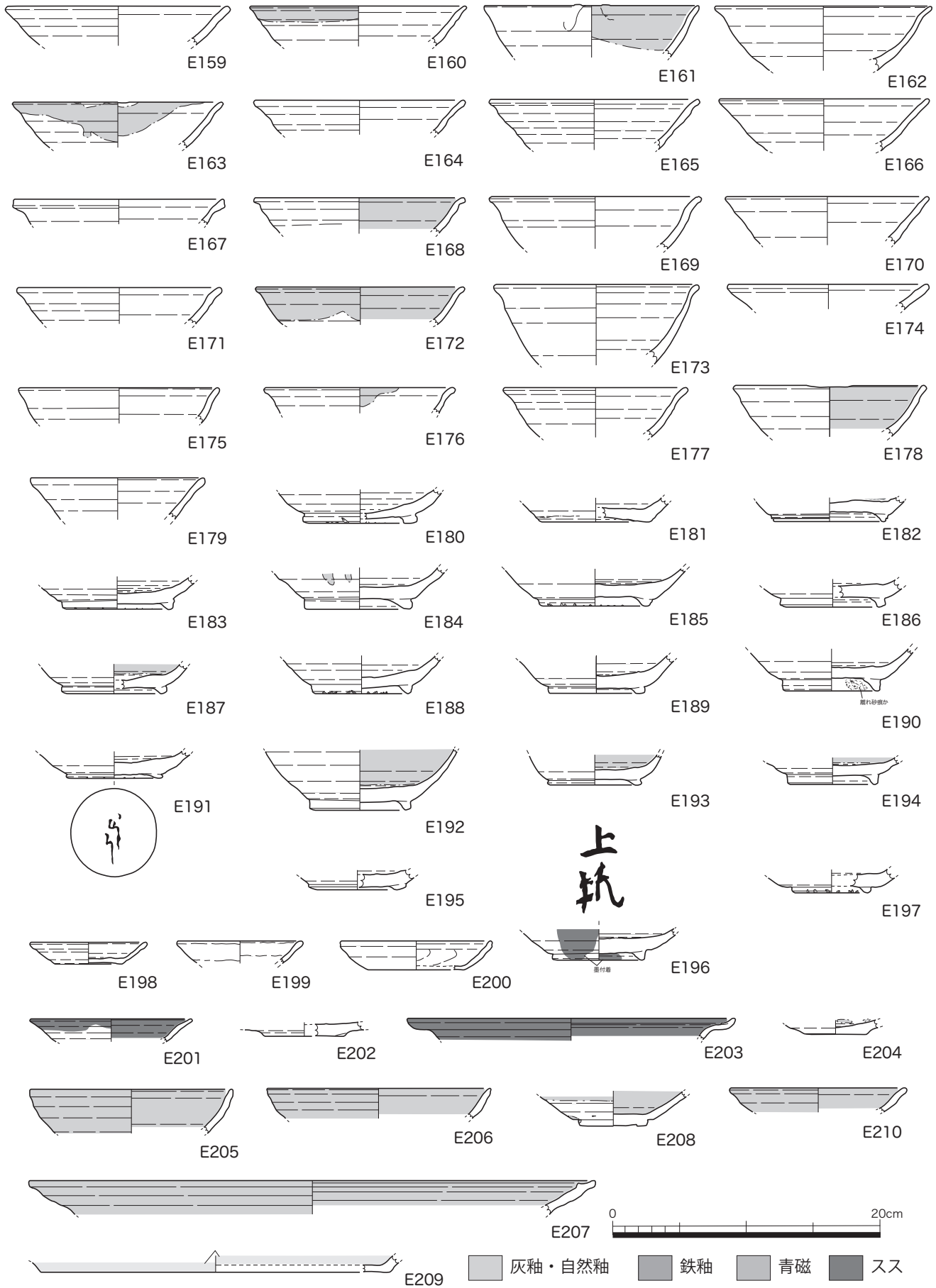
10B区 035NR (E131 ~ E210 · S009 · S010)



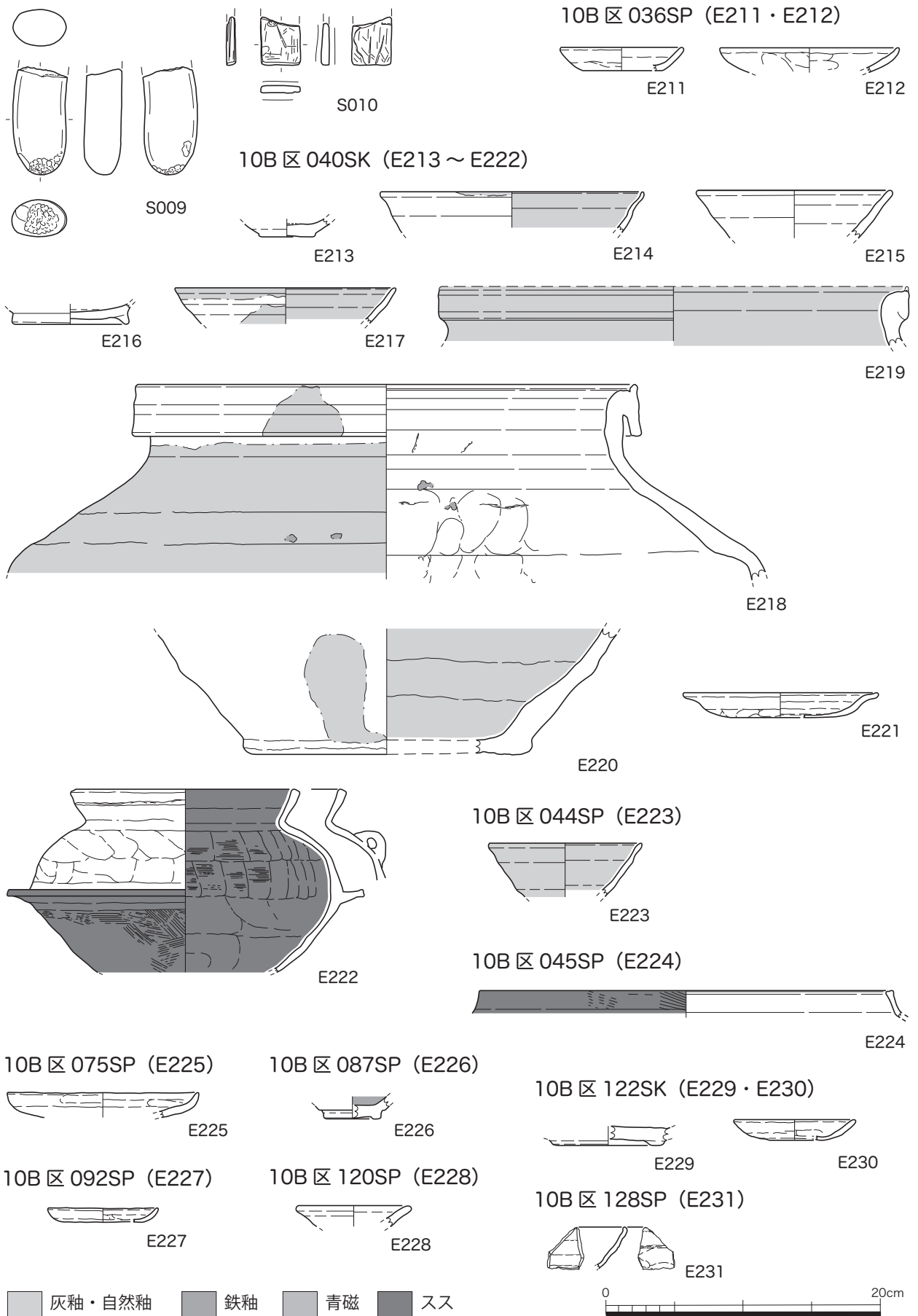
灰釉・自然釉
 鉄釉
 青磁
 スス

0 20cm

第29図 10B区出土遺物3 (1:4)

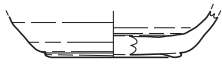


第30図 10B区出土遺物4 (1:4)



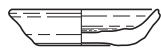
第 31 図 10B 区出土遺物 5 (1 : 4)

10B区 133SK (E232)



E232

10B区 140SP (E233)

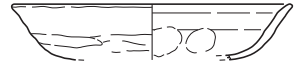


E233

10B区 148SP (E234・E235)

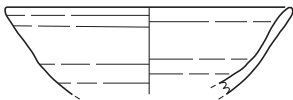


E234

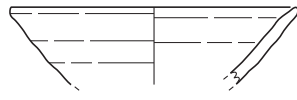


E235

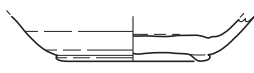
10B区 149SP (E236～E239)



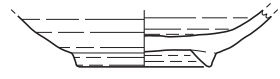
E236



E237



E238

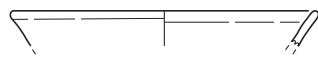


E239

10B区 150SP (E240・E241)



E240



E241

10B区 156SP (E242・E243)

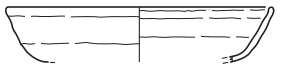


E242

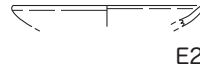


E243

10B区 157SP (E244・E245)

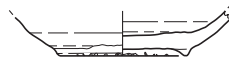


E244



E245

10B区 158SP (E246)



E246

10B区 159SP (E247)

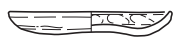


E247

10B区 160SP (E248～E253)



E248



E249



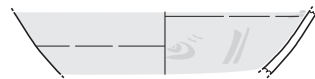
E250



E251



E252



E253

10B区 163SP (M002)

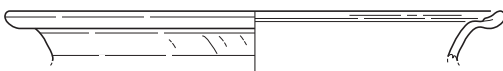


M002

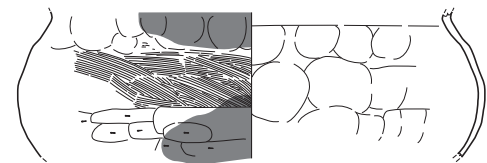


10B区 175SP (E256～E260・M003)

10B区 174SP (E254・E255)



E254



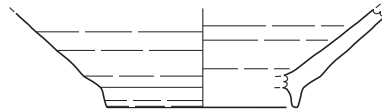
E255



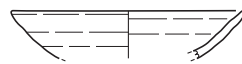
E256



E257



E258



E259

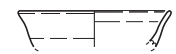


E260



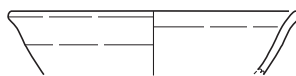
M003

10B区 195SP (E261)



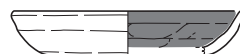
E261

10B区 206SP (E262)



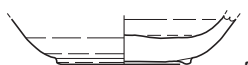
E262

10B区 210SP (E263)



E263

10B区 218SP (E264)



E264

灰釉・自然釉

鉄釉

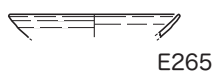
青磁

スス



第32図 10B区出土遺物6 (1:4)

10B区 227SP (E265)

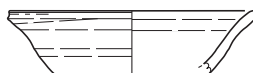


E265

10B区 238SP (E266・E267)



E266

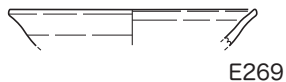


E267

10B区 244SP (E268・E269)

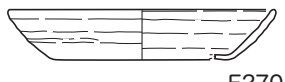


E268

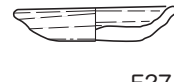


E269

10B区 254SP (E270・E271)



E270



E271



10B区 255SK (E272～E274)



E272

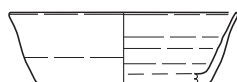


E273



E274

10B区検出 1 (E275～E327・S011)



E275



E276



E277



E278



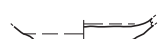
E279



E280



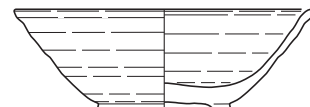
E281



E282



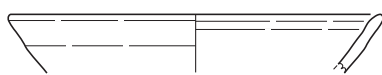
E283



E284



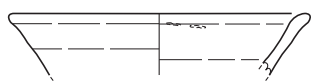
E285



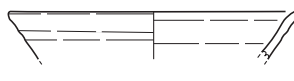
E286



E287



E288



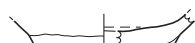
E289



E290



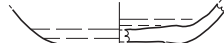
E291



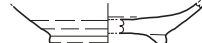
E292



E293



E294



E295



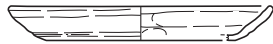
E296



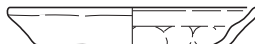
E297



317 (1:1)
E298



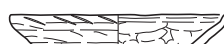
E300



E301



E302



E303



E304



E305



E299



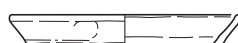
E306



E307



E308



E309

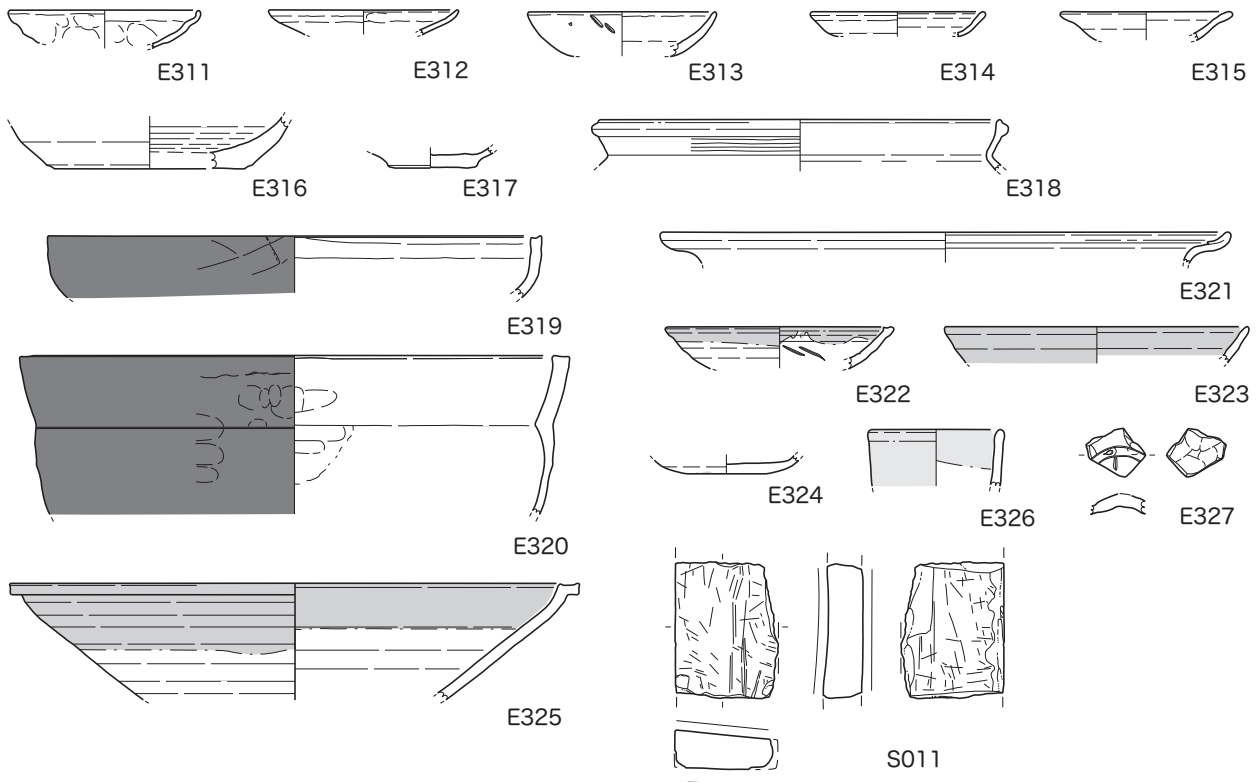


E310

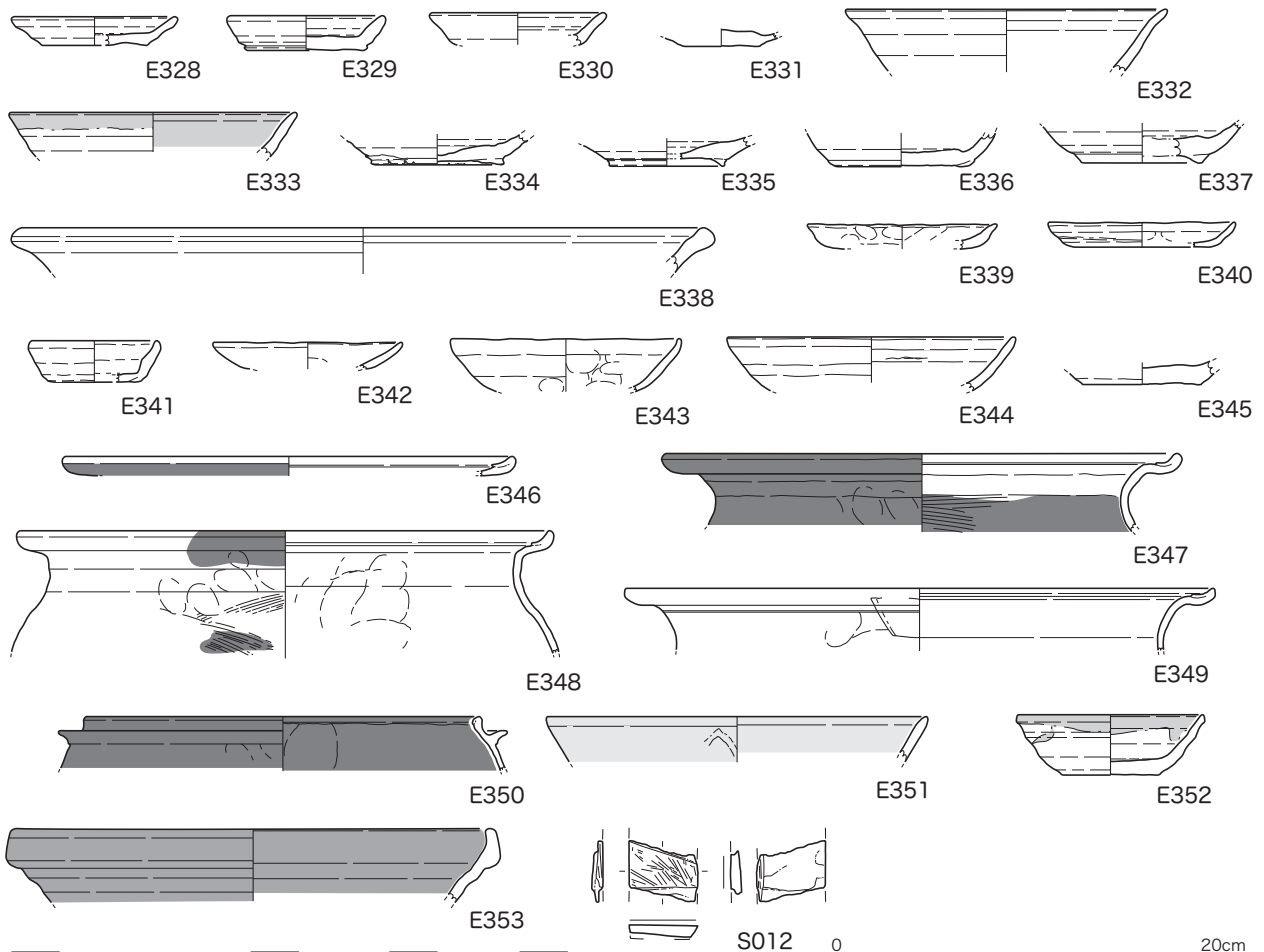
■ 灰釉・自然釉 ■ 鉄釉 ■ 青磁 ■ スス

0 20cm

第 33 図 10B 区出土遺物 7 (1 : 4)



10B区検出 2 (E328 ~ E353・S012)



■ 灰釉・自然釉

■ 鉄釉

■ 青磁

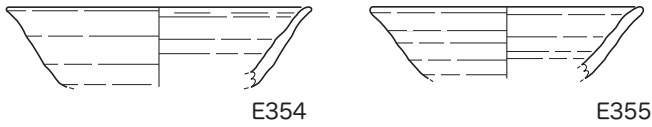
■ スス

S012

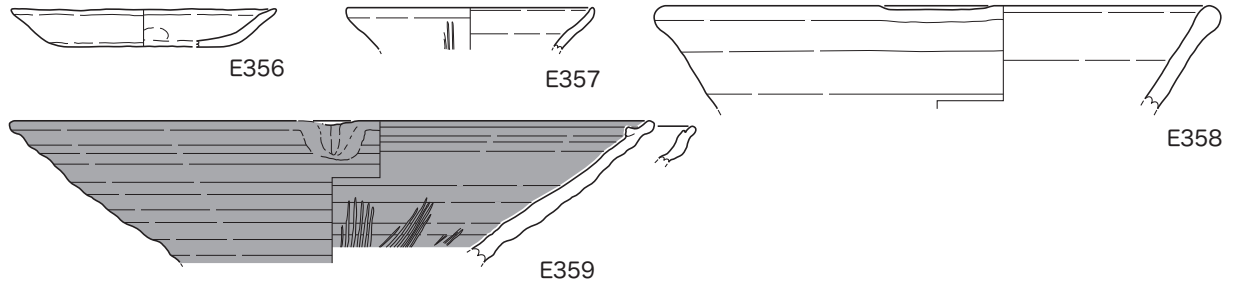
0 20cm

第34図 10B区出土遺物 8 (1:4)

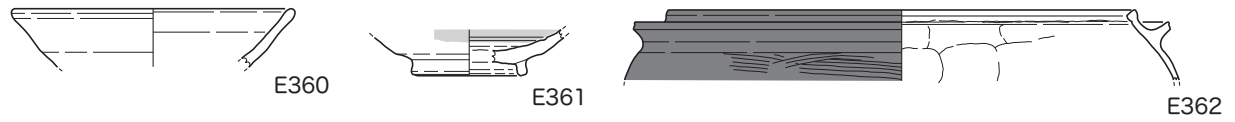
10B区検出3 (E354・E355)



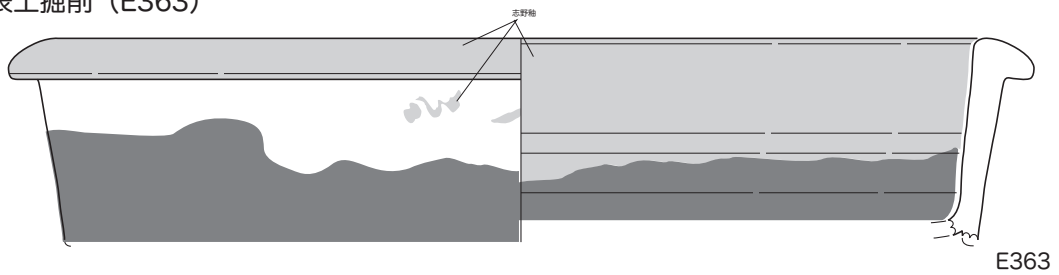
10B区西側斜面 (E356～E359)



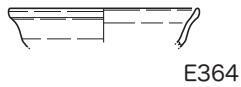
10B区西側谷底埋土中 (E360～E362)



10B区表土掘削 (E363)



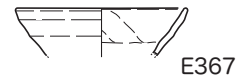
10C区 167SK (E364)



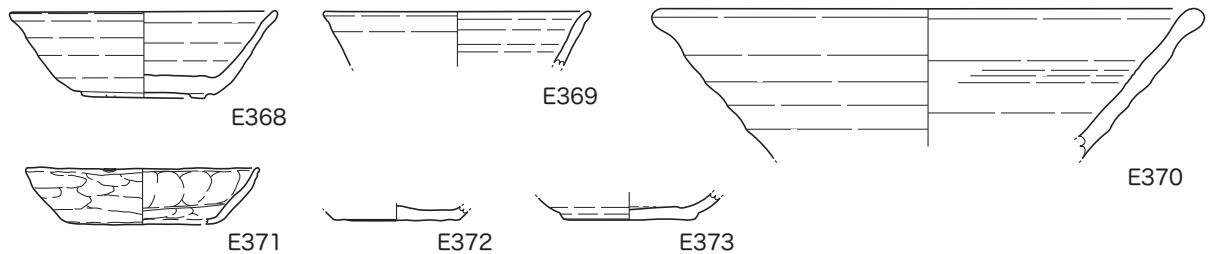
10C区 168SK (E365・E366)



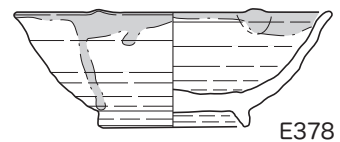
10C区 169SK (E367)



10C区 173SD (E368～E373)



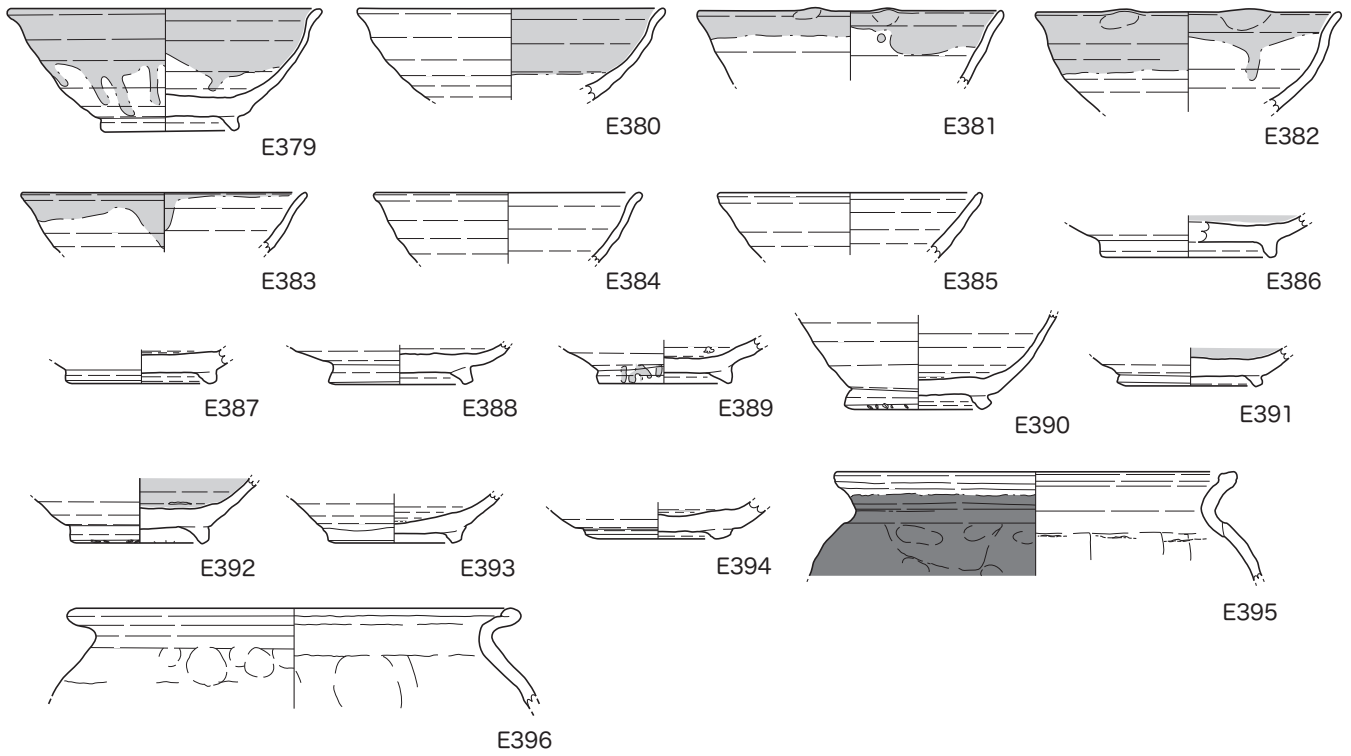
10C区検出1 (E374～E396)



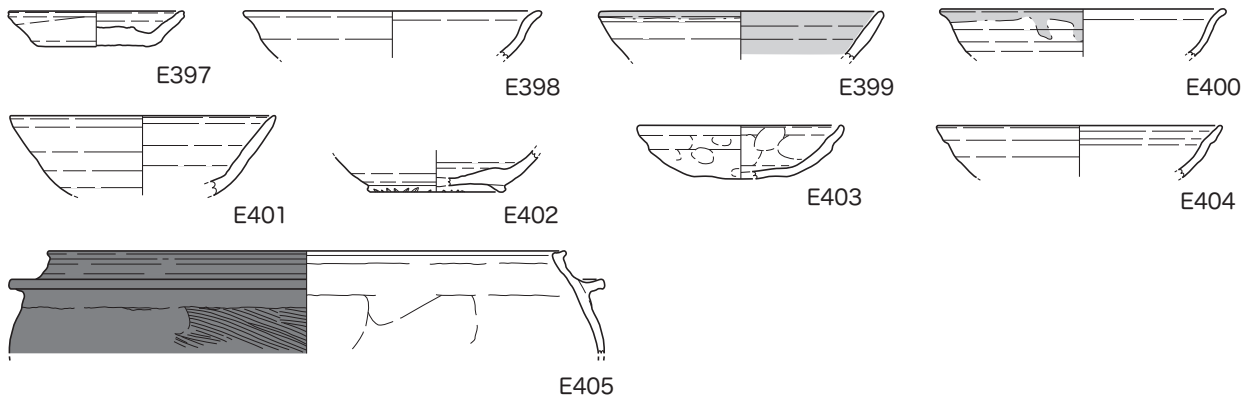
灰釉・自然釉
 鉄釉
 青磁
 スス

0 20cm

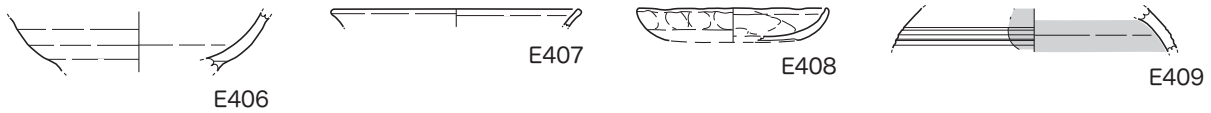
第 35 図 10B区・10C区出土遺物 (1:4)



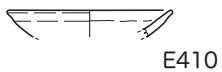
10C区北斜面トレンチ (E397 ~ E405)



11A区001SX (E406 ~ E409)



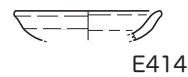
11B区002SD (E410)



11B区003SD (E411 ~ E413)



11B区004SD (E414)



11B区007SK (E415・E416)

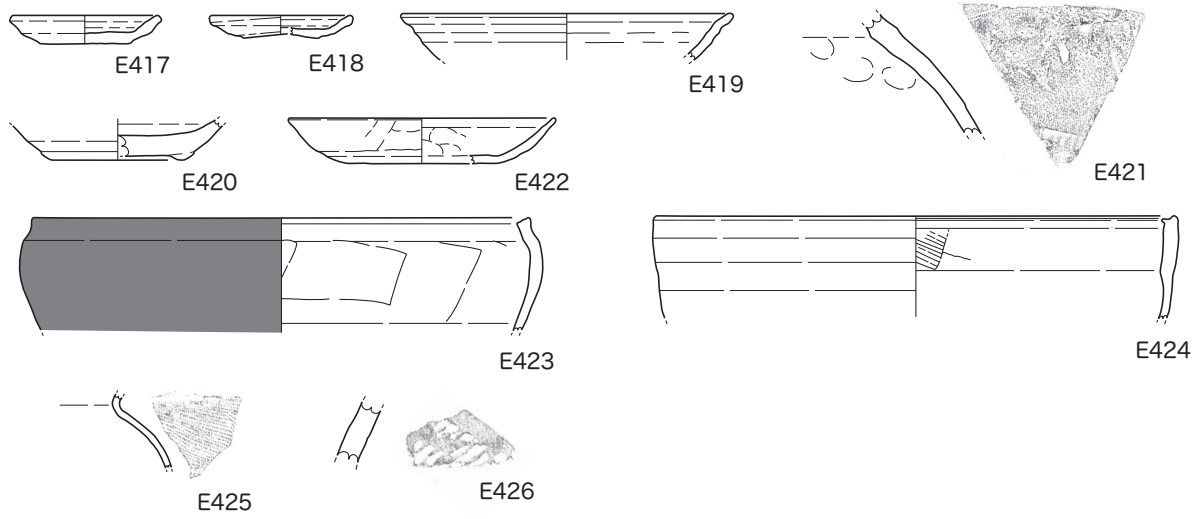


灰釉・自然釉
 鉄釉
 青磁
 スス

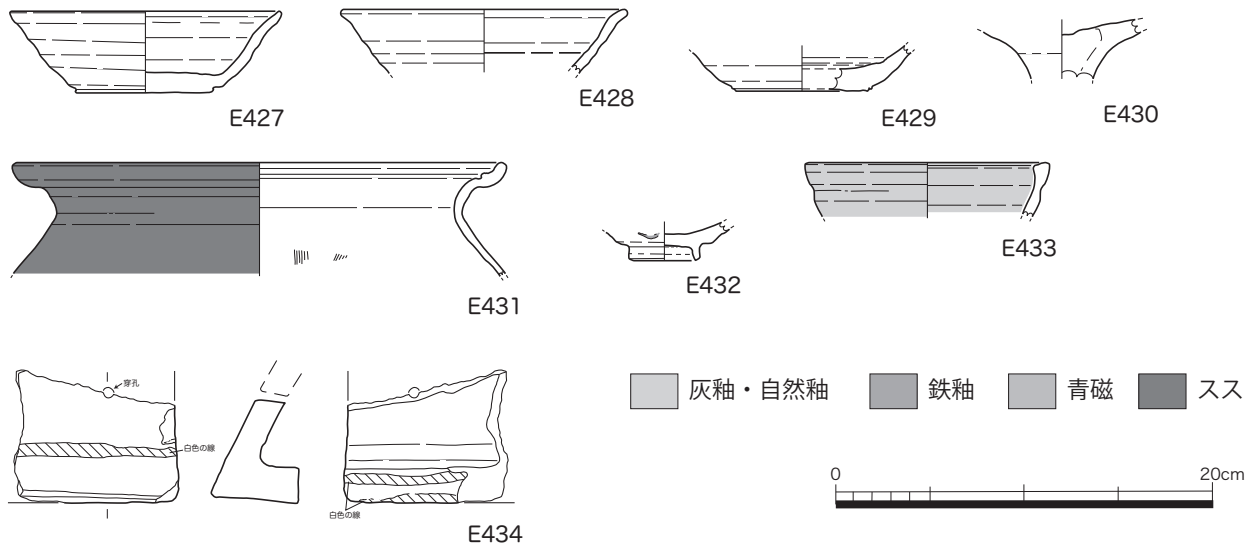


第36図 10C区・11A区・11B区出土遺物 (1:4)

11B区検出1 (E417～E426)



範囲確認調査 (E427～E434)



第37図 11B区・範囲確認調査出土遺物 (1:4)

第4章 自然科学分析

第1節 欠下城跡 10Ab 区 08SK 出土の人骨

中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

欠下遺跡 10Ab 区で検出された土坑 08SK の覆土から哺乳類の骨片が多数出土した。ここでは骨片の同定結果と特徴を報告する。

2. 資料と方法

試料は 08SK の覆土から出土した哺乳類骨片である。なお、骨片自体の ^{14}C 年代測定結果は、12 世紀後半～13 世紀中頃であった。同じ 08SK から出土した炭化材 2 点の ^{14}C 年代測定結果は、12 世紀後半～13 世紀中頃と 11 世紀中頃～13 世紀前半であった (第 4 章第 3 節を参照)。

周囲の土ごと取上げられていた骨片を、2mmメッシュの篩を用いて水洗し、骨片のみ回収した。

肉眼および実体顕微鏡で骨片を観察し、標本との比較により、同定した。

3. 結果と考察

最大 4cm 程度の小骨片が 58.2g 回収された (写真 3)。骨片はいずれも焼けており、灰～白色であった。一部の骨片は収縮による亀裂が見られた。灰～白色になり、収縮が見られる点から、まだ軟組織が付着している生の状態で、高温の火を受けたと考えられる。

骨片のほとんどは四肢骨であり、一部に部位不明骨片が見られた。四肢骨の緻密質断面を観察すると組織が粗く、肉眼でも見えるほどにハバース管が太かったため、ヒトと同定した。性別や年齢を明らかにしうる部位は見られなかった。

以上から、08SK の骨片は火葬されたヒトの骨と考えられる。08SK 内で火葬されたか、他の場所で火葬されたかどうかについては、08SK 内に炭化材、焼土、灰などがどの出土状況と合わせて判断する必要がある。



写真 3 08SK 出土人骨

第2節 欠下城跡出土木材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

雁峰山から派生する丘陵地に立地する山城である欠下城跡の発掘調査では、自然流路や土坑から生や炭化した木材が出土した。ここでは生材と炭化材の樹種同定を行なった。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定が行われている (放射性炭素年代測定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、10Aa 区の溝跡である 03SD、10B 区 of 自然流路である 012NR (035NR3 層)、10B 区 of 自然流路である 035NR から出土した生材各 1 点 (試料 No.1・2・5)、10Ab 区 of 墓坑である 08SK から出土した炭化材各 2 点 (試料 No.3・4) の、計 5 点の出土木材である。放射性炭素年代測定の結果では、10Aa 区 03SD の試料 No.1 は江戸時代前期～昭和時代、10B 区 012NR (035NR3 層) の試料 No.2 は奈良時代～平安時代、10B 区 035NR の試料 No.5 は平安時代～鎌倉時代、10Ab 区 08SK の試料 No.3 と 4 は平安時代～鎌倉時代であると示された。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

生材の樹種同定では、材の横断面 (木口)、接線断面 (板目)、放射断面 (柾目) について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラ

第1表 欠下城跡出土木材の樹種同定結果

試料 No.	地区	グリッド	遺構	層位	遺物 No.	器種	樹種	木取り	年代測定番号
1	10Aa区	4H11h ~4H11i	03SD	-	-	加工木	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	PLD-26648
2	10B区	4H11j	012NR (035NR3層)	-	-	自然木	モミ属	芯持丸木	PLD-26649
3	10Ab区	4H8k	08SK	-	-	炭化材	モミ属	芯持丸木	PLD-26902-1
4	10Ab区	4H8k	08SK	覆土	-	炭化材	モミ属	芯持丸木	PLD-26903
5	10B区	4H12i	035NR	-	86	自然木	モミ属	芯持丸木	PLD-27038

ートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のモミ属とマツ属複維管束亜属の2分類群が産出した。モミ属が4点みられ、マツ属複維管束亜属は1点であった。同定結果とその一覧を第1表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第38図に光学・走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1)モミ属 *Abies* マツ科 第38図 1a-1c(No.2)、2a-2c(No.3)、3a-3c(No.4)、4a-4c(No.5)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。そして晩材部では、連続する障害樹脂道がみられる試料もある。放射組織は単列で、高さ1~16列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2~4個みられる。また放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2)マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 第38図 5a-5c(No.1)

仮道管と放射仮道管、放射組織、垂直および水平樹

脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列のもの、水平樹脂道を含む多列のものがみられる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側に向かって鋸歯状に肥厚する。

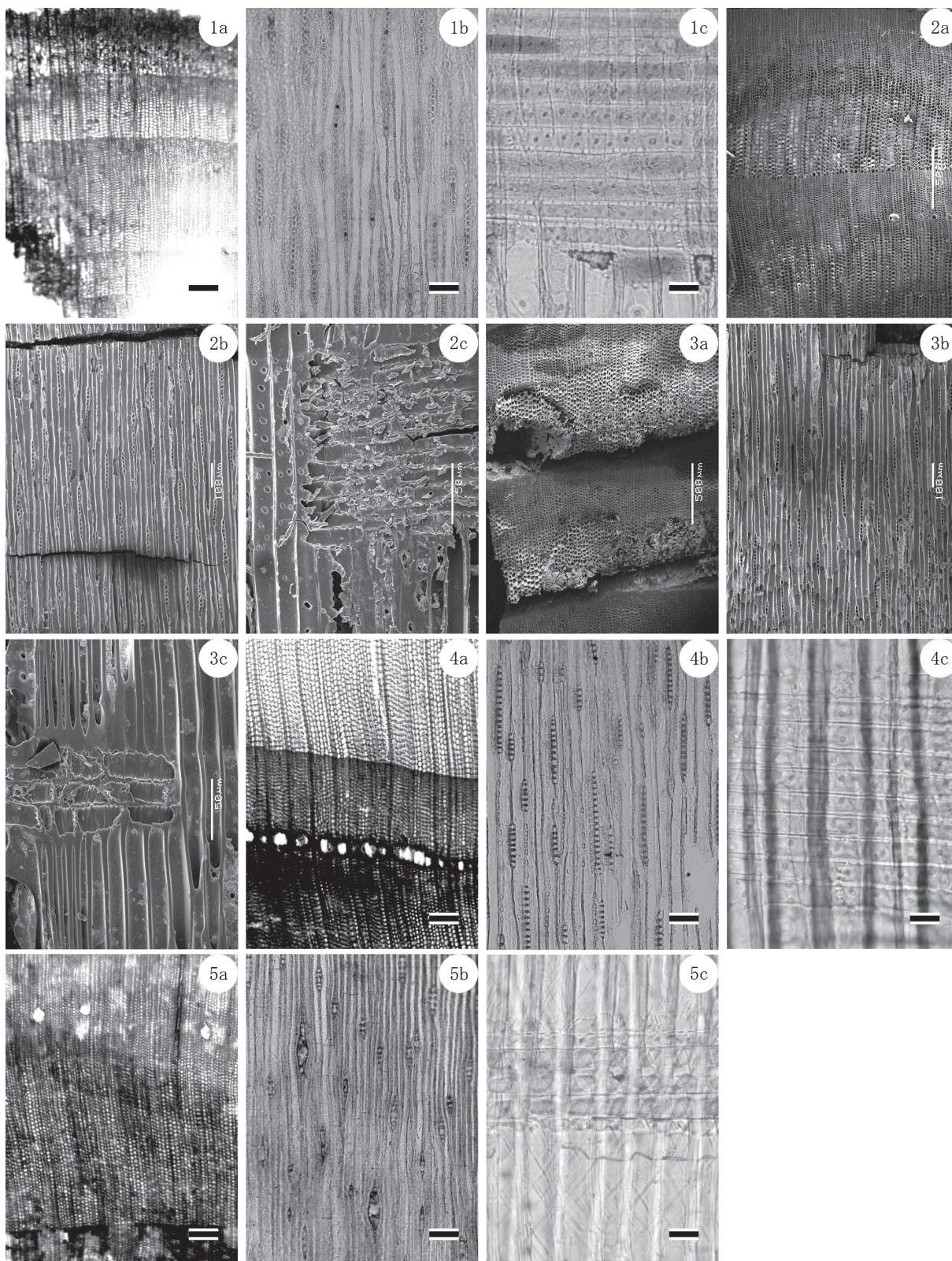
マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。どちらも材質は重硬だが、切削等の加工は容易である。

4. 考察

10Aa区 03SD で出土した、江戸時代前期~昭和時代の丸棒状の加工木（試料No.1）は、マツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良い樹種であることから（伊東ほか、2011）、丸棒状の加工木として利用された可能性がある。

10B区 035NR で出土した自然木（試料No.5）と、035NRの3層に相当する012NRで出土した自然木（試料No.2）は、共にモミ属であった。035NRの試料No.5は平安時代~鎌倉時代、012NRの試料No.2は奈良時代~鎌倉時代であることから、奈良時代~鎌倉時代にかけて、遺跡周辺にはモミ属が生育していたと考えられる。

10Ab区 08SK で出土した、平安時代~鎌倉時代の炭化材（試料No.3・4）は、共にモミ属であった。08SKでは炭化材と共に人骨が出土している（人骨同定の項参照）。そのため炭化材は、人骨の主を茶毘に付す際に利用した燃料材であったと考えられる。モミ属は、平安時代~鎌倉時代頃に遺跡周辺に生育していた可能性が高く、それらを燃料材として利用していたと考えられる。



第 38 図 欠下城跡出土木材の光学・走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. モミ属 (No.2)、2a-2c. モミ属 (No.3)、3a-3c. モミ属 (No.4)、4a-4c. モミ属 (No.5)、
 5a-5c. マツ属複維管束亜属 (No.1) a: 横断面 (スケール = 250 μm)、b: 接線断面 (スケール = 100 μm)、
 c: 放射断面 (スケール = 25 μm)

豊橋市の沖積低地に位置する太夫橋遺跡では、鎌倉時代の堆積物の花粉分析が行われ、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林が主に広がっていたと推測され、モミ属はほとんど確認されていない（新山・藤根・植田，2002）。丘陵地に立地する欠下城跡ではモミ属が確認され、異なる植生が広がっていた可能性が考えられる。

参考文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。

新山雅広・藤根 久・植田弥生（2002）太夫橋遺跡の古環境復元，株式会社イビソク編「市内試掘調査報告書」：176-185，豊橋市教育委員会教育部美術博物館・株式会社イビソク。

第3節 放射性炭素年代測定

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一（パレオ・ラボ）

1. はじめに

愛知県新城市に位置する欠下城跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、生材および炭化材試料については、樹種同定が行われ、焼骨については、骨片の同定が行われている（第4章第1節・第2節を参照）。

2. 試料と方法（第2表）

試料は、10Aa区の溝跡である03SD（試料No.1：PLD-26648）と10B区の自然流路である012NR（035NR3層）（試料No.2：PLD-26649）から生材各1点、10Ab区の墓坑である08SKの炭化材2点（試料No.3：PLD-26902-1、試料No.4：PLD-26903）と骨片2点（PLD-27157）、10B区の自然流路である035NRから生材1点（試料No.5：PLD-27038）の、計6点である。なお08SKは、遺構内から12世紀後半～13世紀初頭の遺物が出土している。

樹種同定の結果では、試料No.1はマツ属複雑管束亜属、試料No.2～5はモミ属であった。さらに試料No.3～5では樹皮直下の最終形成年輪が残っており、

試料No.1・2では辺材部が残っていた。

08SKの焼骨は、同定の結果人骨であった。白色になるまで良く焼けており、コラーゲンの抽出が望めなかったため、骨を構成する無機質に含まれる炭酸塩を測定の対象とした。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14^{C} 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 14^{C} 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第3表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta 13^{\text{C}}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14^{C} 年代を、第39図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14^{C} 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 14^{C} 年代（yrBP）の算出には、 14^{C} の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した 14^{C} 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14^{C} 年代がその 14^{C} 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の 14^{C} 濃度が一定で半減期が5568年として算出された 14^{C} 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14^{C} 濃度の変動、および半減期の違い（ 14^{C} の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14^{C} 年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された 14^{C} 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る

第2表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-26648	調査区：10Aa区 グリッド：4H11h~4H11i 遺構：03SD 試料No.1	種類：生材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：辺材部を採取 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-26649	調査区：10B区 遺構：012NR（035NR3層） 試料No.2	種類：生材（モミ属） 試料の性状：辺材部を採取 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-26902-1	調査区：10Ab区 グリッド：4H8k 遺構：08SK 試料No.3	種類：炭化材（モミ属） 試料の性状：最終形成年輪 部位：外側5年分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） サルフィックス処理
PLD-26903	調査区：10Ab区 グリッド：4H8k 遺構：08SK 層位：覆土 試料No.4	種類：炭化材（モミ属） 試料の性状：最終形成年輪 部位：外側5年分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27038	調査区：10B区 グリッド：4H12i 遺構：035NR 遺物No.86 試料No.5	種類：生材（モミ属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-27157	調査区：10Ab区 グリッド：4H8k 遺構：08SK 層位：覆土	種類：人骨（焼骨） 状態：dry	超音波洗浄 次亜塩素酸ナトリウム（1.5%） 酢酸（1M） サルフィックス処理

確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14^c年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

以下、2 σ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

03SDから採取された試料No.1（PLD-26648）の材は、1682-1737 cal AD(28.0%)、1805-1892 cal AD(53.7%)、1908-1936 cal AD(13.8%)で、17世紀後半～20世紀前半の暦年代を示した。これは、江戸時代前期～昭和時代に相当する。

035NRから採取された試料のうち、試料No.5（PLD-27038）の材は、1161-1247 cal AD(95.4%)で、12世紀後半～13世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代～鎌倉時代に相当する。また、035NRの3層に相当する012NRから採取された試料No.2（PLD-26649）の材は、772-884 cal AD(95.4%)で、8世紀後半～9世紀後半の暦年代を示した。これは、奈良時代～平安時代に相当する。

08SKから採取された試料のうち、試料No.3（PLD-26902-1）の炭化材は1166-1252 cal AD(95.4%)、人

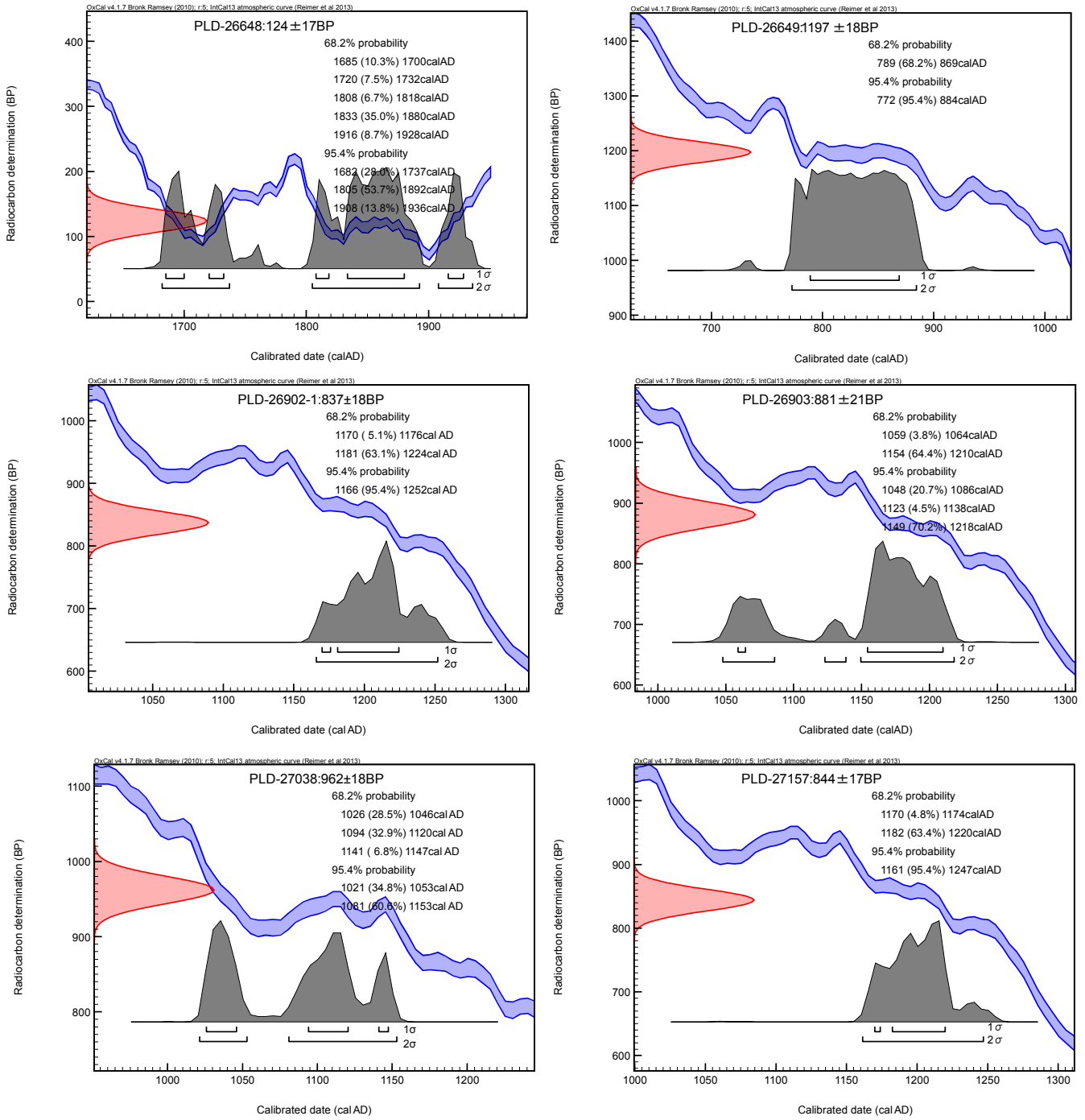
骨（PLD-27157）は1161-1247 cal AD(95.4%)で、12世紀後半～13世紀中頃の暦年代を示した。試料No.4（PLD-26903）の炭化材は、1048-1086 cal AD(20.7%)、1123-1138 cal AD(4.5%)、1149-1218 cal AD(70.2%)で、11世紀中頃～13世紀前半の暦年代を示した。これらは平安時代～鎌倉時代に相当する。なお、08SKの出土遺物は、12世紀後半～13世紀初頭頃とされており暦年代範囲とほぼ一致している。なお、試料No.3～5では最終形成年輪が残り、試料No.1・2では辺材部が残っていたが、最終形成年輪は残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料No.3～5は測定結果が枯死もしくは伐採年代を示すが、試料No.1・2では僅かではあるが古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも数年～十数年程度、新しい年代であると考えられる。

第3表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-26648 03SD 試料No.1	-26.56 \pm 0.20	124 \pm 17	125 \pm 15	1685AD(10.3%)1700AD 1720AD(7.5%)1732AD 1808AD(6.7%)1818AD 1833AD(35.0%)1880AD	1682AD(28.0%)1737AD 1805AD(53.7%)1892AD 1908AD(13.8%)1936AD
PLD-26649 012NR (035NR3層) 試料No.2	-26.04 \pm 0.20	1197 \pm 18	1195 \pm 20	789AD(68.2%)869AD	772AD(95.4%)884AD
PLD-26902-1 08SK 試料No.3	-26.75 \pm 0.22	837 \pm 18	835 \pm 20	1170AD(5.1%)1176AD 1181AD(63.1%)1224AD	1166AD(95.4%)1252AD
PLD-26903 08SK 試料No.4	-26.37 \pm 0.23	881 \pm 21	880 \pm 20	1059AD(3.8%)1064AD 1154AD(64.4%)1210AD	1048AD(20.7%)1086AD 1123AD(4.5%)1138AD 1149AD(70.2%)1218AD
PLD-27038 035NR 試料No.5	-28.66 \pm 0.21	962 \pm 18	960 \pm 20	1026AD(28.5%)1046AD 1094AD(32.9%)1120AD 1141AD(6.8%)1147AD	1021AD(34.8%)1053AD 1081AD(60.6%)1153AD
PLD-27157 08SK 人骨	-15.18 \pm 0.25	844 \pm 17	845 \pm 15	1170AD(4.8%)1174AD 1182AD(63.4%)1220AD	1161AD(95.4%)1247AD

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Lanting, J. N., Aerts-Bijima, A. T. and van der Plicht (2001) Dating of Cremated Bones. Radiocarbon, 43(2A), 249-254.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.



第 39 图 曆年較正結果

第5章 総括

第1節 遺構の変遷

今回の発掘調査成果により、中世1期、中世2期、中世3期、中世4期、江戸時代、近代の大きく6時期の遺構の変遷を確認することができた(第40図・第41図)。

中世1期

12世紀から13世紀前半までの時期で、10Aa区010NR下層・上層・10B区035NRがある。10B区035NRが堆積・埋没した以前の12世紀の南部系陶器は多数出土しているが、人為的な遺構はよくわからない。10B区の近辺か、10Aa区のやや北側辺りに遺構が存在した可能性が高く、10B区の付近に建物跡が存在した可能性もある。

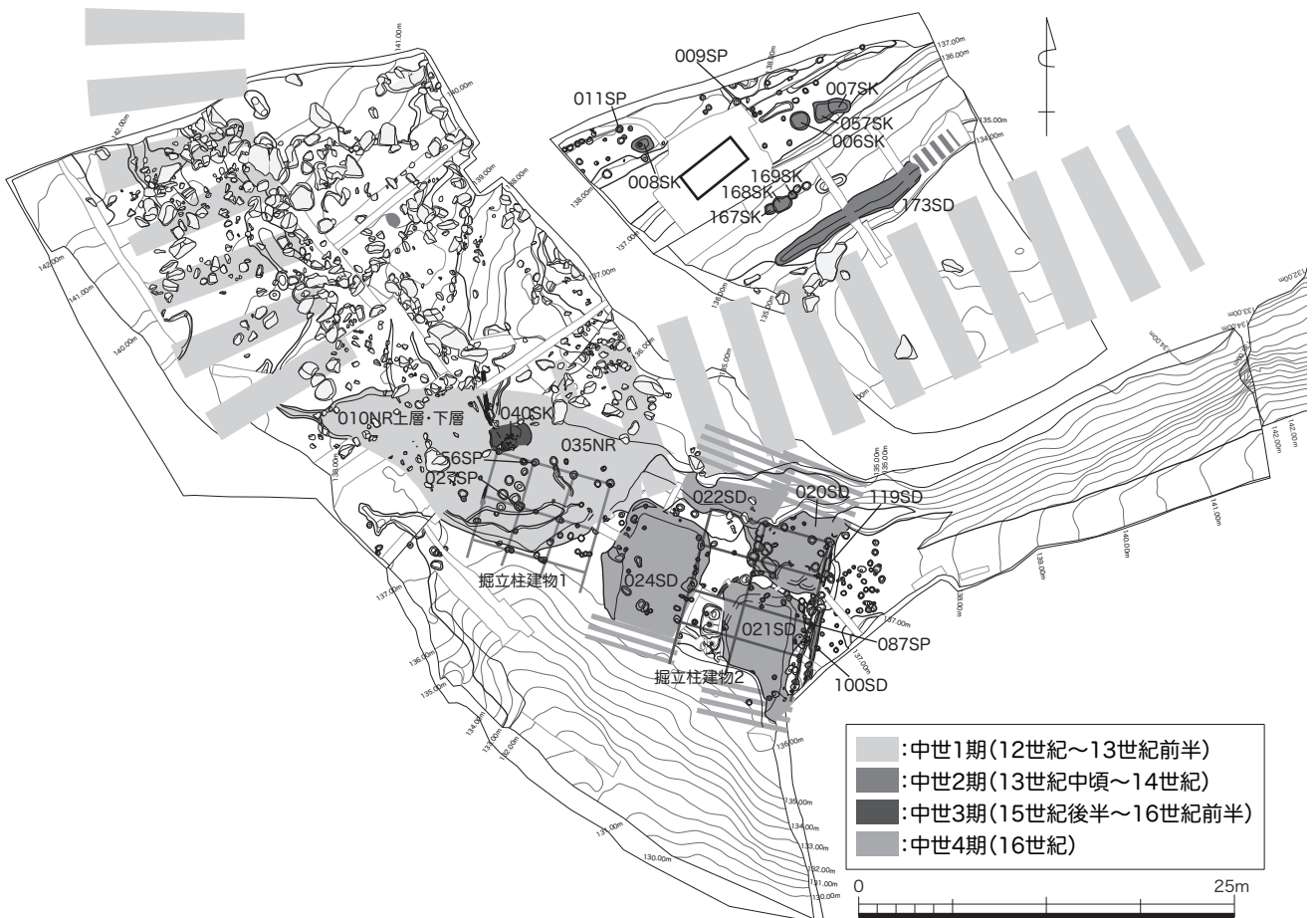
中世2期

13世紀中頃から14世紀の時期で、10Ab区006SK

～008SK、同057SK、10B区掘立柱建物1、同100SD、同119SD、10C区167SK～172SK、同173SDがある。

10Ab区006SK～008SK、同057SK、10C区167SK～169SK、同173SDは、10C区の沢の北の緩斜面になる部分にあり、一連の遺構群である可能性がある。これらの10Ab区の遺構は、中世1期に営まれた可能性もある。10Ab区の008SKは土坑墓と考えられるもので、一時期この付近が墓域になっていた可能性がある。また10C区の沢に並行する173SDは10Ab区のある山側を区画するか、10C区の沢の中にはいる南東側の区画を造成した際の溝の可能性もある。

10B区020SDの東にある10B区044SPから古瀬戸中Ⅲ期～中Ⅳ期の灰釉平底末広碗(E233)、同045SPから14世紀後半の羽釜形鍋(E224)が出土しており、区画溝の掘削以前に掘立柱建物跡や柵などが営まれた



第40図 中世における遺構変遷 (1:500)

可能性が高い。

中世3期

15世紀後半から16世紀前半の時期で、10B区040SKと10B区掘立柱建物2(同区087SP)がある。10B区040SKは15世紀後半の陶器・土師器がまとまって出土し、土坑のある10B区035NR付近には、何らかの生活の場があった可能性が高い。また10B区掘立柱建物2は中世4期の020SDより古い柱穴から構成されるもので、087SPは掘立柱建物2の東側柱列の位置にあり、かつ古瀬戸後IV古期の天目茶碗片(E226)が出土しているので、この時期に伴う建物跡と考えたい。

中世4期

16世紀の時期で、10B区020SD～024SDがある。これらは、10B区の東にある欠下城址の丘陵を区画する溝と考えられる。これらの溝には重複する部分があり、10B区022SD・024SDの段階と10B区020SD・

021SDの段階があり、024SDの下にはもう一段階古い10B区023SDがある。

この2段階にわたる区画溝は、多数の柱穴の後から掘削されたことが明らかであるが、出土遺物にはこの時期のものがない。そのため、はじめ区画溝は10B区021SDから出土した伊勢型鍋(E100～E102)の時期に営まれた遺構と考えたが、先に述べた14世紀の伊勢型鍋や古瀬戸陶器が出土する10B区044SP・同045SPや15世紀後半の古瀬戸陶器が出土する10B区087SPが10B区020SD・021SDの東にあることから、区画溝付近には14世紀から15世紀後半の掘立柱建物や柵などが営まれ、区画溝が掘削されたのは掘立柱建物以後と考えた。

江戸時代

17世紀から19世紀後半の時期で、10A区004NR・005NR・10B区012NRの一連の土石流と



第41図 江戸時代における遺構変遷 (1:500)

思われる堆積、10Aa 区の南西隅に谷頭があり、10B 区西側谷に堆積する 10B 区 015SD がある。10A 区 004NR の出土遺物には 16 世紀の土師器の「く」の字口縁鍋や 17 世紀の志野釉皿があり、谷の上流部から流されてきたものである。10Aa 区の北の山側に何らかの生活の場が存在した可能性が高く、付編で調査した「大乘坊」とされる延享三年（1746）に勅養寺住僧により石製祠に記された「古殿一字」とされる施設もその可能性の一つと思われる。また 10B 区 015SD は 10A 区の 004NR・005NR より新しく、18 世紀以後の可能性がある。

これらの土石流と思われる自然堆積は、遺構として確認できた範囲は限られるが、10B 区 035NR から江戸時代の灰釉丸碗（E210）が出土していることから、付近に建物跡などの遺構が営まれた可能性がある。しかし、江戸時代に営まれた遺構や遺物は、すぐ隣接地を流れた 3 条の自然堆積の影響を免れたとは思わず、その大部分は流失し、近代の遺構にみられる棚田の造成に伴い、削平されたのではないかとと思われる。

近代

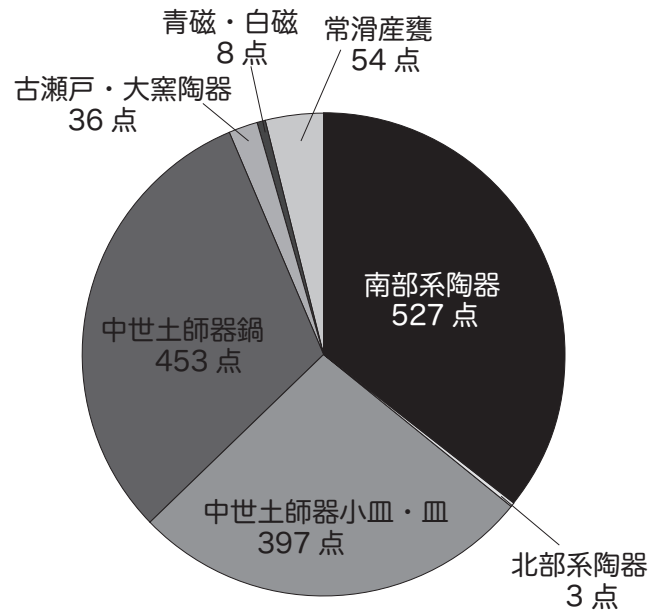
19 世紀後半以後の時期である。1 面の調査で確認できた 10Aa 区～10Ac 区・10B 区にひろがる棚田に伴う 6 面の造成面である。棚田の耕作土として 10Aa 区の 001SN と 002SN がある。10Aa 区の上段の棚田造成面を形成した盛土層よりいぶし瓦の道具瓦（E014・E015）が出土しており、瓦は明治四四年（1911）に観音堂が現在の勅養寺境内に移転した際のものとも考えられる。10Aa 区 003SD は江戸時代以後の沢から 10B 区の西側谷に造成された棚田に用水を入れるための水路と考えられる。明治 17 年の地籍図には既に 10A 区と 10B 区西側谷に水田が描かれており、これらの水田などの耕地化は、江戸時代末にさかのぼる可能性がある。

第 2 節 出土遺物の変遷とその特徴

出土遺物の種別毎に、器種の変遷とその特徴について述べる（第 42 図）。

遺跡の始まり

遺跡の始まりとも関係するが、最も古い遺物は 10B



第 42 図 中世における種類別の出土点数

区 035NR を中心に出土した灰釉陶器があり、図化した E134～E136 は折戸 10 号窯型式～東山 72 号窯型式のもので、10 世紀にさかのぼる。他に 10B 区 012NR の下部から出土した凹面布目瓦（E088）は、古代のものである可能性があり、付近に古代寺院などの施設があった可能性がある。

南部系陶器

碗、小皿、片口鉢があり、全部で 527 点が出土した。今回の出土遺物の中では最も破片数が多く、遺跡の変遷の中でも最も盛んに営まれた時期の状況を反映しているものと思われる。南部系陶器と北部系陶器に関して、出土した 530 点中で図化を行った 232 点の器種別の点数が第 4 表で、南部系陶器では、碗 A が 26 点、碗 B が 31 点、碗 C が 37 点、碗 D が 5 点、未分類の碗が 69 点、小碗が 7 点、小皿 A が 8 点、小皿 B が 28 点、未分類の小皿が 12 点、片口鉢が 6 点、甕が 3 点あり、北部系陶器では碗が 1 点であった。南部系陶器では、碗と小碗・小皿が多く、片口鉢と甕は少ない。碗の型式別の点数では、未分類の碗が 69 点あるので完全ではないが、碗 A～碗 C は点数が多く、碗 D は少ない。小碗・小皿では、未分類の小皿が 12 点あるが、小碗と小皿も一定量あるが、小皿 B が多い。図化した限定された資料ではあるが、碗では碗 D の渥美 3 型式の段階には資料が減少する様子が考えられるが、小碗・小

皿では小皿Bの渥美3型式の資料が反対に増える傾向がみられる。

色調や胎土の特徴から瀬戸窯産・設楽窯産に分類した資料は、碗Aの尾張3型式のものが1点、碗Bと碗Cの尾張6型式のものが8点、小皿Bの尾張6型式のものが3点と尾張6型式～7型式のものが1点、片口鉢の尾張6型式のものが4点あり、尾張6型式の段階のものを中心に搬入されている。従って、共伴関係は十分に確認できていないが、欠下城跡では渥美2b型式～渥美3型式の渥美窯産のものに伴うものが多い。また、器種別では碗が多く、点数は少ないが片口鉢では図化した6点中4点が尾張6型式のものに分類でき、片口鉢の半数以上が尾張地域から搬入されている可能性がある。北部系陶器の碗は1点あるが、明和～大畑大洞型式のもので、渥美3型式の存続時期と重なるので、欠下城跡では渥美窯産の南部系陶器の搬入が終わる頃までに、無釉の陶器類の使用が終わるようである。

第4表 南部系陶器の器種別点数

南部系陶器	点数	時期・内訳
碗A	26	渥美1型式、12世紀前半～12世紀中頃、尾張3型式1点
碗B	31	渥美2型式、12世紀後半～13世紀初頭、尾張6型式4点
碗C	37	渥美2b型式～3型式、13世紀前半～13世紀中頃、尾張6型式6点
碗D	5	渥美3型式、13世紀後半～14世紀初頭
碗（未分類）	69	渥美1型式～3型式、12世紀前半～14世紀初頭、設楽窯産1点
小碗	7	渥美1型式、12世紀前半～12世紀中頃
小皿A	8	渥美2型式、12世紀後半～13世紀初頭
小皿B	28	渥美3型式、13世紀中頃～14世紀初頭、尾張6型式3点、尾張6型式～7型式1点
小皿（未分類）	12	渥美2型式～3型式、12世紀後半～14世紀初頭
片口鉢	6	渥美1型式～3型式、12世紀前半～14世紀初頭、尾張6型式4点
甕	3	渥美1型式～3型式、12世紀前半～14世紀初頭
北部系陶器碗	1	明和～大畑大洞型式、13世紀後半～14世紀前半

中世土師器皿・小皿

中世における土師器皿は破片数で397点出土しており、南部系陶器と中世土師器鍋について多いが、個体数では土師器鍋より多いものと思われる。図化したものは98点あり、その内訳（第5表）は、ナデ・ヨコナデ調整の小皿が30点、皿Aが13点、皿Bが34点、皿Cが3点、未分類の皿が6点、ロクロナデ調整の小皿が4点、皿8点である。ロクロナデ調整の小皿・皿に比べて、ナデ・ヨコナデ調整の小皿・皿は出土点数が多く、欠下城跡では主体になる器種である。小皿・皿の器種毎の時期が共伴遺物などから明らかではないのでその変遷は辿れないが、ナデ・ヨコナデ調整でやや深みのある杯形の皿Bが本遺跡の主体の皿で、これとナデ・ヨコナデ調整の小皿が伴うものと思われる。このような状況は、詳細な時期は同じではないが、豊橋市の吉田城跡でも同様の傾向がみられるので、東三河地域の特徴である。また、皿Aで口縁部が強く外反しておわるE221は、10B区040SKから出土しており、古瀬戸後Ⅲ期の灰釉平碗（E217）や15世紀後半の常滑産甕（E219～E220）、土師器の茶釜形鍋（E222）と供伴していて、15世紀後半のものと思われる。同様な形態の土師器皿が、先に述べた吉田城跡で15世紀後半以後の遺物と共伴してみられ、この時期の特徴を示す形態といえる。

一方、ロクロナデ調整の皿・小皿は出土点数が多いが、西三河地域にある西尾市室遺跡ではロクロナデ調整（ロクロ成形）の皿がほとんどで、ナデ・ヨコナデ調整（非ロクロ成形）の皿は極少量であるので、産地は不明であるが本遺跡のロクロ調整の小皿・皿は西三河地域からの影響を受けたものである可能性が高い。

第5表 中世土師器皿の器種別点数

中世土師器小皿・皿	点数
ナデ・ヨコナデ調整小皿	30
ナデ・ヨコナデ調整皿A	13
ナデ・ヨコナデ調整皿B	34
ナデ・ヨコナデ調整皿C	3
ナデ・ヨコナデ調整皿（未分類）	6
ロクロナデ調整小皿	4
ロクロナデ調整皿	8

い。

中世土師器鍋

鎌倉時代から戦国時代の土師器の鍋で、伊勢型鍋・羽釜形鍋・内耳鍋・「く」の字口縁鍋・茶釜形鍋があり、破片数で453点ある。実際の個体数は少なく、図化できたものは31点で、その内訳（第6表）は伊勢型鍋が15点、羽釜形鍋が6点、茶釜形鍋が3点、内耳鍋が4点、「く」の字口縁鍋が3点で、伊勢型鍋が多い。時期別の器種の点数は、12世紀後半～13世紀前半は伊勢型鍋が4点、14世紀を中心に13世紀後半～15世紀前半は伊勢型鍋が11点と羽釜型鍋が6点、15世紀後半～16世紀は茶釜型鍋が3点と内耳鍋が4点、「く」の字口縁鍋が3点であり、時期的変遷を辿ることがで

第6表 中世土師器鍋の器種別点数

土師器鍋	点数	時期・内訳
伊勢型鍋	15	12世紀後半～13世紀前半：4点、13世紀後半～14世紀：11点
羽釜形鍋	6	14世紀を中心に13世紀後半～15世紀前半
茶釜形鍋	3	15世紀後半～16世紀
内耳鍋	4	15世紀後半～16世紀
「く」の字口縁鍋	3	15世紀後半～16世紀

第7表 古瀬戸・大窯陶器の器種別点数

古瀬戸・大窯陶器	点数	時期・内訳
灰釉平底末広碗	1	古瀬戸中Ⅲ期～中Ⅳ期1点
天目茶碗	1	古瀬戸後Ⅳ古期1点
灰釉平碗	6	古瀬戸後Ⅱ期1点、古瀬戸後Ⅲ期3点、古瀬戸後Ⅲ新期1点、古瀬戸後Ⅳ古期1点
灰釉縁釉小皿	3	古瀬戸後Ⅲ期～後Ⅳ古期1点、古瀬戸後Ⅳ古期1点、古瀬戸後Ⅳ期1点
灰釉折縁深皿	1	古瀬戸後Ⅳ古期1点
灰釉卸目付大皿	1	古瀬戸後Ⅳ古期1点
灰釉卸目皿	1	古瀬戸後Ⅰ期1点
灰釉椀型鉢	1	古瀬戸後期1点
灰釉四耳壺	1	古瀬戸後期Ⅱ期～後Ⅳ期1点、他1点
盤類	1	古瀬戸後Ⅳ期1点
鉄釉擦鉢	2	古瀬戸後Ⅳ古期1点、大窯2段階1点

きる。

中世の施釉陶器と輸入磁器

中世の施釉陶器に古瀬戸陶器31点、大窯陶器5点、輸入磁器に青磁8点、白磁2点がある。

12世紀～13世紀の南部系陶器などに比べると出土点数が少なく、同時期のものでは、白磁の碗（E037）、青磁の小鉢か香炉（E059）、青磁の香炉（E209）、青磁の碗（E253・E351）などがあり（図化はしていないが他に龍泉窯産の青磁の香炉か壺1点と碗1点、福建省産の白磁の袋物1点がある）、古瀬戸陶器は伴っていない。古瀬戸陶器と大窯陶器の内訳（第7表）は、14世紀のもの（古瀬戸中期～古瀬戸後Ⅱ期）は灰釉平底末広碗（E223）と灰釉卸目皿（E322）、灰釉平碗（E323）の3点のみで、その他の古瀬戸陶器の14点は15世紀以後のもの（古瀬戸後Ⅲ期～古瀬戸後Ⅳ期）で、16世紀にかかるものは鉄釉擦鉢（E353）のみであった。古瀬戸陶器に伴う時期の輸入磁器は、15世紀前半の明代のものと思われる青磁の香炉（E326）がある。

よって、中世の本遺跡における施釉陶器と輸入磁器の関係は、13世紀以前では輸入磁器のみで、14世紀以後は古瀬戸の施釉陶器が主体になる。

第3節 中世における遺構の変遷と遺物の対応

第1節の遺構の変遷で検討したように、中世2期である13世紀中頃から14世紀において掘立柱建物や土坑などがあって、比較的多くの遺構がみられる。中でも10B区掘立柱建物1のある13世紀中頃の遺跡の姿を示す良い資料である。しかし、時期が明確に分かる遺構は少なく、時期を決定するのに困る遺構も多い。

一方で、第2節の出土遺物で検討したように、出土遺物で最も多いのは遺構の中世1期から中世2期にかかる12世紀から13世紀中頃の南部系陶器が最も出土点数が多いことが明らかである（13世紀後半の南部系陶器は出土点数が多くない）。しかし、中世土師器の小皿・皿は時期の区分ができていないが、比較的多数みられる中世土師器の鍋では、12世紀から13世紀中頃の伊勢型鍋より13世紀後半から15世紀前半の伊勢型鍋や羽釜形鍋、15世紀後半から16世紀の茶釜形鍋や

内耳鍋、「く」の字口縁鍋の方が多い。一方でこれらの陶器と土師器に併行する古瀬戸陶器や大窯陶器は13世紀以前のもはなく、14世紀から16世紀前半までのものが少数あるのみである。

よって、遺構や遺物は途絶える時期が存在する可能性はあるものの、12世紀から16世紀まで概ね認められ、遺跡における営みには違いが認められた。

中世1期（12世紀～13世紀前半）：掘立柱建物などの遺構が存在した可能性があり、多くの南部系陶器と土師器の小皿・皿、少数の土師器鍋とごく少数の輸入磁器（青磁と白磁）が使用された段階である。この段階には、遺構はあまりよく分からないが、遺物の出土量から盛んな人の営みが推定でき、また墨書土器も比較的多くみられることから（写真図版19参照）、文化的に比較的高い様子が考えられる。

中世2期（13世紀中頃～15世紀前半）：掘立柱建物や土坑、小規模な区画溝などの遺構が存在した可能性が高く、比較的多くの南部系陶器と土師器の小皿・皿、少数の土師器鍋と少数の古瀬戸陶器が使用された段階である。この段階には、10Ab区に墓域が形成された可能性があり、遺跡の中で多様な営みが存在したものと考えられる。この時期の前半までは南部系陶器が使われ、後半は古瀬戸陶器が使われた。

中世3期（15世紀後半～16世紀前半）：掘立柱建物からなる遺構が存在した可能性があり、土師器の小皿・皿、少数の土師器鍋と少数の古瀬戸陶器と大窯陶器、常滑窯産甕が使用された段階である。この段階と考えられる遺構と遺物は少ないが、土師器の鍋では中世1期～中世3期までの出土点数とあまり出土点数が変わらないので、人の営みの様子（量）はあまり変わらないものと思われる。

中世4期（16世紀）：10B区の東にある欠下城址の丘陵を区画する溝が営まれた。この時期の遺構と推定できるのは区画溝だけであり、この時期の出土遺物がなため、不確定ではあるが、調査区付近では人の営みが少ない様子が推定できる。

第4節 勅養寺と遺構・遺物の関係

今回の調査成果と勅養寺の関係を述べたい。現在の

勅養寺は曹洞宗の寺院で、戦国時代以前は真言宗の寺院であった。寺伝によれば、文武天皇の御代に天皇の病氣快癒の為に勅使が鳳来寺に向かう途中で、山中で迷った勅使が、当時中腹寺と呼ばれた当寺院に立ち寄られたことが、寺院の名の由来とされている。

今回の発掘調査では、古墳時代の土師器は少数見つかっていたが、奈良時代の出土遺物はなく、遺跡の営みは10世紀後半の平安時代以後に明らかになる。発掘調査成果による中世1期から中世3期の遺構や遺物は、勅養寺に関連したものである可能性があるが、寺院との直接の関係を示す資料はない。しかし、中世1期から中世3期にあたる12世紀から15世紀後半にかけて、人々による営みが調査区付近に存在したことは明らかで、土石流と思われる自然流路に含まれた遺物は、調査区付近と調査区のより上流部の地点から流されてきた可能性が高い。これらの遺物が、豊川右岸の中位段丘面から上がった山麓部の丘陵地に営まれたものであることは明らかで、豊川右岸の中位段丘面に集落が展開する近世以後のあり方とは異なる性格をもつものである。

今回の調査成果で得られた営みの姿が、いわゆる山岳寺院としての勅養寺の活動の痕跡と考えられる可能性もあるが、第1章第3節で述べたように、古代・中世の遺跡分布を反映した交流ルートが豊川右岸の山麓部やさらに山塊部に存在したことによるのかもしれない。このような現象が、勅養寺の寺伝にもある、古代の勅使が山中で迷い、中腹寺に立ち寄るといふ伝承につながるものと考えておきたい。

第5節 欠下城址と遺構・遺物の関係

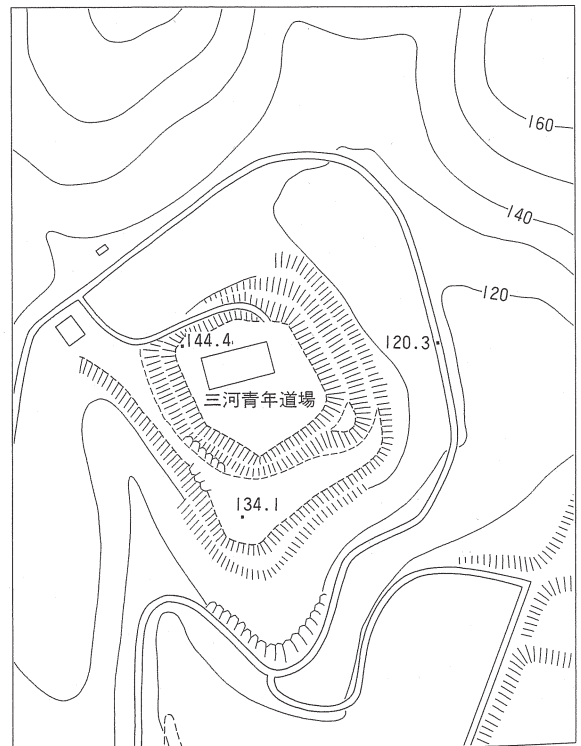
欠下城址の史跡部分は、10B区でみつかった区画溝020SD～024SDの東にある丘陵上に指定されていて、史跡部分が区画溝による境界の中にあることが分かった。史跡のある丘陵の北側の11A区や東側の11B区では、中世にさかのぼる遺構を確認できなかったが、11A区や11B区で確認された遺物は、この丘陵上から流れ落ちてきたもので、鎌倉時代にさかのぼるものがある。市史では、欠下城址の地点で五輪塔があったことが記述されているが、出土遺物には中世の土師器鍋

と思われる破片もあり、史跡部分においてある程度の生活が営まれた可能性が高い。10B区で見つかった区画溝の時期は、同区 021SD から出土した伊勢型鍋の時期（13世紀後半～14世紀）である可能性と発掘調査による成果、主に遺構の重複関係により15世紀後半以後の時期である可能性がある。前者の時期であれば、寺院等の施設が存在した可能性があり、後者の時期であれば、文献記録や伝承はないが館や城等が存在した可能性が高くなる。この分析では、先に述べたように、遺構の重複関係や周囲の遺構の時期とその位置関係を重視して、区画溝の時期を中世4期の16世紀と考えた。

第1章第3節において室町時代以後の城館跡の分布として、①豊川流域の沖積層に面した城館、②豊川へ北から流れ込む支流に面した段丘地形を利用した城館跡、③豊川右岸の中位段丘面を見下ろす山地上に築かれた城館跡の大きく3つに分けた。欠下城跡は③の分布で、欠下城跡の他に徳定城跡（第4図の88）と大谷城跡（第4図の62）がある。大谷城跡は、この地域周辺で国人領主として勢力誇った山家三方衆のひとりである田峯・菅沼氏の2代定忠が永正年間（1504～1521）にはじめに築いた城という伝承があり、豊川右岸の中位段丘面を見下ろす一番山側に築かれたという点が重要である。これは当時のいわゆる国人領主層が大谷城跡を最初の拠点として、16世紀の初頭に③の分布のような位置におき、その後豊川右岸の中位段丘面に進出した様子を想起させるものである。

欠下城跡は、これまでに縄張り図が作成され、単郭の城館跡として研究が進められてきた城跡である（第43図）。今回の発掘調査により、その城館跡が想定されている山側が区画溝により画されることが明らかになったことから、欠下城跡が大谷城跡と同様な時期に同様な立地をもつ城館跡であったと考えたい。このように考えると、欠下城跡も当時の社会の必要に応じて新城市矢部地域に拠点を構えた地域領主により築かれた可能性がある。この場合、中世のより古い時期より付近に存在した勅養寺との関係もあるものと思われる。

また第1章第3節で検討した古代・中世から江戸時代の遺跡分布の傾向は、戦国時代から江戸時代の城館跡の分布の変遷が重要である。なぜなら、当初の城館跡が古代・中世の遺跡分布を反映した交流ルート上に



第43図 欠下城跡縄張り図

（高田 徹氏作図、愛知県教育委員会 1997『愛知県中世城館跡調査報告Ⅲ』（東三河地区）より転載）

築かれ、その後地域を開発した領主層により新たな交流ルートが築かれ、城館跡が設楽ヶ原とよばれる豊川右岸の中位段丘面に展開していくものと考えられるからである。

参考文献

- 賛 元洋・赤木 剛 編 1994『吉田城跡（Ⅰ）』「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集」豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会
- 川井啓介編『室遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第49集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 高田 徹 1996「三河長篠城及び長篠合戦陣所群に関する検討」『中世城郭研究』創刊10周年記念号 第10号、中世城郭研究会
- 梅本博志・安藤義弘編 1997『愛知県中世城館跡調査報告』Ⅲ（東三河地区）愛知県教育委員会

付編 勅養寺裏山の平場遺構

第1節 はじめに

今回の発掘調査区の南西に隣接する矢部配水池は、かつて勅養寺の観音堂があった場所で、矢部配水池の西の山林中に、いくつかの平場遺構などが存在することが分かった。これらの遺構は発掘調査の遺構と関連する可能性が考えられた為、平成25年4月22日に平場遺構などの簡易計測などの現地調査を実施させて頂いた(第43図)。

第2節 確認された遺構

調査の結果、平場が7ヶ所、炭焼窯跡と考えられる穴が3ヶ所、石階段が1ヶ所、道跡が1ヶ所確認できた。以下にその概要を述べる。

平場①：矢部配水池の西の丘陵頂部にある平場で、東西15.2m、南北20.3mをはかる(写真4)。平面形は丘陵の形状と同じ南北に長い楕円形で、平場の中央がやや膨らみのある平坦面になっている。平場の北東隅にある平場④から石階段で上がることができる。

平場②：矢部配水池の南西にある小さい平場で、平場①より南東に一段下がる位置にある。平面形は不整な三角形で、東西6.6m、南北9.8mをはかる。

平場③：平場①の南にある平場で、平場②より一段下がる。平面形は東西に長い長楕円形で、東西15.9m、南北3.5mをはかる。平場中央の山側にある穴SKbがあり、この炭焼窯跡と思われる穴に伴い造成された可

能性もある。

平場④：平場①から東に一段下りた位置にあり、東側は矢部配水池の造成により削平されているものとも思われる。平面形は南北に長い長楕円形で、東西6.0m、南北17.3mをはかる。この平場の北端に、平場①に上がる石階段があり、その南に炭焼窯跡と思われる穴SKaがある。SKaに伴い造成された可能性もあるが、石階段の存在から、古い時期の形態を残していると思われる。

平場⑤：矢部配水池の南西にあり、平場②より南東に一段下がる位置にある(写真5)。平面形は三角形に近い台形で、東西9.0m、南北9.0mをはかる。この平場の東に炭焼窯跡と思われる穴SKcがあり、この穴に伴い造成された平場の可能性もある。

平場⑥：平場③の南に一段下がる位置にある平場で、平面形は不整な長方形である(写真6)。規模は東西



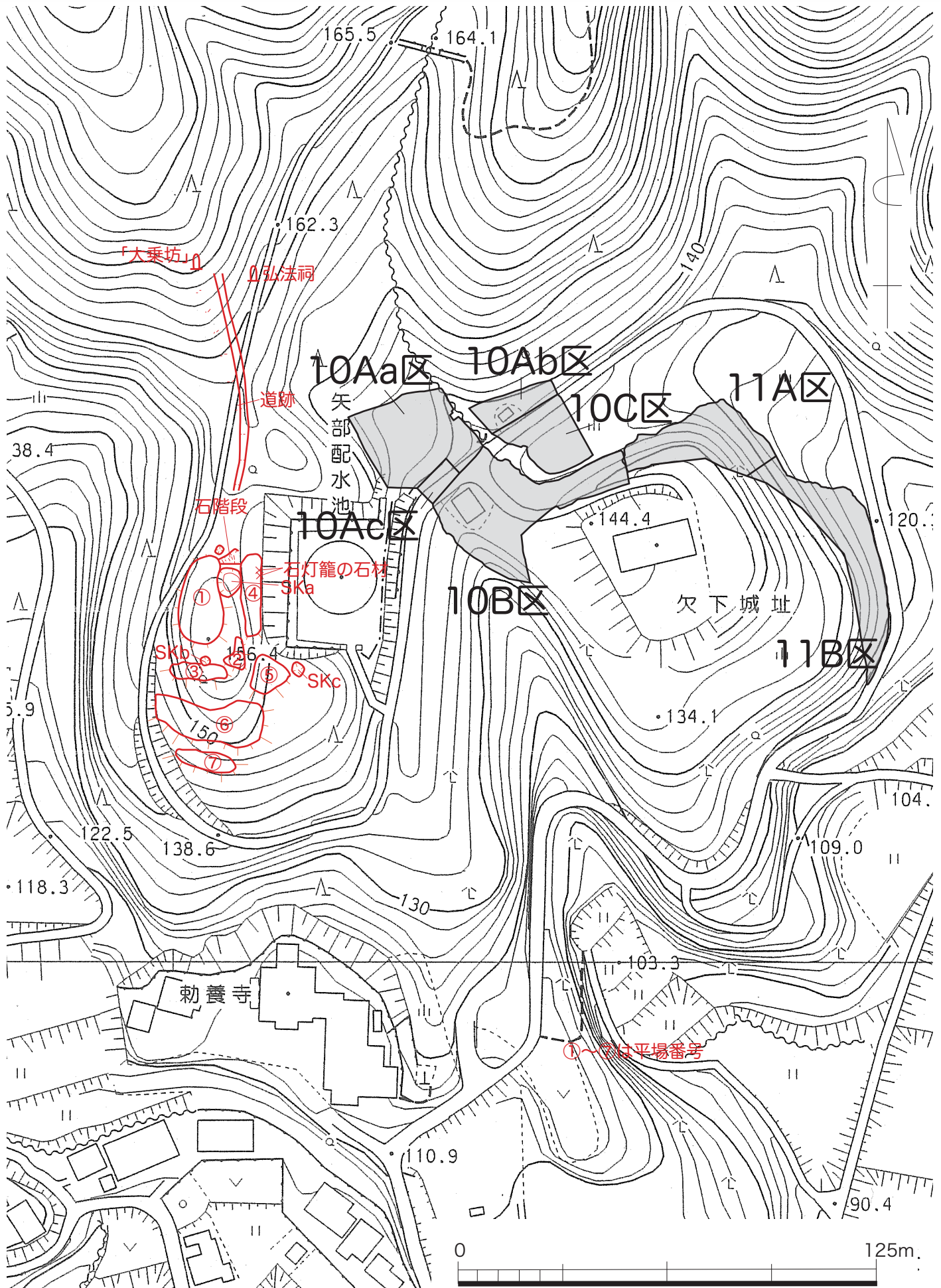
写真4 平場① (南東より)



写真5 平場⑤ (北東より)



写真6 平場⑥ (南東より)



第 44 図 勅養寺裏山の平場遺構 (1:1,500)

38.4m、南北 9.8m で、最も広い平場であるが、西端部は道により削平されている可能性がある。

平場⑦：平場⑥の南に一段下がる位置にある平場で、平面形は東西に長い長楕円形である。規模は東西 15.0m、南北 3.7m で、西端部は道により削平されている可能性がある。

SKa：平場④の北西の山側に掘られた穴で、上端奥行 5.5m、幅 7.0m、下端奥行 4.0m、幅 2.6m をはかる。平面形は楕円形で、炭焼窯跡の可能性が高い。明治 44 年の観音堂の移築後のものか。

SKb：平場③の中央北、山側に掘られた穴で、上端奥行 3.5m、幅 4.5m をはかる。平面形は楕円形で、炭焼窯跡の可能性が高い。

SKc：平場⑤の東に隣接して掘られた穴で、上端奥行 3.3m、幅 2.7m をはかる。平面形は円形で、炭焼窯跡の可能性が高い。

石階段：平場④の北西端から平場①の北東隅に上がる階段で、段数は 9 段残る（写真 7）。階段は長さ 4.5m、幅 1.5m で、旧観音堂から丘陵頂部に至るためのものであろうか。

石灯笼の石材：平場④の東端に 2 基残る。矢部配水池の西に隣接しており、原位置より移動されている可能性が高い。

道跡：平場④の北端辺りから北の山林中にある祠の南までのびるもので、幅 2.5m ～ 3.0m、深さ 2.0m 前後の溝状である。溝状の遺構が丘陵尾根の頂部にのびており、その形態から掘切の道の可能性が高いものと思われた。

第 3 節 まとめ

矢部配水池の地点にあった観音堂と関連する遺構は、西の丘陵頂上部にある平場①と平場①に登る石階段、平場①の南下にある東西に長い大きな平場⑥、そして平場①に上がる石階段のある平場④が古い時期の形態を残す可能性がある。平場④は炭窯跡と思われる SKa や矢部配水池造成に伴う改変を受けている可能性がある。炭窯跡と思われる穴 SKa ～ SKc は勅養寺観音堂が移転した明治 44 年以後に営まれた可能性が高く、現在でも地表面に大きく残るもので、SKa は大型で近代



写真 7 石階段（東より）

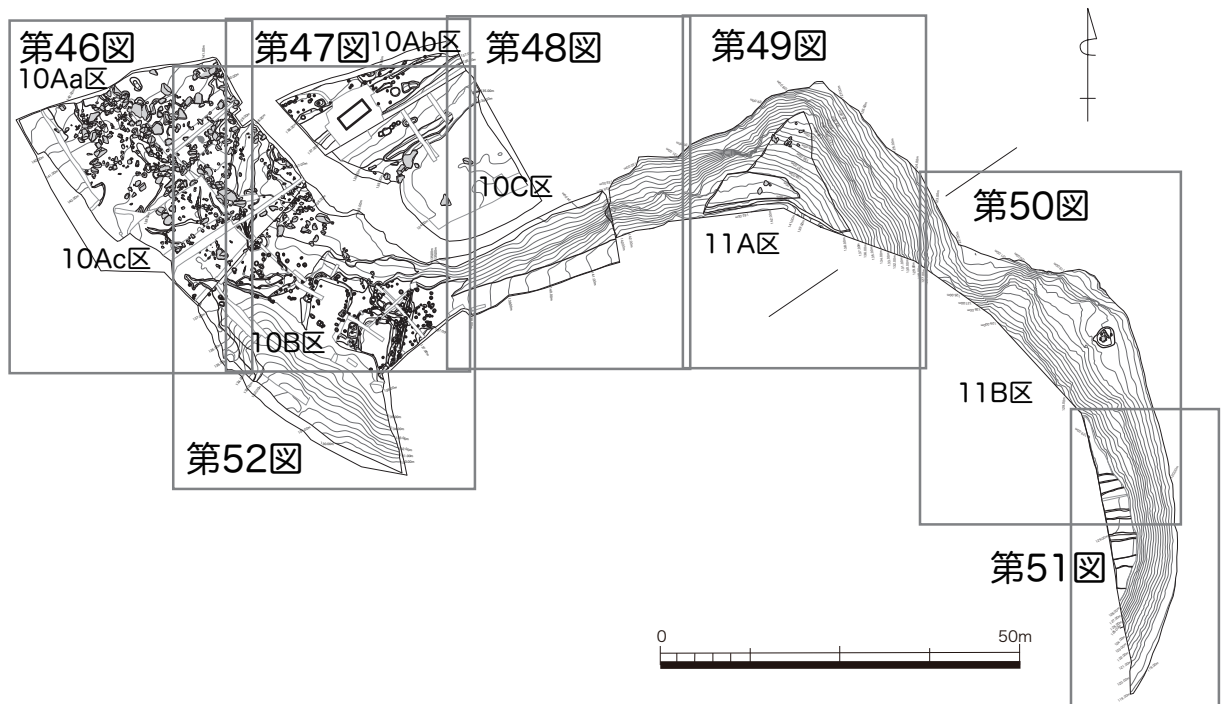
後期の黒炭焼窯の可能性が高いものである。よって平場③・平場⑤は SKb と SKc に関連する平場の可能性がある。

よって山頂頂上にある平場①は、観音堂跡から登る石階段があることから、寺院に關係する何らかの施設があった可能性が高い。

謝辞

調査にあたり、勅養寺の住職 山崎正博氏には、多くのご教示とご協力を頂いた。また、現地調査では松田訓氏の協力を得た。記して感謝の意としたい。

基本遺構図

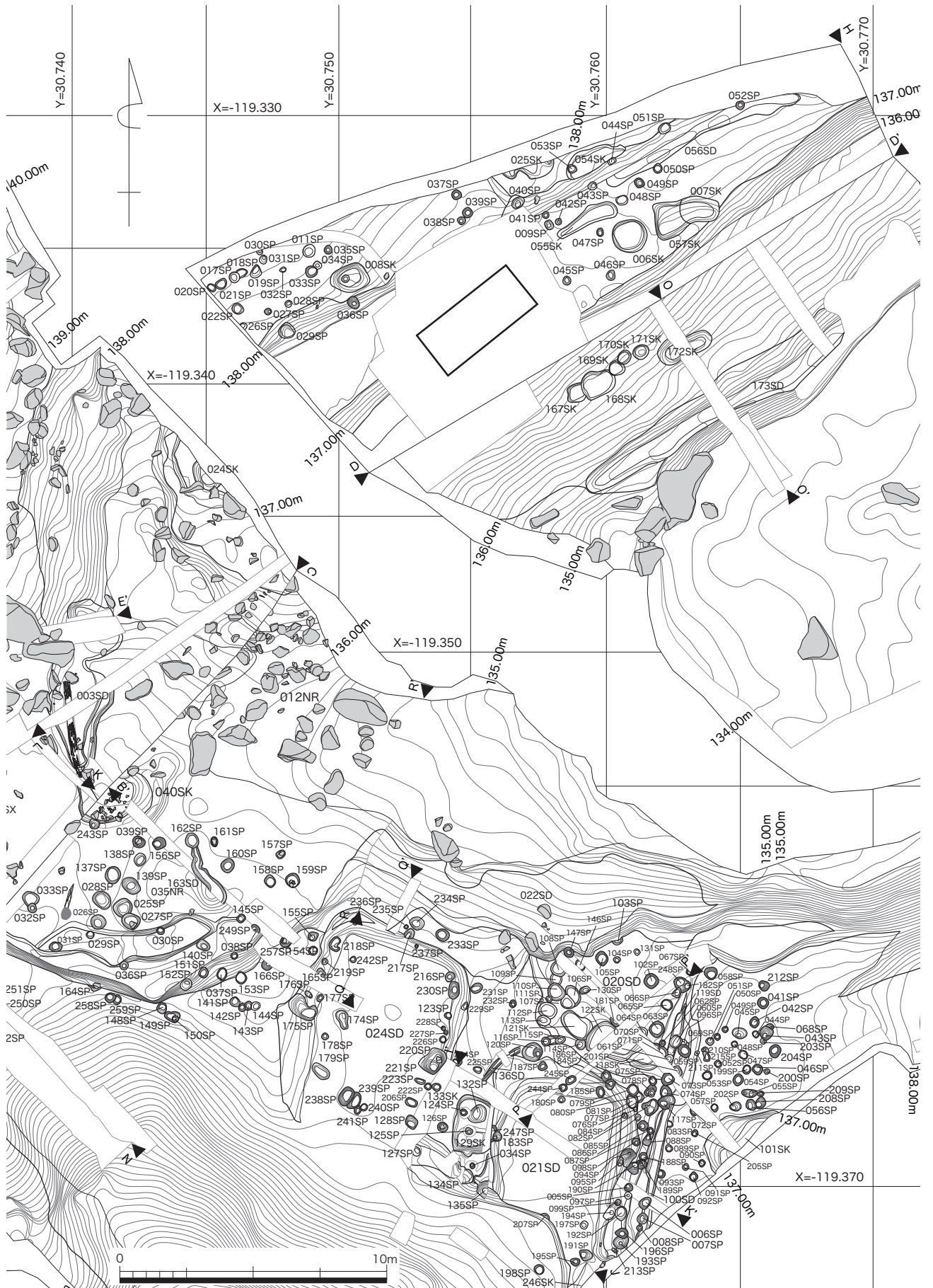


第45図 2面遺構平面図 (1:1,000、2面遺構平面図の図割り)

基本遺構図

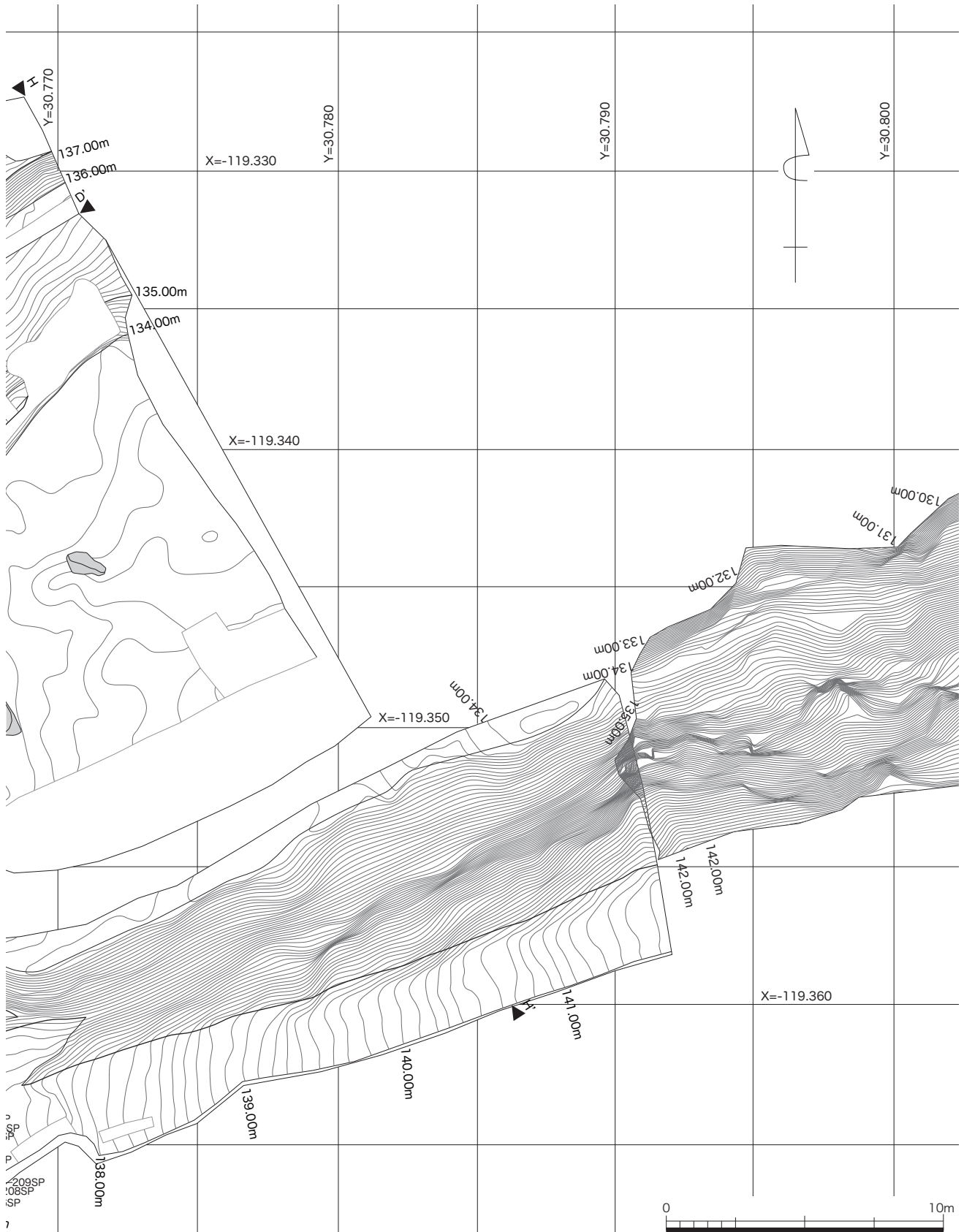


第 46 図 2 面遺構図 1 (1 : 200)

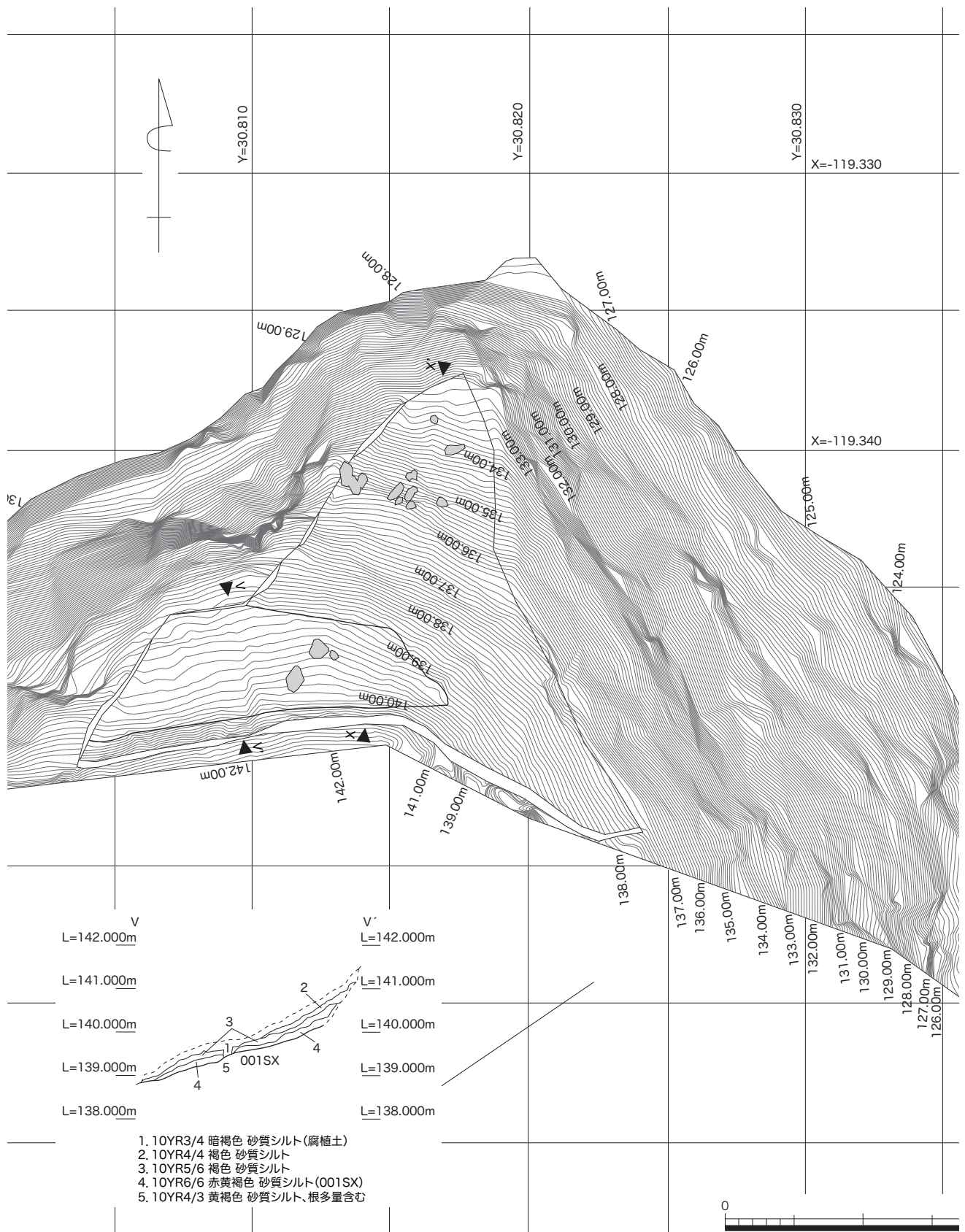


第 47 图 2 面遺構図 2 (1 : 200)

基本遺構図

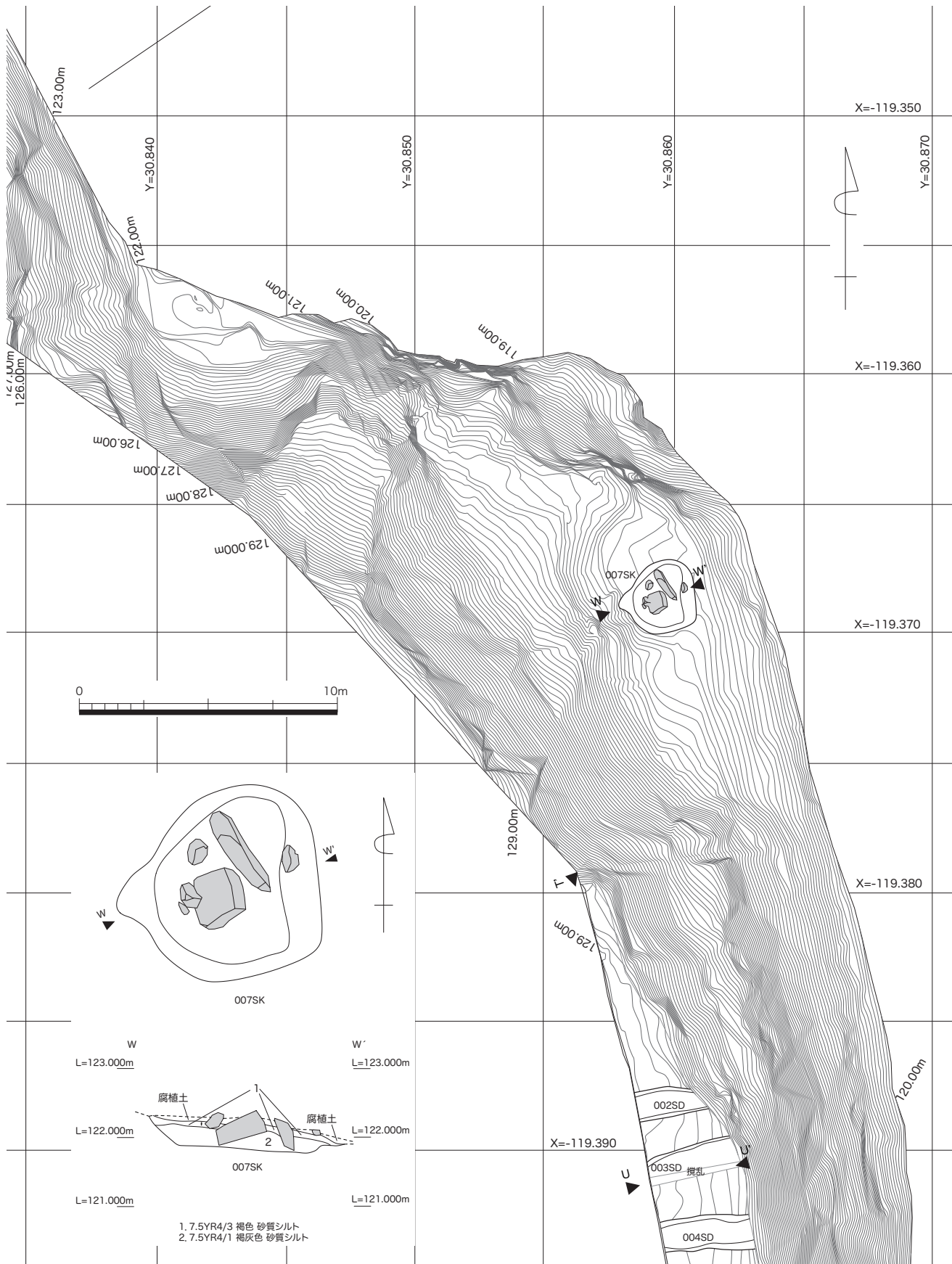


第 48 図 2 面遺構図 3 (1 : 200)

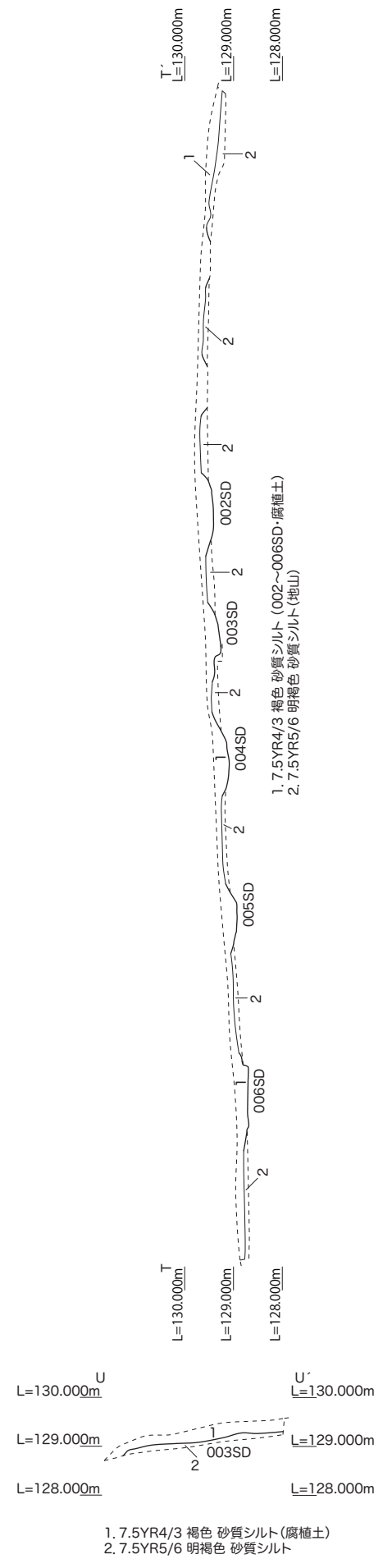
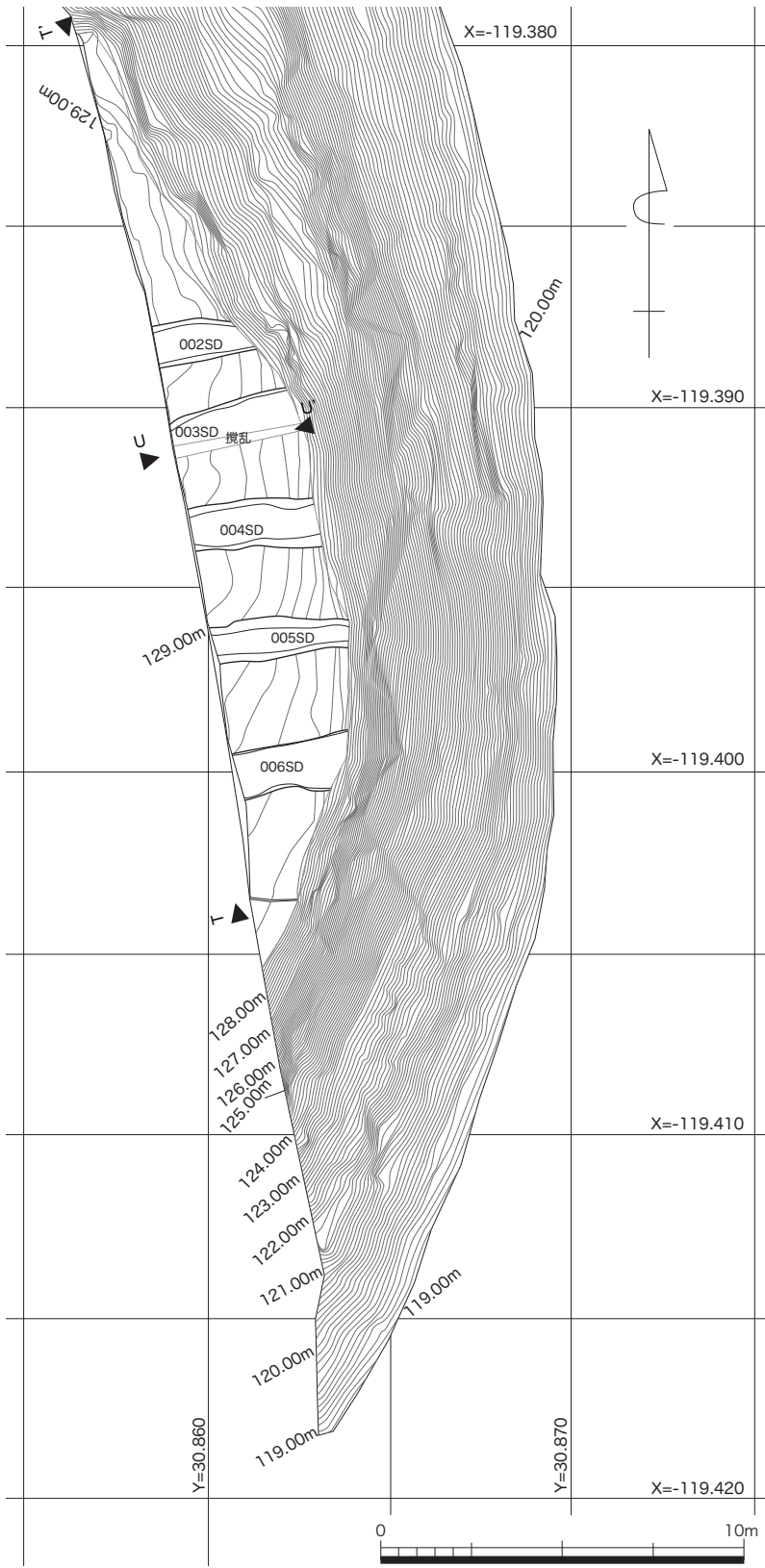


第 49 図 2 面遺構図 4 (1 : 200)・11A 区 001SX 断面図 (1:125)

基本遺構図

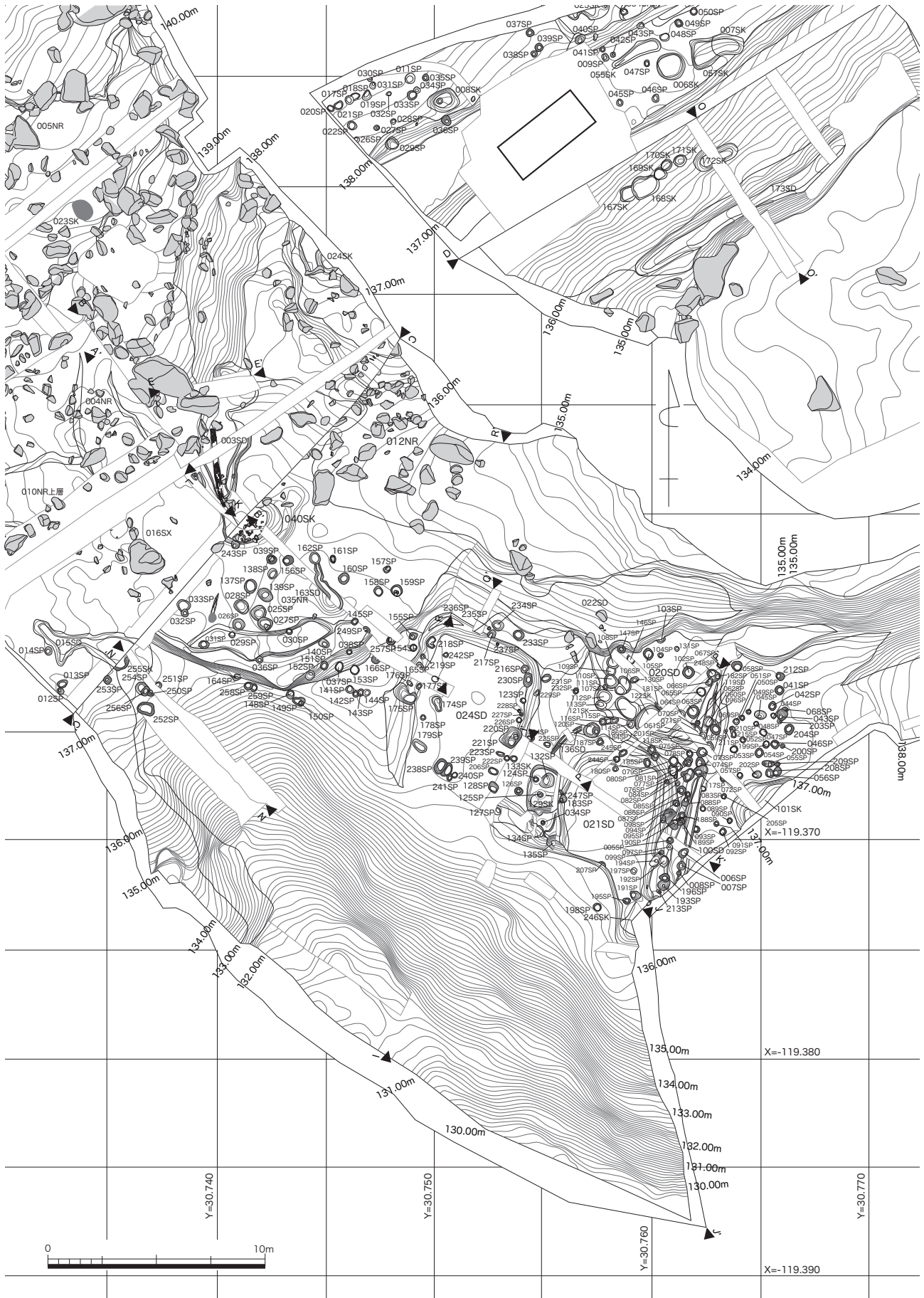


第 50 図 2 面遺構図 5 (1 : 200) ・ 11B 区 007SK (1:80)

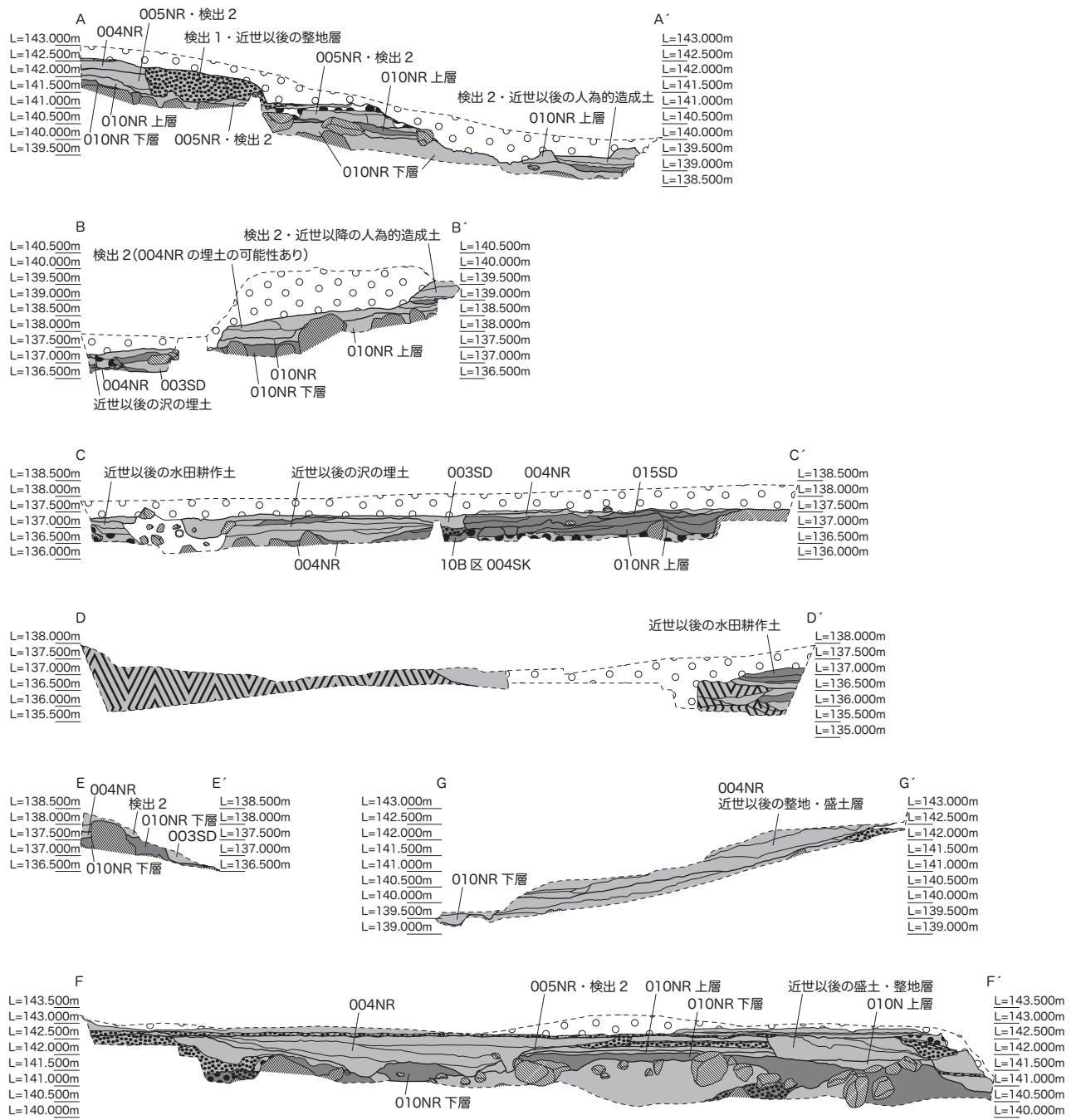


第 51 図 2 面遺構図 6 (1 : 200) ・ 11B 区 002SD ~ 006SD 断面図 (1:125)

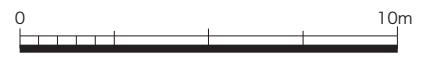
基本遺構図



第 52 図 2 面遺構図 7 (1 : 250)

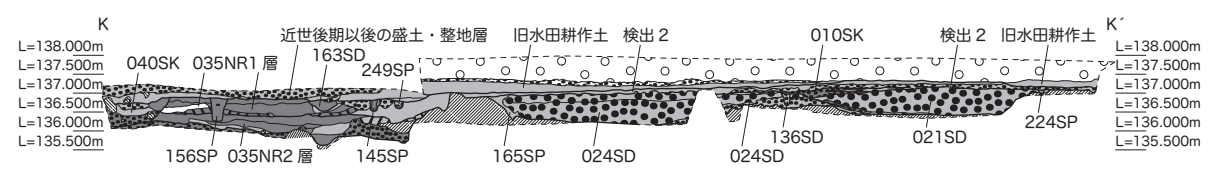
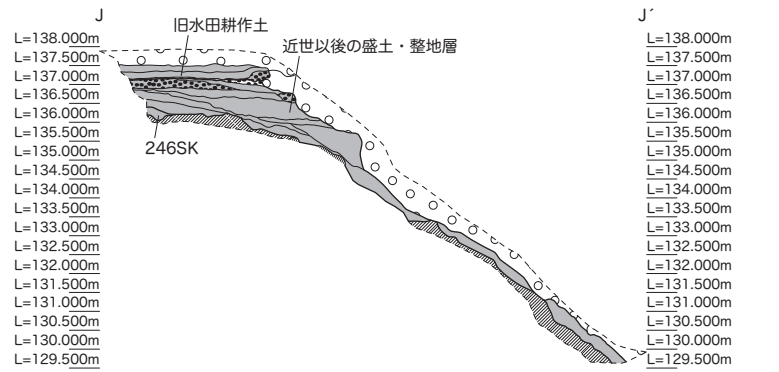
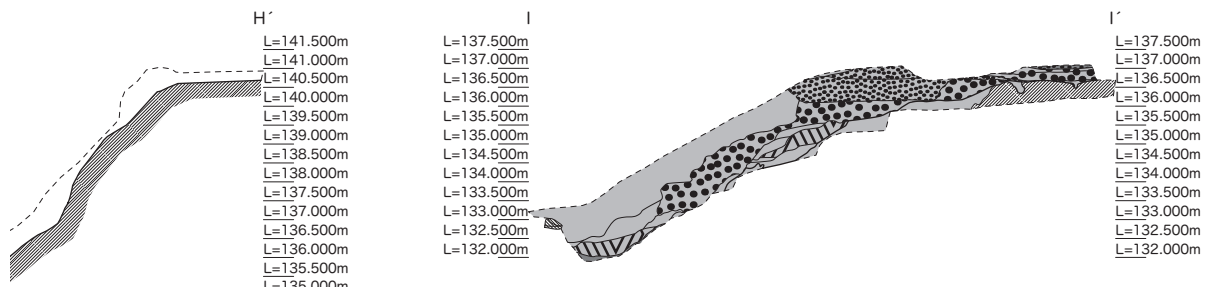
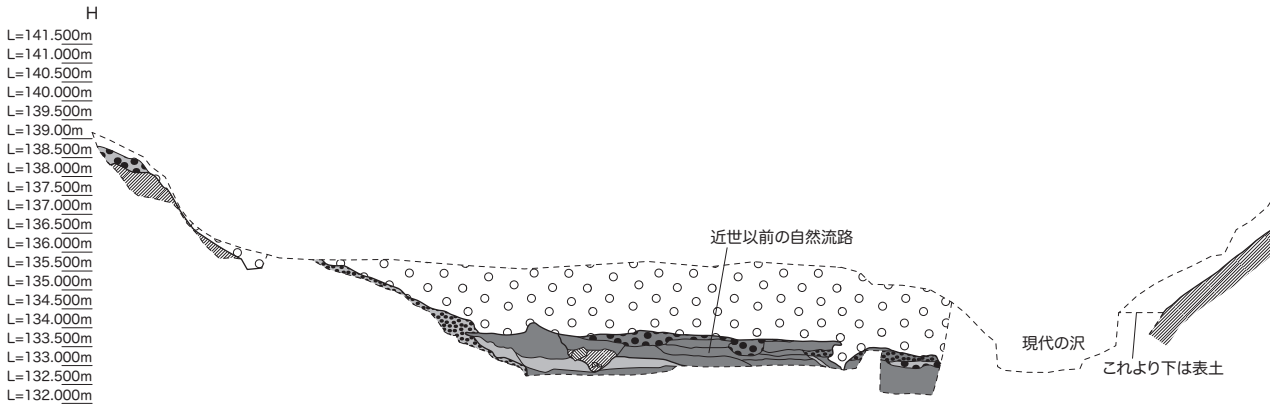


- | | | | |
|--|-----------|--|----------|
| | 暗色シルト質粘土 | | 中間色極細粒砂 |
| | 暗色粘土質シルト | | 中間色細粒砂 |
| | 暗色極細粒砂 | | 明色シルト質粘土 |
| | 暗色細粒砂 | | 明色粘土質シルト |
| | 中間色シルト質粘土 | | 明色極細粒砂 |
| | 中間色粘土質シルト | | 明色細粒砂 |



第 53 図 基本層序 1 (1 : 200)

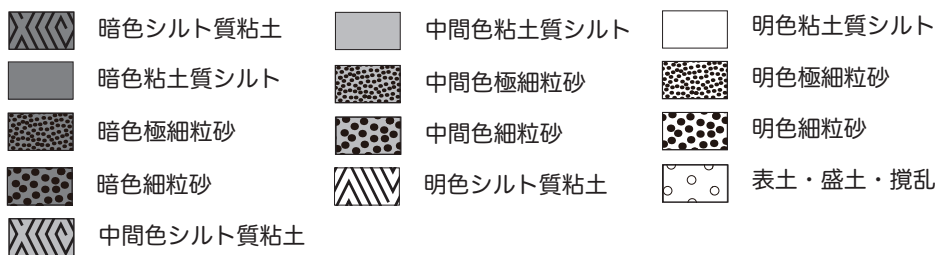
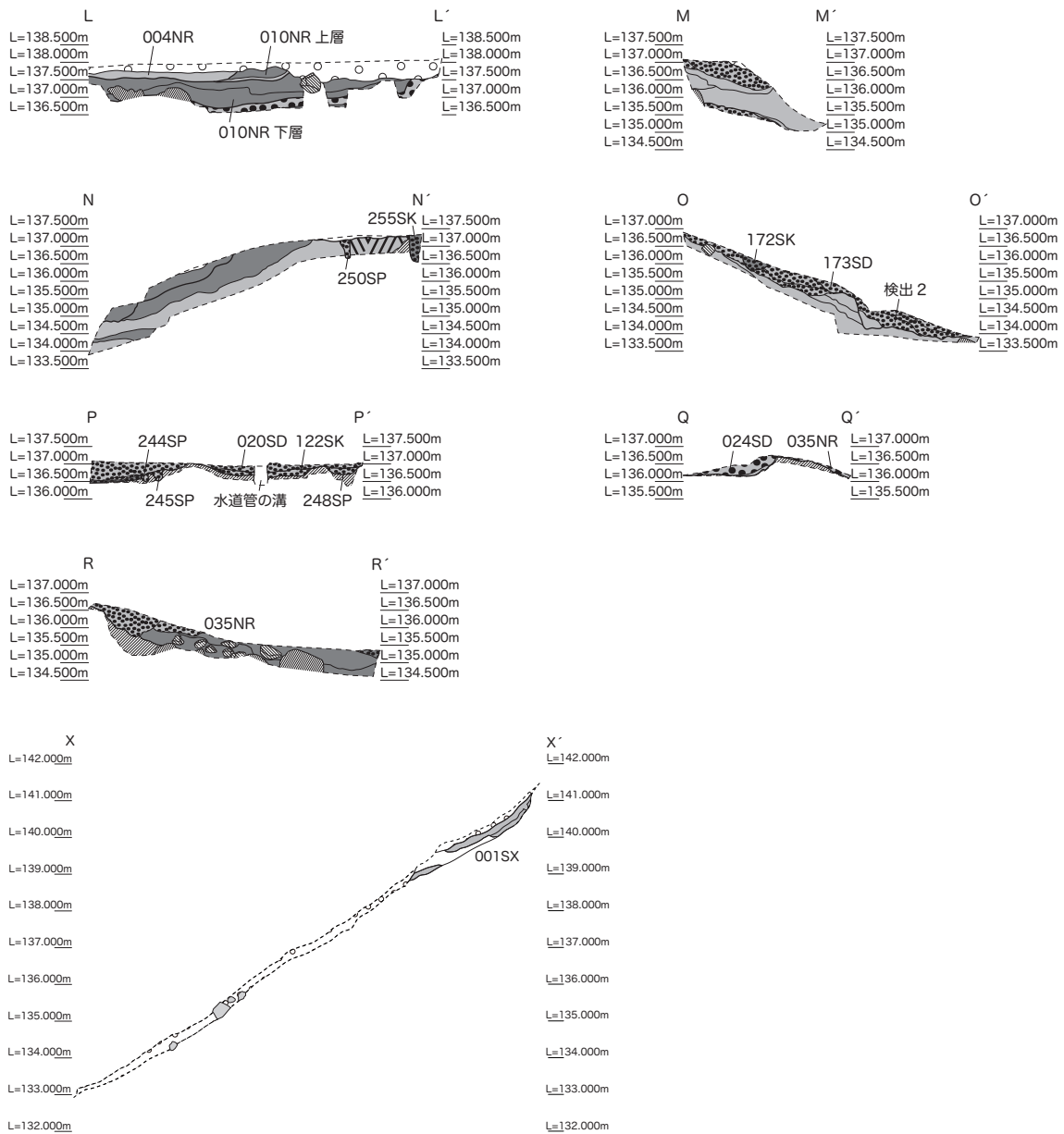
基本遺構図



- | | | | |
|--|-----------|--|----------|
| | 暗色シルト質粘土 | | 中間色極細粒砂 |
| | 暗色粘土質シルト | | 中間色細粒砂 |
| | 暗色極細粒砂 | | 明色シルト質粘土 |
| | 暗色細粒砂 | | 明色粘土質シルト |
| | 中間色シルト質粘土 | | 明色極細粒砂 |
| | 中間色粘土質シルト | | 明色細粒砂 |



第 54 図 基本層序 2 (1 : 200)



第 55 図 基本層序 3 (1 : 200)



欠下城跡全景（北西より）



欠下城跡全景（南東より）

写真図版 2



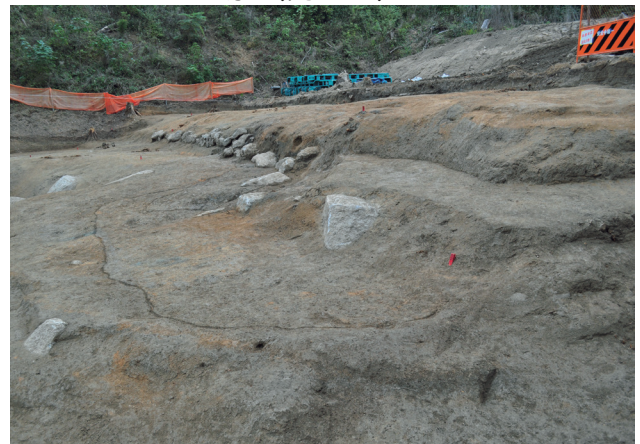
10Aa 区 1 面全景 (南東より)



10Ab 区 1 面全景 (南より)



10Aa 区 上り道に伴う石列 (北東より)



10Aa 区 上段の棚田に伴う基礎石列 (東より)



10Aa 区 棚田とその基礎石列 (南東より)



10Aa 区 003SD 暗渠状施設 (南東より)



10Aa 区 003SD の取水口 (東より)



10B 区 1 面南西斜面 (西より)



10Aa 区 2 面全景 (北より)



10Ac 区 010NR (西より)



10Ab 区 2 面全景 (南より)



10Ab 区 2 面西側 (南東より)



10Ab 区 008SK 堆積状況 (北東より)



10Ab 区 008SK (北東より)



10Ab 区 007SK・057SK (南東より)

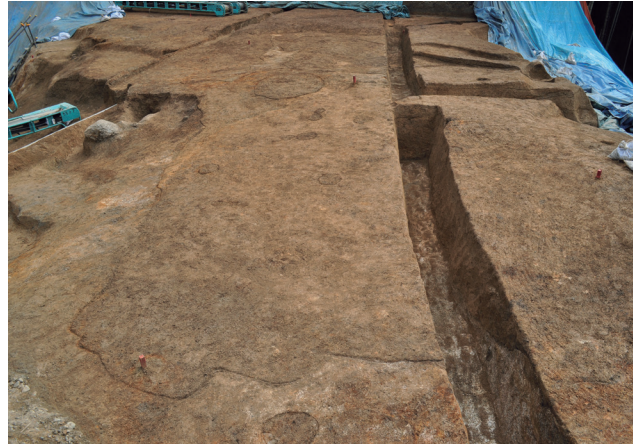


10Ab 区 025SK (南より)

写真図版 4



10B 区 1 面 棚田造成面 (南東より)



10B 区 2 面 024SD など検出状況 (北西より)



10B 区 021SD 最上面出土古瀬戸小皿(E352)



10B 区 023SK (北西より)



10B 区 024SD 上層 (西より)



10B 区 139SP・025SP ~ 030SP (南東より)



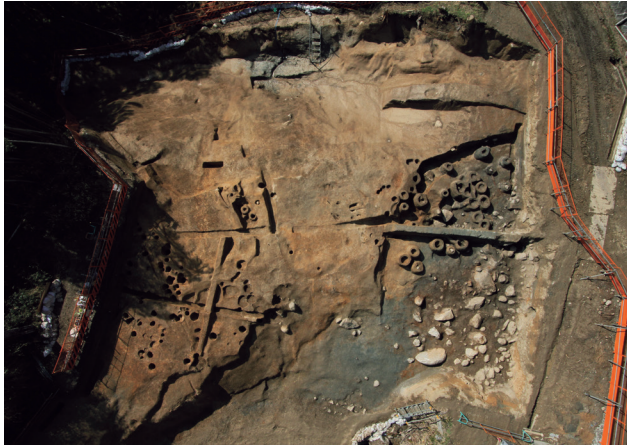
09B 区 010SK・021SD 上層 (北西より)



10B 区 012NR (南東より)



10B区2面・10C区全景（上空より）



10B区中央部2面（上空より）



10B区2面021SD～024SD付近（上空より）



10B区2面035NRと柱穴群（上空より）



10B区2面035NRと柱穴群（南西より）



10B区2面・10C区全景（東より）



10B区2面中央部（北西より）



10B 区 101SK (北西より)



10B 区 120SP (南東より)



10B 区 112SP・113SP (南東より)



10B 区 040SK 遺物出土状況 (南東より)



10B 区遺物出土状況近景 (南東より)



10B 区 021SD 東立ち上がり断面 (南東より)



10B 区 122SK (南東より)



10B 区 024SD 付近 (西より)

写真図版 8



10B 区 027SP (南より)



10B 区 063SP (北西より)



10B 区 130SP (北東より)



10B 区 135SP (西より)



10B 区 145SP (南より)



10B 区 039SP (東より)



10B 区 140SP (東より)



10B 区 142SP・143SP・144SP (南より)



10B区 152SP (北西より)



10B区 164SP (北より)



10B区 156SP (南西より)



10B区 159SP (東より)



10B区 157SP (北より)



10B区 160SP (南東より)



10B区 161SP (東より)



10B区 162SP (東より)

写真図版 10



10B区 174SP (東より)



10B区 186SP (北西より)



10B区 181SP (北東より)



10B区 189SP・190SP (西より)



10B区 193SP・213SP・214SP (北西より)



10B区 204SP (北西より)



10B区 195SP (北より)



10B区 217SP (南より)



10B区 218SP (南東より)



10B区 226SP・227SP・228SP (西より)



10B区 238SP～241SP (南西より)



10B区 233SP (南西より)



10B区 243SP (南より)



10B区 220SP (北西より)



10B区 040SK の南にある根石 (南東より)



10B区 257SP (北東より)

写真図版 12



10C区全景（南より）



10C区北側斜面全景（西より）



10C区173SD（南西より）



10C区172SK（南より）



10C区012NR遺物出土状況（北東より）



10C区012NR遺物出土状況（東より）



11A区全景（東より）



11B区全景（北より）



欠下城跡出土遺物





E083



E085



E086



E088



M001



S003



S004



S005



S006



S007



E096



E099



E102



S008



E117



E122



E125



E127









E393



E395



E396



E397



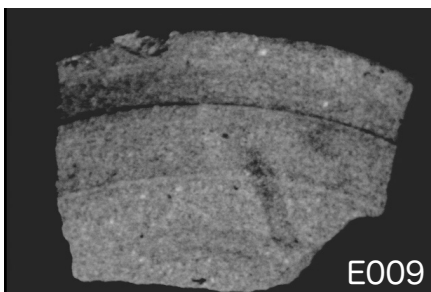
E427



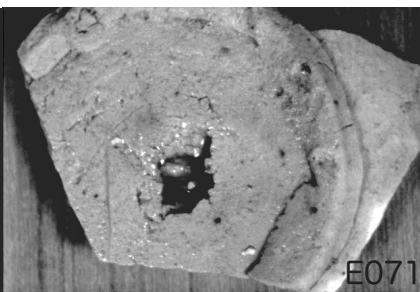
E253

E059

E355



E009



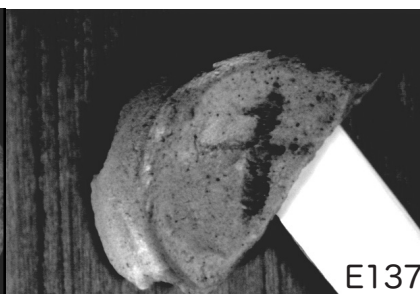
E071



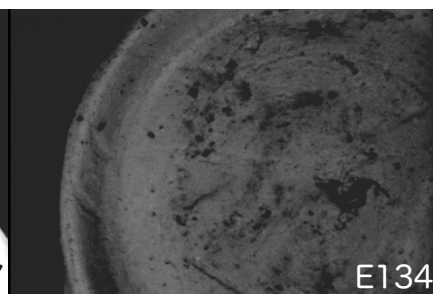
E117



E191



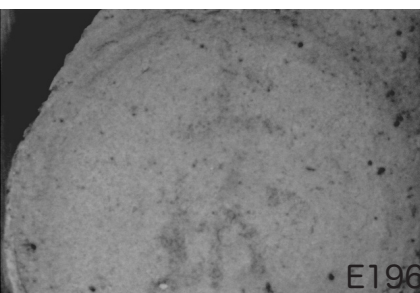
E137



E134



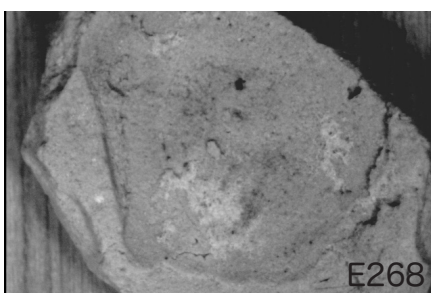
E148



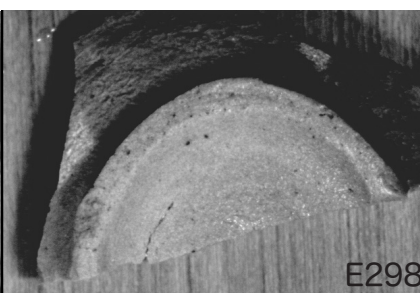
E196



E248



E268



E298

抄 録

ふりがな	かけしたじょうあと							
書 名	欠下城跡							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第192集							
編著者名	蔭山誠一・鬼頭 剛・中村賢太郎・小林克也・伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林鉦一							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かけしたじょうあと 欠下城跡	あいちけん しんしろし 愛知県新城市 やべあざかけした 矢部字欠下	23221	76175	34度 55分 27秒	137度 30分 17秒	2010.10.25～ 2011.2.25 2011.6.3～ 2011.8.10	4,060m ²	第二東海 自動車道 横浜名古屋 線建設に 伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
欠下城跡	城館	鎌倉時代、 室町時代、 戦国時代	掘立柱建物2棟、 溝10条、土坑多数 、自然流路5条	灰釉陶器、南部系陶器、 古瀬戸陶器、大窯陶器、 中世土師器、常滑産甕		調査区に隣接する市 指定史跡欠下城跡 と勅養寺旧観音堂と の関連遺跡		
文書番号	発掘届出(22埋セ第137号・2010.8.19) 通知(22教生第1217号・2010.9.7) 終了届・発見届・保管証(22埋セ第266号・2011.3.25) 認定(23教生第98号・2011.4.8)							
要約	本遺跡は、平安時代後期から始まり、12世紀～13世紀前半に推定される土石流の後に、掘立柱建物・溝・土坑からなる居住域が鎌倉時代から室町時代まで続き、その後史跡欠下城跡のある丘陵との境界となる区画溝が確認できた。鎌倉時代には調査区の一部で墓域も形成された。新城地域の寺院跡と城館跡との関係を解明する上で、貴重な資料になるものと思われる。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第192集

欠下城跡

2015年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社